御卽位風記

義稙年內延引ヲ申入ル要脚萬疋進獻

閏六月八日、甲午、晴、〇中略御卽位可爲八月中之由、頭辨(萬里小路秀房)送使者、帥(三條西公條)對面、
廿二日、戊申、廣橋亞相來臨、於門謁之、御卽位可爲八月事談之、
廿七日、癸丑、廣橋入來、於門立談、御卽位風記令寫見之、
禮服御覽　八月八日　同廿日
敍位同前、
御卽位　同廿七日　廿八日云々、
八月六日、辛卯〇中略又御卽位延引間事被仰下之間、其子細等申入了、
十月六日、辛卯、廣橋來、御卽位當年中可有御延引由、室町殿被申之、又御卽位用脚萬疋被進之云々、
〇卽位ノ儀ヲ行ハセラル、コト、大永元年三月二十二日ノ條ニ見ユ、
五日、庚寅、僧賢等ノ、泉涌寺新方丈竝ニ無量壽院ヲ管領シ、泉興寺領ヲ押領スルヲ停メ、泉涌寺及ビ雲龍院ヲシテ、之ヲ安堵セシム、尋デ、幕府モ亦、之ヲ令ス、
〔泉涌寺文書〕二〇山城

綸旨供僧所賢等勤行ヲ勤メズ

幕府奉書

名主沙汰人ヲシテ年貢

當寺新方丈幷無量壽院等、爲供僧所之處、至領知以下、賢等數年押而管領之、一向不及勤行沙汰之由、近日被聞食畢、殊其身背朝儀、不能寺中出仕、彼是無謂次第也、就中泉興寺領又以同前云々、所詮、悉爲本寺幷雲龍院令進止之、長日懃行無退轉、彌致國家懇祈、可勵寺院再興者、天氣如此、悉之、以狀、
永正十七年八月五日　左中辨(萬里小路秀房)(花押)
泉涌寺衆僧中

泉涌寺新方丈幷無量壽院等事、爲供僧所之處、數年賢等僧押而管領云々、次泉興寺領事令押領云々、既被成綸旨之上者、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、
永正十七九月五日　貞運(飯尾)(花押)
時基(齋藤)(花押)

當寺雜掌

新方丈幷無量壽院・泉興寺領城州所々事、可爲泉涌寺同雲龍院進止之旨、被成綸旨之上

者、早年貢以下、如先々可致其沙汰由、所被仰出之狀如件、
永正十七
九月五日　　貞運（花押）
　　時基（花押）

寺領城州
所々名主沙汰人中

泉涌寺三條西實隆ニ詢ル

實隆勅裁幷ニ女房奉書案ヲ調ヘ遣ス

〔實隆公記〕八月十七日、壬寅、晴、泉涌寺順長・見昭等來、新方丈・無量壽院等事、有談旨、

廿一日、丙午、雨降、順長・見昭來、順長一ヶ振舞、勸一盞、

廿三日、戊申、晴、順長・見昭來、泉涌寺勅裁幷女房奉書案調遣之、

義稙、自筆法華經普門品ヲ、美濃美江寺ニ納メントシ、三寶院義堯ヲシテ、其外題ヲ書セシム、

〔永正十七年記〕八月五日、天晴、僧正（宗永）御房・予（嚴助）出京、其比自武家（義稙）門跡（義尋）へ、觀音經外題、金泥ニテ被申云々、此御經事、御影（美乙）寺觀音江一字三禮ニ、大樹被染御筆經也、

○義稙、法華經普門品ヲ美江寺ニ納メントシ、義堯ヲシテ、之ヲ代筆セシムルコト、一字三禮經

十三年十一月二十九日ノ條ニ見ユ、

幕府、賀茂社境内幷ニ小山鄕百姓等ノ、新開田畠ノ年貢ヲ緩怠スルヲ停メ、同社ヲシテ、之ヲ收納セシム、

刈分トシテ神用ヲ全ウセシム

〔賀茂別雷神社文書〕二　○山城

賀茂社境内、小山鄕内田畠新開分事、百姓等近年恣令開作之、不及土貢沙汰之間、度々雖相届之、稱侘言無沙汰無盡期云々、太無謂、早任社例、爲刈分可全神用之由、被仰出候也、仍執達如件、
永正十七
八月五日　　貞運（花押）
　　時基（花押）

當社氏人中

錢主ノ好ニ依リ沽券ヲ調遣ス

幕府、德政令ニ依リ、賀茂社前神主竹内基久ノ借錢ヲ棄破ス、

〔當局所領雜々〕○宮内廳書陵部所藏

賀茂社前神主竹内基久申以田地三段要脚三貫文令借用、依錢主好、沽券狀調遣之云々、如此類任德政分一進納之條、被棄破畢、○德政令ノコト、二月十二日ノ條ニ見ユ、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十七年八月五日

錢主土屋能忠

基久ト土屋トノ爭論

賣却ナレバ壹段千疋ナルベシ

永正十七年八月五日

永正十七
八月五日

土屋三郎(能忠)左衛門尉殿

(諏訪)長俊(花押)
(松田)秀俊(花押)

(端裏書)「加茂社前神主基久支狀 永正十七十二七」

賀茂社前神主基久謹支言上

土屋三郎左衛門尉能忠掠申上意間之事

一田地三段限永代沽却之間、致買得知行云々、無其謂、此田地三段爲質物三百疋致借用者也、彼田地於賣買者、雖爲壹段、可爲千疋賣買、然者三段之代三千疋可爲賣券者哉、此方支證可出對仕之事、抑云神領、云代相違、輙可賣渡哉、是以可有御推察歟、

一自去年三月、三貫文加五文子借用仕者也、口入人在之、然間任德政御法旨、棄破御下知申給者也、

右是等趣被達上聞、申給棄破御下知旨、不可有相違由、被仰下者、忝畏可存者也、仍粗謹支言上如件、

三條西實隆長橋局ニ祗候ス

百九十一世

全藏軒ニ塔ス

同軒開基

法系

永正十七年十二月　日

六日、辛卯、御不豫、

〔實隆公記〕八月六日、辛卯、〇中略入夜向長橋局、御不豫事訪申入之、

〔二水記〕八月六日、〇中略今日當番、依不具不參、傳承、禁裏御不例云々、但不被指煩歟、

前東福寺住持東梁要津寂ス、

〔扶桑五山記〕五山城州慧日山東福禪寺住持位次　百九十一要津、諱東梁、永正十七八月六日寂、塔于全藏軒、

〔五山歷代〕東福禪寺歷代住持位次　百九十一要津東梁嗣儀雲敦(示敦)、虎關七世、永正十七年庚辰八月六日寂、塔全藏軒、

〔扶桑五山記〕五山城州慧日山東福禪寺諸塔　全藏軒要津和尚、名東梁、永正十七八月六日、龍眠下

〔東福寺諸塔頭幷十刹諸山畧傳〕諸塔頭廢絕之分　全藏軒

開基東福百九十世(一脫カ)要津東梁

永正十七年八月六日寂、虎關七世、嗣法儀雲敦、

〔五岳前住籍〕慧日山東福禪寺歷代住持位次　百九一要津、諱東梁、永正十七八月六滅、塔全藏軒、〇和漢禪刹次第異事ナシ、

〔慧日山宗派圖〕乾虎關派下

△龍眠
○東福東昇希杲

永正十七年八月六日

一鳳藏主ノ像ニ贊ス

永正十七年八月六日

○東福 △龍眠 要津東梁

仙府東眞

眞如 瑞倫東祥

○東福 △龍眠 叔龍東興

〔一鳳藏主像贊〕 要津梁

梧栖一鳳藏主、爲佛母夏雲(師閑)和尙的々相承裔孫、領知院事日久矣、雖然末運推其塞址難存、吾門六七輩之英衲爲證、而捨院並寺產等、寄附于三聖開山寶覺(湛照)禪師塔、院衆領以遷開山祖像、改院號曰圓通寺、不涉工錢一文兩文、祖塔再興之功、可謂在知藏一臂矣、報恩懇志之厚、豈過焉哉、此故安夏雲遞代諸祖像及公寫照、置于開山尊像右、蓋擬雲居三塔也、仍門下諸老、命予(東梁)令題贊語、不能拒辭、叩系厥上云、夏雲末孫、月谷(正好)的子、胸絕點塵、脚蹈實地、雖現幻質於指中、猶藏半身於空裡、滅不滅、生不生、似則似、是則是、露、豁開佛母堂、證入圓通裡、

永正龍集甲戌(十一年)臘月十三日

宇都宮ヨリ長山信濃來援ス

由隆方志賀備中守白土淡路守ノ討死

鐵炮ヲ使用ストノ說

前東福要津叟東梁書 印 印

十三日、戊戌、陸奥岩城由隆、白川義永ト共ニ、那須政資ヲ、下野山田城ニ圍ム、政資ノ父烏山ノ城將那須資房、宇都宮忠綱ノ援ヲ得テ、政資ヲ救援シ、由隆等ノ軍ヲ繩釣原ニ破ル、

〔那須記〕 一岩城二郎守隆(由)、千餘人にて、資房(那須)の子壹岐守政資か居城山田を取卷攻けれい、資房後詰として、永正十七年庚辰八月十三日烏山を出馬して、山崎にかゝり來り、旗下の事なれい、宇都宮より長山信濃貳百人にて加勢ス、岩城も山田城を捨、中川を渡し、山崎より五町東方繩釣原に屯せり、時に資房一百人餘、一矢を射す眞驀に駈入突立けれい、敵こらへす、後の河岸へ颯と退くを、追かけて討捕ける、岩城の羽翼志賀備中・白土淡路二人名を惜み、吃と目配して引返し、姑く猛勢を振ひけるか、押隔られ所々にて討死ス、佐竹浪人石澤九郎、十七才、志賀か首を得たり、今度鐵炮といふ物有、岩城陣中ニ響キ、天地を動かしけり、○下略

〔那須譜見聞錄〕 十 永正十三年六月七日、先資久を刺殺、其後資永自害す、此時兩那須一統して、資房子息政資山田の城籠、資房烏山に在城也、岩城の守隆(由)、此時那須

永正十七年八月十三日

政資を討取、那須を領知せんと一千餘騎引率、山田の城を取巻て責、資房、永正十七年八月十三日、爲後詰、烏山より打出、以之外に無勢なりけれい、宇都宮より爲加勢と、長山信濃守百騎計にて馳加れい、敵是を見て、山田の城を巻ほくし、中川を渡、山崎か五町餘東繩釣原に陣取、此叱初て奥の方へ鐵炮渡、岩城陣へ打懸、一同に喚叫、大勢の中へ切入、火花を散して戰ける、敵不怺、後の河岸に引退、追立々々討取けれい、守隆もすてに討死と見へけれい、老臣志賀備中守・白土淡路守各相議して取て返、爰にて我々討死せすして不可叶、大將い御退候へと、勝誇たる敵の中へ切て懸、味方に佐竹浪人石澤新五郎と云もの、十七歳と名乘て一陣に有けるか、鐵炮にて志賀備中守を打落、首を取、白土淡路守も同討死なり、其間に岩城衆不殘引取、兩人の墓此所に在、〇上下略

〔大關系譜略傳〕　美濃守宗增傳ニ曰、寛正四年癸未、黑羽城ニ誕生ス、明應年中居城ヲ黑羽根ヨリ堅田郷山田ニ移ス、〇中略、那須資永、同資久ヲ刺殺シテ、自双スルコトニカ、ル、十三年六月七日ノ條ニ收ム、永正十七年庚辰八月九日、白川義永此由ヲ傳聞テ怒リ、大軍ヲ以テ山田城ヲ攻サセケル、義永常州繩釣ノ軍ニ打負ヌル由、山田ノ寄手等聞テ、那須勢ノ後詰ノ勢ト別、包マレン事ヲ恐レテ、圍ヲ解テ東國ニ歸ラントスルヲ、城中ヨリ見テ、（大關）宗增ヲ初メ、金丸等下知シテ、火花

ヲ散シ合戰シケレハ、敵ノ大將佐貫三郎、五十騎ニテ篠女ノ澤ニ落行ヲ、宗增・稻澤（播磨）幡摩八十餘騎ヲ以テ追討シケル、佐貫モ取テ返シ挑戰スト雖モ、那須勢追立ラレ、既ニアヤウク見ル處ニ、敵兵力ヲ處ニ、宗增蹈留テ殿シ、大音聲ヲ揚テ、味方ノ敗軍ヲ勇メケレハ、稻澤取テ返シ、宗增ト力ヲ合セ、味方ノ人數ヲ引モトシ、宗增采配ヲ振テ追翻ケル、此時味方兵宗增カ殿ヲ稱美ス、

〔下野黑羽〕大關家譜　〇上略、那須資永、同資久ヲ刺殺シテ、自双スルコトニカ、ル、十三年六月七日ノ條ニ收ム、因玆白川義永、義永ハ資永之實父也、宗增之聞、爲加勢那須資房男政資被移置于大關城、其後白川・岩城兩軍引卒一千餘騎雖攻不落、資房爲後責、終奥州勢敗走、

〔白河古事考〕　四　白河義永ハ、我子ノ仇ナレハ、那須ヲ亡スヘシト、岩城常隆（典、下同ジ）岩城風土記ニ、岩城ニ兩人ノ常隆アリ、可山ト號セシ常隆ハ、永正ヨリ前ニアリ、左京大夫常隆ハ、天正ノ頃ナリ、續武家閑談ニ、岩城次郎守隆トアリ、コノ說是ナルヘシ、ヲ語ラヒ、手勢五百騎・岩城一千餘騎、那須山田ノ城（續武家閑談、是時ノ城主ハ那須資房ノ子壹岐守政資ナリ、）ヘソ押寄ケル、頃ハ永正十七年八月十二日、岩城・白川兩將、岩下ノ峠ニ陣ヲ取、城ノ案內ヲ撿分シ、白川ハ岩下ノ峠ヲ下リ、城ノ西ヨリオシ寄ル、岩城常隆ハ、城ノ南ノ山難所ナレハ、道ヲ拵ラヘ登ルヘシト

永正十七年八月十三日

テ、人夫ヲ集メ路ヲ作リ攻上ル、此處ヲ今ニ岩城坂ト云、岩城ノ先陣志賀備中守貞弘二百餘騎・大關・太田原・金丸・作山等ノ士卒、火ヲ散ノソ戰ケル、稻澤播摩守（勝）・伊王野二郎左衞門百二十騎・芦野・澤村八十騎餘、馬煙ヲ立、山田ノ城ノ後詰ニ駈集ル、城ノ士卒是ヲ見テ、味方ヲ城中ヘ入ント、其勢百六十騎打テ出、双方ヨリモミ合ス、寄手戰ヒ疲レ、猶豫スル處ヲ、後詰力ヲ得テ駈破リ、坂中マテ進ケル、山田ノ注進烏山ヘ聞ヘケレハ、資房（那須資氏ヨリ上ノ庄・下ノ庄ヲ分、二家トセシカ、資永亡シ後、資房一人上下ノ庄ヲ領ス、）都合五百餘騎、山崎ニ陣ヲ取ル、寄手此由ヲ聞ヨリ、烏山ノ大勢ニ引包レテハ叶ハシ、中途ヘ駈合一戰ヲ遂ントテ、關孫三郎・佐貫三郎、（常陸保内ニ佐貫村アリ、此三郎其人ナルヘシ、保内ハ依上保也、本白川領、永正ノ頃岩城ニ攻メトラル、事、常陸國志ニ見ユレハ、此度岩城ノ屬軍タリシナルヘシ、）須釜次郎左衞門（須釜ハ、石川郡ノ村名、石川ノ別族大寺ノ石川氏、藤田ノ石川トモ云、次郎左衞門ソノ族ニテ、須釜ニ居タルコトナルヘシ、）ニ五百餘騎ヲ差添、山田ノ城ニ殘置、岩城・白川ノ兩將九百餘騎、中川ヲ渡シ、佐良土ノ家ヲ燒拂ヒ、繩釣ノ臺ヘ打上リ見渡セハ、烏山勢押來リ、閧ヲトツトアケ、レハ、味方モ同シク聲ヲ合セツヽ、梅薗ニテ入亂テ攻戰フ、烏山多勢ニ切立ラレ、山崎サシテ引返ス、然ルニ、藤田・大嶋・大輪・石澤・鮎ケ瀨、那須隨一ノ强弓ノ名人差詰引詰サン〳〵ニ射ケレハ、前ニ進ム軍兵十六騎射落サル、白土淡路守ハ、藤田カ矢頭ニ掛テ空シクナル、白土カ手勢大將ヲ討レテ、志賀備中守カ手ト一ニナラント、東ヲ差シテ引テ行ク、志賀ハ白土討レヌト聞、此ヲ引ナハ、末代マテノ恥ナリト、那須勢ノ眞中ヘ駈入、蜘手十文字ニ切テ回リケレハ、敵味方手負死人其數ヲ不知、備中今日ヲ限リト思ヒケレハ、一足モ引ス戰ヒシカ、餘リニ疲レ相引ニ引、暫イキヲツキ居タルニ、鮎ケ瀨源藏進出、弓ニ矢打ツカヒ兵ト發ツ、其矢志賀カ胄ノ鉢ニタツ、後ヘ拔テ馬ヨリ落ルヲ、石澤新五郎（續武家閑談ニ、佐竹浪人ニテ年十七歲ナリト、）走寄テ首ヲ取ル、岩城・白川兩將ハ志賀・白土討レヌト聞、引退ント色メキ渡ルヲ、資房太皷ヲ打攻カクレハ、常法寺中務（福原ノ東南ニ、淨法寺アリ、福原ハ今那須家ノ陣屋本ナリ、森田村ハ烏山近クニアル處ノ村名ナリ、）千本十郎・森田帶刀・與長門・池澤主稅・高瀨藏之助ヲ始、我モ〳〵ト箒川ヲ打渡リ、佐良土ノ宿ヲ馳通リ、湯津神原ニテ追詰ル、蚊ノ又筑前・大越豐後・栗出久太郎（那須記ノ内ニ、岩城常隆威勢强ク、田村方ヘ勢ヲ出シ、小野新町城主小野左衞門尉幷栗出ノ城主栗出久太郎降人トナル、蚊ノ又・大越兩城ヲモ攻落ス、按スルニ、其時コソ從ヒシ人々ナルヘシ、）將ハ遙ニ落延ヒ、本國サシテ還リケル、湯津神原ニテ討取ル首百八十三、獄門ニ掛、骸ハ一所ニ集メ塚ヲツキ、侍塚ト號ス、（今ニ其塚アリ、水（德）戶發テ見玉フヨシ、川光圀）岩城・白川打負ケレハ、山田ノ城ニハ須釜次郎左衞門・佐貫三郎陣所ヲ引拂ヒ落タリケリ、城中ヨリ是ヲ見テ、大將政資打テ出、佐貫三郎篠女澤ニテ討レ、大將關孫三郎モ此澤ニテ討ル、須釜次郎左衞門ハ、河

退イテ資房ノ軍ト會戰ス

湯津上原ノ戰

侍塚

關孫三郎等ノ戰死

渡ノ澤ニテ金丸ノ爲メ討ル、佐貫ノ死骸ハ塚ニ築、佐貫塚ト名付テ今ニアリ、須釜カ軀モ河渡ノ澤ニ埋ミ、此澤須釜澤ト云、續武家閑談ニ、此戰ヲ記メ、今度初テ鎭炮岩城カ陣中ニヒヽキ、天地ヲ動シケリトアリ、白川邊鎭炮ノ傳ハリシハコノ頃ナルカ、

〔安得虎子〕三那須記　爰に岩城次郎守隆(出)千餘騎にて、資房の子壹岐守政資か居城山田を取卷攻けれハ、資房後詰として、永正十七年庚辰八月十三日烏山を出馬して、山崎ニ懸りける、旗下の事なれハ、宇都宮より長山信濃守二百騎にて加勢す、岩城も山田の城を捨、中川を渡し、山崎より五町東方繩釣原に屯せり、時に資房二百餘騎、一矢をも射す眞驀に駈入、頻りに突立けれハ、敵悚へす後の川岸へ颯と退くを、追懸々々討取けり、岩城の羽翼志賀備中・白土淡路兩人名を惜み、きつと目くはせして引返し、暫く猛勢をふせきけるか、押へたてられ、所々にて討死す、佐竹浪人石澤五郎十七歲、志賀か首を得たり、今度鐵炮といふもの有り、岩城陣中に響き天地を動しけり、〇上下略

〔那須譜見聞錄〕三那須系圖

資實

資房太郎、修理大夫、

岩城常隆(由、下同ジ)攻那須山田之城、城郭堅固、敵引退、亦出張、於繩釣原及合戰、味方大得勝利、悉討取敵、以死骸爲塚、俗謂之侍塚、(尚具守後矣)法號唉月源藤大禪定門、

永正十三年丙子六月七日、上下之莊爲一統、戰爭悉止、大成平均、當此時、奧州岩城左京大夫常隆(一作下總守非也、)拔隣境之城堡、其勢强大、小野左衞門(小野新町之城主、)栗出久太郎(栗出之城主、)皆降之爲先鋒、且拔蚊股・大越兩城、近境武士不招而靡風矣、時永正十七年、常隆率一千餘騎、(一說、白川義永賴常隆、發手勢五千餘騎從之云々、)發向于當國、以圍攻嫡子壹岐守政資所居同郡山田城、兼知之、召集大關・大田原・金丸・佐久山等諸將、開木戶衝出大戰、八月十三日、烏山資房爲後援、率稻澤播磨守・伊王野次郎左衞門百二十騎、芦野・澤村合八十騎、來陣于山崎、又宇都宮爲援兵、長沼信濃守(出)二百騎加勢矣、(一說、此時吾勢興野・龍田・森田・高瀨・小倉・井・金枝・館田・月次云云、)而言、後陣則大桶三河守・谷田越前守・白久隼人・高岡采女・片平八郎・戶田主水・三輪宮內左衞門、前後陣總三百五十騎、但宇都宮外之也、於是敵陣留關孫三郎・佐實(眞)三郎・須釜三郎左衞門五百餘騎、而岩城・白川之兩將率九百騎、解圍、總軍渡中川、燒佐良土民家、踰帚河、陣于繩釣原、(從山崎東五町餘、)資房不交地(他カ)勢、纔率旗下勢二百騎力戰、大得勝利、得首級大多、出城勢力屈、悉退後河邊、吾軍追北大進、斬獲已甚、岩城之雙翼志賀備中守・白戶(一作土、)淡路守、廻

〔轡カ〕輿驅入吾陳而大血戰矣、吾陳有石澤新五郎者、元佐竹人、今仕吾、一說作孫之丞、自稱十七歲、突志賀所乘馬腹落之、挫獲首、後號所葬曰志賀塚、白戶同戰死、收斬獲敵徒死骸埋之爲塚、俗謂之侍塚矣、此時塚(マヽ)封內未知鐵炮者、始聞諸岩城陣中云々、

一說、志賀・白土五百餘騎、吾軍雖當之銳戰、衆寡不敵、吾軍三百五十騎退于山崎、於是兩家兵亂備追、至時吾陳精兵藤田・大嶋・大輪・石澤・鮎河瀨揃鏃射之、於是白土、爲藤田殞命、志賀忿怒而入吾軍血戰、吾戰士小倉藏人者、爲志賀郎黨內藤左馬助破膝口已危、吾將憐之、取民戶遣戶得乘之、送小倉之鄕、中途而死、今謂之小倉塚矣、在片平林中也、志賀戰屈、少時引退、鮎河瀨源藏射之斃之、石澤孫之丞走來獲首、於是兩家之勢將退散、吾大將振猛勢鳴鼓進、淨法寺中務・千本十郎・森田帶刀・興野長門・池澤主膳・高瀨內藏助等、其他三百餘騎大進、岩城・白川之勢懼退矣、爲其賞賜三輪村、住石澤、以三輪・戶田・片平・吉田四ケ所之政所矣、又山崎村任簗瀨、於藥利村賜永樂五貫文地、其他在功輩皆預褒賞矣、所斬首級百五十云云、右一說大同小異、存以備矣考矣、且存于篠女合戰事如左、〔澤脫カ〕

兩家兵敗於繩釣原、烏山之多兵欲援山田城、彼所留須釜・佐貫大驚、解陣營將走、於是山田城將政資出城欲追之、芦埜彈正・伊王野次郎左衞門・金丸伊豫守・同備前守・河田六郎兵衞・佐久山淡路守・澤村三郎左衞門・太田原出雲守・同山城守以下大進追之、須釜・佐貫敗北、佐貫五十騎計遁于篠女澤、金丸・稻澤・大關八十騎追之急、佐貫忿怒返戰、吾軍少止、於是佐貫遁於藥師堂前、政資率二十騎又追之、稻澤之家士白石十藏獲佐貫首矣、敵將關孫三郎亦殞命、須釜者金丸獲之首、

政資

○那須資親ノ養子資永、資親ノ實子資久ヲ殺シテ自刃シ、同族資房、那須上下二莊ヲ併有スルコト、十三年六月七日ノ條ニ、由隆、資房ヲ下野上川井城ニ攻メ、資房、烏山城ニ退クコト、大永元年十一月四日ノ條ニ見ユ、

三十首續歌ノ披講

讀師甘露寺元長

十五日、庚子、觀月當座和歌御會、

〔實隆公記〕八月十五日、庚子、晴、〇中略入夜參內、卅首續歌有披講、於常御所賜御盃、深更退出、

〔再昌草〕二十〇宮內廳書陵部所藏　永正十七年庚辰

同夜內裏(八月十五日)にて、題をさくりて、三十首歌講せられしに、勅題讀師民部卿(甘露寺元長)、講師秀房朝臣(萬里小路)、發聲民部卿入道(冷泉爲廣)、彼歌隆康(鷲尾)講之、

講師萬里小路秀房發聲冷泉爲廣二條西實隆ノ和歌

參仕ノ人々

月前聞鴈

おりしもあれなきぬる鴈かかきつらね昔おほゆる月の雲井に

田家月

色かいる月もよな〳〵をしねもる袖さむからし岡のへのさと

寄月變戀

うらみはや空よりこえし浪なれはわか松山い月やくるらん

【二水記】八月十五日、午程向山科亭、有當座披講、發聲予勤之、(鷲尾隆康)纔五首終程、從禁裏有召、今夕御當座可令參仕云々、仍逐電歸家、則參御所之處、今日先有和漢之御會、十日御延引、未果之程也、頃而御會果了、(○月次和漢聯句御會ノコト、二月十三日ノ條ニ見ユ、)此後則各候御前、御三間、探題、御人數逍遙院(三條西實隆)・民部卿入道・民部卿・中御門大納言(宣秀)・冷泉前中納言(永宣)・帥中納言(三條西公條)・中山中納言(康親)・予・山科三位(言綱)・頭辨秀房朝臣・橘以緒(薄)等也、各二首・三首也、清書了有披講、其儀如常、讀師民部卿、講師頭辨、發聲民部卿入道也、御製五反、三反相交、親王御方三反、逍遙院二反也、發聲歌予出之訖、

(頭書)「今夜月色無□□庶□□尤可賞々々、」

○三條西實隆、飛鳥井賴孝ノ爲メニ、觀月和歌ヲ詠ズルコト、便宜左ニ合敍ス、

【實隆公記】八月十五日、庚子、晴、(飛鳥井)賴孝當座題持來之、詠遣了、

【再昌草】(二十○宮內廳書陵部所藏)永正十七年庚辰

八月十五日夜、少將賴孝すゝめし當座、

十五夜月

あまのかるも中の秋の空の月我からてらす名やいかくれん

花洛月

夜の雲山はるかなる中空に月や都のためとすむらん

月前述懷

おり〳〵に尋し道の跡とめてわすれぬ物をやとの月影

同會、帥中納言にかいりて、

田家月

とまをあらみもりくる露も袖の上の月にかくれぬ小田のかり庵

月前風

第二十四世
釋蓮社
三河大恩寺
第二世

吹からに月をむかふるこゑすむや雲の夕ゐる嶺の松かせ

知恩院訓公肇譽**寂ス、**

〔華頂誌要〕五歴代略譜　第二十四世　肇譽訓公上人　了曉資、號耀蓮社、三河大恩寺中興、永正八年住職、同十七年八月十五日寂、○華頂要略・淨源脈譜異事ナシ、

〔御津山誌〕第二祖中興釋蓮社肇譽上人訓公大和尚

生國姓氏未知、投開山了曉上人、剃染受業、則爲當寺(大恩寺)第二世、然依御津大明神延喜式内、當寺鎭護、詫宣、移大運寺於御當山、神詫之寸緣起委記、改號御津山、○下略

肇譽上人知恩院住職之節、從後土御門帝、東山傳之三尊唐筆・善導大師同御自筆御名號・弘法大師御名號等拜領、當寺江寄贈之趣申傳へ、于今鎭藏之、

御津山大運寺推鐘

夫以、鐘者調御世尊梵音、異生除罪之良因也、然則、佛慈悲圓滿、利益衆生方便也、故晝夜鳴鐘、是併如來清淨之妙音、因茲一推鐘聞類、遠近響聽輩、罪障忽消滅淨業正因無疑、大日本國三州寶飯郡御津山大運寺推鐘大施主信心淨女寄三十三回預修志者也、

于時文龜元辛酉年十月十五日　住持沙門肇譽訓公書之、

眞影

三河信光明寺第二世

法系

肇譽上人者開立(三河)同州御馬邑乘願寺、今御當山(大恩寺)之末寺也、永正十七庚辰年八月十五日、六十六才ニノ辰ノ時入寂、但傳燈惣系譜ニハ、永正七年ト記ス、肇譽上人眞影、第十四世誓岩上人代、天正八庚辰向七月造立、八月十五日成就、洛七條大佛師宮內法印弟子奧村與七郎作之、其後享保四己亥年、香譽路順三十世、上人代、相當肇譽上人二百回御忌、依之兩上人眞影再興、大佛師定朝三十四世佐々木了安法橋修造之、

御當山歴代

御馬乘願寺開山
二世釋蓮社肇譽訓公上人　永正十七辰八月十五日、同年迄、(文政十二年)

〔信光明寺緣起〕○三河

○上略　二世釋蓮社肇譽上人訓公和尚　永正十七年八月十五日寂、○中略

第二世肇上人入本山知恩院爲二十三(四)世祖矣、

〔淨土傳燈總系譜〕中

了曉
　肇譽　釋蓮社訓公、三州信光明寺第二世、又同州大恩寺(ヤ)中興、後住知恩院、第廿四世、永正七年八月十五日寂、
　德譽　後改燈譽、

永正十七年八月十六日

〔總本山知恩院舊記採要錄〕

一二十四世之住持肇譽訓公大和尙 茂、岩津信光明寺住職、且御津大恩寺中興之住持ニ而、藏人丞出雲守(松平)長親君格別之御歸依にて、御親み厚く、宗祖大師廟堂前へ、銅鐘一口御寄進御座候、尤後年鑄換は仕候得共、廟堂前之古鐘ニ御座候而、不絕御追福相勤候儀ニ御座候、

○訓公、諸國ニ募緣シテ、知恩院ヲ再建シ、新鑄梵鐘ノ銘ヲ書スルコト、十四年八月二十八日ノ條ニ、三河信光明寺存牛、知恩院住持ト爲ルコト、本年十一月十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔三河堤〕 額田郡四寺院並墳墓之部 岩津村

一彌勒山信光明寺 寺領百二十石、宗旨淨土鎭西派、本山京都東山智恩院(知、下同ジ)、紫衣、開山繹譽存冏上人、二代肇譽上人、後京都智恩院二十四世ノ住職ナリ、

十六日、辛丑、延曆寺僧徒等、近江ニ於ケル梶井門跡領竝ニ山城大原鄕別當職ノコトニ就キ奏ス、尋デ、近衞尙通ヲシテ、細川高國ニ命ヲ傳ヘシメラル、

〔二水記〕 八月十六日、○中略傳聞、今日山徒三院衆六七人參禁闕、有訴訟之旨、二ヶ條、第一、梶井宮近江國御料所事幷大原鄕別當職事等申入云々、兩傳奏有故障事、仍直參長橋、聊無骨事歟、勅答趣、條々被聞食入之、可被申武家哉間事、被廻御思案、重可被仰出之由、以頭辨秀房(高里小略)朝臣今日番、被仰下云々、

〔後法成寺尙通公記〕 八月廿一日、丙午、雨下、○中略以廣橋大納言(守光)爲叡慮被仰出事有之、梶井門跡領之事、可申遣右京兆(細川高國)云々、得其意被申入、勸一盞、

○靑蓮院入道尊獻親王、御訴訟ノ爲メ、勸修寺尙顯第ニ逗留セラルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔二水記〕 閏六月十六日、早旦參新大典侍(勸修寺尙顯)殿御里、今日靑門御歸寺(入道尊獻親王)爲御暇乞也、此間聊有子細、久無還御也、公事篇落居、珍重者哉、

十八日、癸卯、御靈祭、

〔後法成寺尙通公記〕 八月十八日、癸卯、陰、雨下、御靈祭爲見物、寶鏡寺・智圓寺・正受寺・繼孝院・小童・小女罷向日野(內光)、日野被來、各可來之由、堅被申間罷向也、入夜

兩傳奏故障ニ依リ僧徒等長橋ニ直參ス勅答

靑蓮院尊獻親王ノ御公事

寶鏡寺某等日野第ニ於テ見物

近衞稙家細川尹賢等モ招カル

半濟所

永正十七年八月二十日　二十一日

亞相・典厩・民部大輔等令同道、大飲及天明、日野太刀ヲ送亞相云々、御返則典厩太刀ヲ遣日野云々、懇切之至無是非、典厩・戸部同道也、

〔實隆公記〕八月十八日、癸卯、陰雨、〇中略御靈祭如例、

〔二水記〕八月十八日、御靈祭如例、

二十日、乙巳、豐前田原親述、西太郎ニ同國田川郡虫生村ノ地ヲ預ク、

〔兒玉韞採集文書〕二〇筑前

豐前國田川郡虫生之村之內拾五石、且預遣候、何茂半濟所少々加扶助者共候、同前知行不可有相違之狀如件、

永正拾七年八月廿日　（田原親述）（花押）

西太郎殿

二十一日、丙午、從三位冷泉爲和ヲ、正三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十六　參議從三位藤爲和（冷泉）卅六、右衞門督、八月廿一日、敍正三位、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲三十九所收　八月廿一日、れんせいゑもんのかみ（爲和）、正三位申、御めんあり、ひろいし（守光）申、

別相傳竝ニ私沽却地ハ棄破セズ

松尾社祠官等連署申狀

別相傳ト雖モ神領ナリ

幕府、松尾社祠官等ノ、德政ト號シ、永代沽却地ヲ棄破セントスルヲ停メ、革島泰宣ヲシテ、之ヲ安堵セシム、尋デ、祠官等、之ニ抗訴ス、

〔革島文書〕〇山城

松尾社司等、永代沽券之地事、號德政可破企在之云云、〇德政ノコト、二月十二日ノ條ニ見ユ、太無謂、所詮、於別相傳幷私沽却之地者、更不可有相違之上者、任當知行之旨、彌可被全領知之由候也、仍執達如件、

永正十七　八月廿一日　（齋藤）貞舩（花押）

革嶋勘解由左衞門尉殿（泰宣）

松尾社祠官等謹言上、

右就今度棄破之御成敗、私領・別相傳文言於在之者、可被相除事、迷惑之至也、其子細者、當社年中七十餘度之神事之內、別相傳、爲境內役、每度下行在之間、別紙注之、備右、如此神領無紛上者、先規如御判御敎書、重而被成下御判、全領知、如先々諸神事致執行者、天下安全御祈禱、可爲專一者也、仍一社謹連署狀如件、

永正十七年八月二十一日

永正十七年八月二十一日

永正十七年八月　日

永正十七年、春徳政行候ニ付而、棄破之儀申候、秋公験於申請、無相違候處ニ、私領・別相傳ハ無棄破候、至社領ハ棄破之由申候間、勝蓮院殿（伊勢貞陸）へ其子細申上候處、被仰付相果候、

〔附錄〕

一九〇

榮谷禰宜重續（松室）（花押）
月讀祝　重治（同）（花押）
月讀禰宜重俊（同）（花押）
權禰宜　相次（東）（花押）
權神主　相匡（同）（花押）
正　祝　相光（同）（花押）
正禰宜　相宣（同）（花押）
前正禰宜相安（同）（花押）
神　主　相豐（同）（花押）
前神主　相鄕（同）（花押）

〔革島文書〕○山城

就今度徳政之儀、永代買得之地當知行無相違處、松尾社司中申掠候條、永代之賣券狀懸御目、被成下御下知候、忝存候、萬一此旨於相違者、以後可預御罪科候、此等趣御取合肝要候、仍而請文如件、

八月廿一日

長鹽又四郎殿　御宿所

福乘坊　榮賢（花押）
地藏院　壽寶
吉田入道　宗源（花押）
亨久（花押）
壽昌（花押）
堀入道　春忠（花押）
智德庵　宗賢（花押）

前近江守護大膳大夫六角高賴卒ス、

〔米原文書〕○東京　佐々木米原氏世系之圖

永正十七年八月二十一日

世系

久頼

母飛鳥井氏

高頼 佐々木近江守、從四位下、大膳大夫、母飛鳥井氏、久頼次男、晩年之子也、舍弟無之、

近綱 佐々木四郎、薙髮稱崇左、

定頼 龜侍者、(光實承龜)彈正大弼、母土岐氏、繼兄之家、

高保 號大原中務大輔、母同定頼、

高實 梅戸左近大夫、繼勢州梅戸家、

〔寛永諸家系圖傳〕百五十二 佐々木 六角の流なり、

久頼

法名

高頼

大膳大夫、六角、龍光院と號す、永正十七年八月廿一日に卒す、法名宗椿、

氏綱 近江守、

定頼 彈正少弼、從四位下、近江國の守護となる、

高保 中務大輔、大原氏の家督をつく、

高實 勢州梅戸氏の家督をつく、○寛政重修諸家譜異事ナシ、

法叔ノ掛眞佛事法語

〔太田牛一雜記〕 佐々木家譜 號六角、

一龍光院殿仙翁椿公大禪定門 高頼前大膳大夫 禪光寺殿息、永正十七八廿一日、

〔東寺光明講過去帳〕 ○山城

佐々木大膳大夫(六角高頼)

裏書

永正十七年十月(マヽ)

〔月舟以下諸師佛事法語雜集 原題幻雲藁〕 龍光院殿掛眞佛支 汝雪(法叔)

人間六十六年强、返妄還眞本有鄉、忍見大夫猶濺淚、黃花風雨近重陽、共惟、新捐舘〜〜、神掬秋水、威挾風霜、昔漢龔舍領光祿大夫於東湖界、塞外猶憶將軍令、又宋楊傑望淨土聖人於西方天、末後況現如來相、提三尺劍百戰百勝、掛九年弓一弛一張、如見涪翁烏衣靈孫之詩、大哉金昆玉季、似聞蘇公龍光長老之偈、譬諸錦以綉腸、平素愛僧洒々落々、居常在俗密々堂々、義以言廉行以厲賢、四方按堵如故、文能附衆武能威敵、萬人遐仰未忘、到這裡、一擊々碎刀山劍樹、一踏々倒爐炭鑊湯、更有一轉語、請試宣揚去、擧眞云、看々上脣鼻孔依然在、桂子秋風遍界香、

永正十七年八月二十一日

壽陵ノ掩土法語

法霖ノ鎖龕法語

永正十七年八月二十一日

掩土

景甫（壽陵）

欝葱江左衣冠域、天遺一老能治國、莫道梁壞太山頽、依然東領生晴月、共惟、新捐舘〜〜、上界神仙、本朝甲族、當撥亂中興日修文偃武、猶如亞夫稱伊周、到無爲太平時致若救民、孰與工部比稷契、明哲以保身、慈愛以及物、早歳參禪入室、善知識者是大因緣、平居和光同塵、資生業等皆順正法、超過解脫深坑、蹈斷無明窠窟、眞諦常住俗諦常住、將謂是聖是凡、有餘涅槃無餘涅槃、元來不生不滅、無始業障日消氷、末後牢關風破竹、咄一咄、試向無陰陽地看、梅蘂漏春不萠枿（カツ）、

鎖龕

梅叔（法霖）

不干金鎖與銀籥、佛祖玄關鑄生銕、一路涅槃爲君通、江東回首碧雲合、共惟、新捐舘〜〜、金湯佛門、碧紗人物、依俙謝安石之居江左而含雅量、彷彿劉子政之入漢廷而遷光祿、天宇地宇々多爲氏、承于郁々文之聖朝、東江西江々州封侯、甲于佐々木之望族、累世已呼二十四郡忠臣、太湖況持萬六千頃符節、穢土卽是淨邦、安養豈隔兜率、機前領旨、掛弓祖少林宗將、塵外遊心、投籌入一休密室、四大分兮淸寥々、三世了兮白的々、卽今使山野盖棺畢、々々々後又何若、諸人還見得龍光陰（院）殿不起一龕中、踢飜二

奠湯法語

高頼子氏綱菩提ノタメニ壽量品ヲ書寫ス

銕圍、直超等覺妙覺麼、咦、優鉞八月已回春、不待黃花約九日、

龍光院殿 奠湯

司馬歐陽宋世臣、人參甘艸品論新、長生更有無生術、眞藥現前空却春、共惟、某甲、金湯法社、醫和兆民、英氣凜然、不凡種草、德香郁爾、非常根塵、唇上碧斑、此非大黃附子、曰佐曰使、舌頭當的、又非阿魏水銀、無假無眞、道味已備、風姿惟神、蚤歳參瞎驢（一休宗純）禪、直下驗過祖師意、暮年傳扁鵲訣、病來自養老居士身、倒臥毘耶三萬床座、使得趙州十二時辰、雲門九轉丹、換却魔佛筋骨、曹溪一滴水、洗空人天苦辛、雖住妄境、全修淨因、正與麼時、諸人還聽藥王樹子藥誨指陳麼、酥醍乳酪平和處、丸轉如來正法輪、喝一喝、

又

這香、惟德惟馨、連枝於蟠屈閣浮樹、甚奇甚特、托根於空却威音王、五分法身柢幹、單傳直指芬芳、擧香云、看々心華開發處、一枝嫩桂久昌々、皇考龍光（高頼）老禪、自寫壽量一品、希有々々、不啻神儀冥助、抑亦門閥餘慶、共惟、某居士、國家柱礎、法社津梁、望之威風烈日、就之和氣春陽、非仁不言、々則必理、非義不行、々則必當、一令而討其逆徒於屈强之地、再變而躋疲氓於無爲之鄉、澄淸天下之志、誠劫波濁末、匪無范孟伯、運籌幄中之韜略、亂世治策不讓張子房、蚤領大德宗旨、全絕列祖關防、笑殺寂照師接松雪（孟頼）趙、勘破晦（祖心）堂老推豫（延堅）章

黄、到這裡、眞如解脫、菩提涅槃、恰如刀斬水、顚倒妄想、煩惱業苦、頗類雪沃湯、雖然恁爲、薦誠蘋藻、致敬羹墻、加之、剏蘭若而施園林、祇陀開基佛座宏麗、卒〔萃カ〕苾蒭而誦梵貝、迦陵出殼仙悠揚〔一字脫アルカ〕、是名莊嚴佛土、又稱淸淨寶坊、坐臥經行、物々現成公案、常樂我淨、塵々本地風光、草木山河宛似支竺、天地日月彷〔彿〕像漢唐、不可思議、不可稱量、正與麼時、這一〔轡〕辨分作二分、一分奉雲光佛、一分奉大覺皇、一彩兩賽、二諦双忘、其或信不及楞嚴會上童子、從普現識身三昧起、唱微妙章、一穗黃雲甘露洒、無端除熱得淸涼、喝一喝、

〔重編應仁記〕十　高賴澄元卒去事付高國任管領職事

細川高國ハ、思ノ儘ニ希雲〔三好之長〕ヲ討取、〇之長自刃スルコト、五月十一日ノ條ニ見ユ、同〔五月〕十二日、將軍〔義稙〕ヘ御禮申上ル、佐々木大膳大夫高賴ハ隱居ノ身ニテ有ケレ共、今度ハ何トカ思ケン、味方ニ加テ江州ヨリ上洛ス、此人ハ去ル永正十五年七月九日、嫡子近〔氏綱〕綱死去シケルヲ深ク歎キ居タリケルカ、〇氏綱卒スルコト、十五年七月九日ノ條ニ見ユ、二男彈正少弼定賴武勇モ勝レ、器量有テ度々忠功ヲ勵シケレハ、近年ハ將軍モ高國モ、此定賴ヲ賴マセ給ヒ、動者江州エ御催促有テ後、御敵每度退散ス、因茲諸國モ彼威風ニ懼レ、武士ノ面目不過之、偏ニ彼家再興ノ繁昌ナレハ、高賴老後ノ愁眉ヲ開テ、將軍家エ拜趨シ、樣々忠志ヲ盡サレケルカ、今茲永正十七年ノ夏上洛ノ後、御暇賜テ、功成名遂ケ、喜悅シテ、同八月歸國セシム、然處、其後不幾程シテ、同月廿一日、一病ノ煩無ク、忽然ト卒去セラル、法名ヲハ龍光院花山宗椿居士ト稱ヌ、此高賴ハ、マサシク去ル應仁ノ兵亂ニ遭テ今迄存命ナル人ハ、此人計也ケルニ、今角死去セラレケレハ、今ハ古例ヲ尋ヌヘキ方モ無シトテ、將軍モ高國モ深ク追悼マシ〳〵テ、百首ノ和歌ヲ詠セラレ、彼追福ニソ備サセ給ケル、〇下略、足利季世記・畠山記・公方兩將記異事ナシ、

應仁亂生存者ノ唯一人義稙及ビ高國追福ノ百首和歌ヲ詠ズ

〔朽木古文書〕〇內閣記錄課所藏

小笠原知行分蓮泉跡事、近日競望之族候之由、其聞候、無是非次第候、當知行不可有相違之通、彼在所ゟ申付候、被成御心得候者可爲祝著候、恐々謹言、

八月十一日　高賴（花押）

朽木殿〔材秀〕進之候

小笠原某ヲシテ蓮泉跡ノ地ヲ安堵セシム

河上內鴫野今新田事、永田源次郎跡目猿菊爲給分申付候、自然之儀可被其心得候、恐々謹言、

十一月十四日　高賴（花押）

朽木彌五郎殿〔稙廣〕進之候

永田猿菊ニ近江河上鄕內ノ地ヲ給ス

永正十七年八月二十一日

朽木稙廣ノ違亂ヲ停ム

（懸紙）「朽木殿　進之候

高島郡河上郷内鴫野今新田事、去年永田猿菊申付候處、御違亂之由候、不可然候、急度彼代被去渡候者、可爲祝著候、恐々謹言、

八月十五日　　高頼（花押）

朽木彌五郎殿　進之候」

桂田新三郎ヲ河上郷領家所務ト爲ス

（懸紙）「朽木殿　進之候

河上領家所務事、桂田新三郎ゟ申付候、自然牢人等競望儀候者、御合力候者可爲祝著候、恐々謹言、

十一月十三日　　高頼（花押）

朽木殿　進之候」

布施貞友ヲ河上郷代官

（懸紙）「朽木彌五郎殿　進之候

河上代官職事、布施新右衛門尉（貞友）申付候、自然之儀候者、無相違被仰付候者、可爲祝著候、

職ト爲ス

猶委細後藤大和守（高忠）可申候、恐々謹言、

十一月廿四日　　高頼（花押）

朽木彌五郎殿　進之候」

岩栖院使者伊庭六郎

就河上領家方御代官職之儀、以御書被仰候、只今布施新右衛門尉被差越候條、於自然之儀者、被加御合力候者、可畏入存候、尚以無御等閑、可被懸御意事、可爲至望候、可得御意候、恐惶謹言、

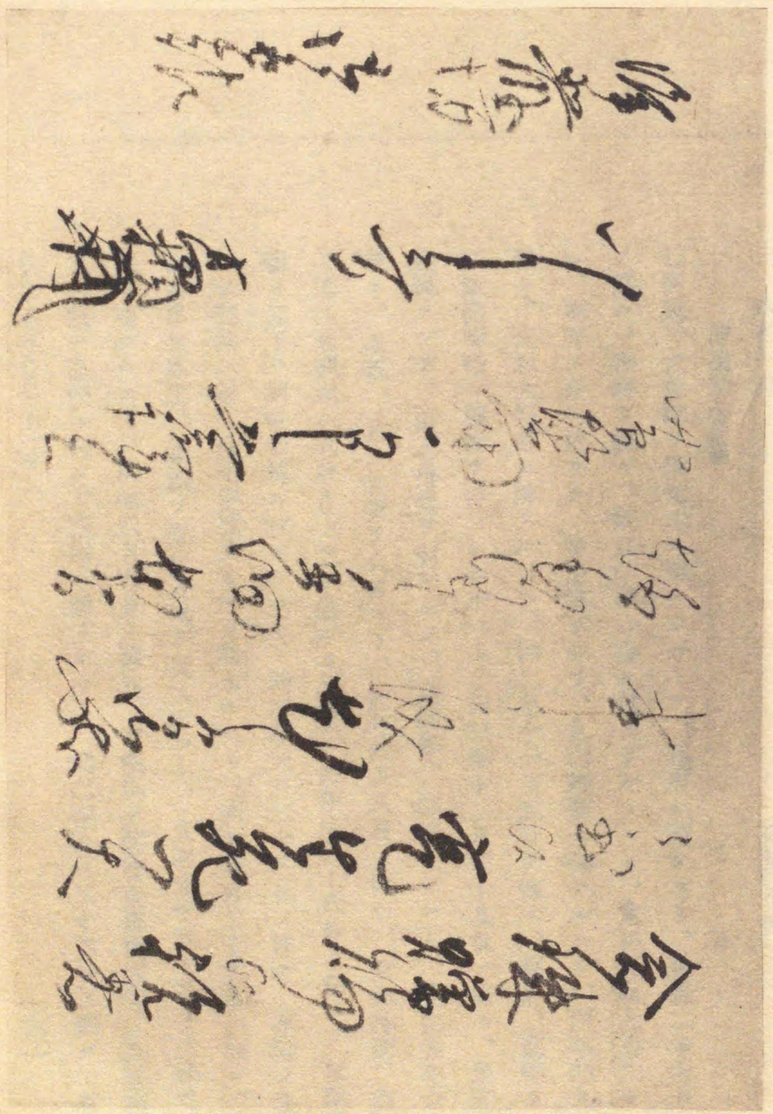
十一月廿四日　　高頼（花押）

朽木殿　人々御中

（懸紙）「朽木彌五郎殿　御返事

其後久不申候處、御音信、殊海松二籠給候、祝著之至、賞翫相半候、猶以每々儀本望候、仍今度伊庭六郎事、自京地岩栖院爲使種々依被申、令對面候、則雖可申候、莵角延引候、次四郎（氏綱）かたへ馬被上候、祝著之由申下候、御懇之儀爲悦候、委細後藤大和守可申候、恐々謹言、

永正十七年八月二十一日　　高頼」



六角高頼自筆書状　滋賀縣　無量壽寺所藏

原寸　縦横〇〇・三五七四米

六月十八日　高頼（花押）

朽木彌五郎殿　御返事

〔集古文書〕六十七　書牘類　所藏不詳

柿籠到來、祝著候、尚以賞翫候、仍歡樂之由候、殊近日煩敷之通、只今聞及候、無心元候、能可被加養性事肝要候、恐々謹言、

八月廿四日　高頼（花押）

赤佐彈正忠殿

赤佐彈正忠ノ病氣ヲ見舞フ

〔淨嚴院文書〕○近江

久不申通候條、御床敷候之處、御音信本望候、仍念珠送給候、寔祝著之至候、尚以御懇之儀、每々難申盡候、委細本間四郎左衞門尉可申入候、恐惶謹言、

八月二日　高頼（花押）

淨嚴坊（宗眞）上人　御返報

淨嚴坊宗眞ノ念珠ヲ贈ルヲ謝ス

〔無量壽寺文書〕○近江

念珠贈賜候、祝著之至候、寔生死一大事之儀尤候間、御狀趣本望候、委細本間四郎左衞門尉可申候、恐々謹言、

八月三日
淨嚴坊御返報

○高頼、大慈院ヲ僧梵圭ニ與ヘンコトヲ、幕府ニ請フコト、長祿二年六月二十三日ノ條ニ、家督ヲ繼ギ、近江半國守護ニ補セラルヽコト、寛正元年七月二十八日ノ條ニ、幕府ノ命ニ依リテ、宇治橋ヲ守リ、畠山義就ニ備フルコト、同年閏九月六日ノ條ニ、大和大安寺ニ陣スルコト、同二年十一月五日ノ條ニ、幕府、高頼ヲシテ、近江敏滿寺領ニ課役ヲ停メシムルコト、同三年十二月二十九日ノ條ニ、足利義政、同義視ヲシテ、山名持豐ヲ討タシメ、高頼等、降ヲ乞フコト、應仁元年六月八日ノ條ニ、高頼、自ラ其第ヲ火クコト、同年八月八日ノ條ニ、京極持清、高頼ノ部兵ヲ近江高瀨城ニ攻メテ、之ヲ陷ルヽコト、同年十月十八日ノ條ニ、京極勝秀、高頼ノ部下ヲ觀音寺城ニ攻ムルコト、同二年三月二十八日ノ條ニ、高頼ノ兵、六角政高ノ部兵ノ近江長光寺城ヲ守ルヲ攻ムルコト、同年四月二十六日ノ條ニ、京極氏ノ部將多賀高忠、高頼ノ觀音寺城ヲ攻ムルコト、文明元年五月是月ノ條ニ、尋デ、之ヲ陷ルヽコト、同年八月四日ノ條ニ、京極氏ノ部將多賀出雲守、其族高忠ト隙アリ、叛テ高頼ニ合シ、西軍ニ應ズルコト、同二年九月二十二日ノ條ニ、高頼、兵ヲ

永正十七年八月二十一日

永正十七年八月二十一日

率キテ京都ニ入ラントシ、京極氏ノ兵及ビ細川成之・十市遠清等ノ援兵ニ破ラレ、近江甲賀山ニ保スルコト、同三年正月二十三日ノ條ニ、義政、朽木貞綱ニ命ジ、高頼ヲ討タシムルコト、同年閏八月二十七日ノ條ニ、高頼、六角政堯ヲ近江清水城ニ攻メテ之ヲ殺スコト、同年十一月十二日ノ條ニ、齋藤妙椿ノ援兵ヲ得テ、多賀高忠ヲ擊ツコト、同四年九月九日ノ條ニ、高頼ノ部將伊庭某、兵ヲ率キテ入京スルコト、同六年八月十二日ノ條ニ、多賀高忠、高頼ヲ近江ニ伐タントシテ果サザルコト、同年十月七日ノ條ニ、延曆寺僧徒、高頼ヲ近江ニ擊タンコトヲ請フコト、同七年八月六日ノ條ニ、京極政經、延曆寺僧徒ト共ニ高頼ヲ攻メ、之ヲ破ルコト、同年九月七日ノ條ニ、土岐成頼等、兵ヲ近江ニ出シ、高頼ヲ援クルコト、同年十月二十八日ノ條ニ、高頼、近江長壽寺領市原莊守護段錢課役等ヲ免ジ、坊領檢斷ヲ安堵セシムルコト、同九年四月十二日ノ條ニ、使ヲ幕府ニ遣シテ、赦免セラルヽヲ謝スルコト、同十年二月二十七日ノ條ニ、幕府、高頼ヲシテ、祇園社領近江成安保ヲ、同社ニ渡付セシムルコト、同年九月十九日ノ條ニ、大德寺養德院ニ、同寺領近江西今村ノ地ヲ、還付セシムルコト、同年十月二十三日ノ條ニ、青蓮院門跡領ノ、近江ニアルモノヲ、渡付セシムルコト、同年十一月十六日ノ條ニ、高頼、義政室日野氏ノ

料所近江舟木關ノ稅租ヲ押領スルコト、同十一年七月六日ノ條ニ、部將伊庭某ト和セズ、上洛シテ一色義直ニ頼ルコトヲ勸ムルコト、同年八月二十一日ノ條ニ、高頼、横川中堂ニ據リ、之ヲ訴フルコト、同十四年四月十八日ノ條ニ、伊勢貞宗、書ヲ高頼ニ遣リ、幕府ノ命ヲ奉ジテ、寺社本所領等ヲ渡付センコトヲ勸ムルコト、同年九月十一日ノ條ニ、高頼、山內政綱ヲシテ、畠山義就ヲ援ケ、河內ニ出陣セシメントスルコト、同十五年二月是月ノ條ニ、大膳大夫ニ任ゼラルヽコト、同年六月十三日ノ條ニ、臨川寺三會院、高頼ノ同寺領ヲ押領スルヲ、義政ニ訴フルコト、同十七年九月十一日ノ條ニ、高頼、管內ノ社寺領及ビ幕府近臣等ノ所領ヲ押領スルニ依リ、近臣等、之ヲ義尙ニ訴ヘ、其追討ヲ請フコト、長享元年七月二十三日ノ條ニ、幕府、高頼ノ、近江ノ諸社寺領ヲ押領スルヲ停メ、祇園社・延曆寺等ヲシテ、之ヲ安堵セシムルコト、同年八月二十一日ノ條ニ、朽木貞高ヲシテ、高頼ノ近江河上城ヲ攻メシムルニ依リ、高頼、山中橘六ヲシテ同國山田ヲ守ラシムルコト、同年九月十一日ノ條ニ、義尙、高頼ヲ伐タントシテ、近江坂本ニ出陣スルコト、同月十二日ノ條ニ、陣ヲ同國鉤安養寺ニ進メ、諸將ヲシテ、高頼ヲ甲賀ニ攻メシムルコト、同年十月四日ノ條ニ、幕府、高頼ノ押領セル近江ノ社寺本所領ヲ收

永正十七年八月二十一日

メ、當所務ヲ兵粮料トシテ、近臣ニ充行フコト、同月十日ノ條ニ、高賴ノ部將伊庭某等、伊賀ノ國人ヲ誘ヒテ高賴ノ被官トナシ、近江ヲ攻メント謀ルコト、同二年三月是月ノ條ニ、幕府、高賴ヲシテ、其冒占スル所ノ社寺領ヲ返還セシムルコト、延德元年九月十二日ノ條ニ、延曆寺、高賴ノ同寺領ヲ冒占スルヲ、幕府ニ訴フルコト、同二年九月十日ノ條ニ、足利義材、同義熙ノ遺志ヲ繼ギ、高賴ヲ近江ニ征セントシ、令ヲ諸將ニ頒ツコト、同三年四月二十一日ノ條ニ、高賴征討ノ綸旨ヲ奏請スルコト、同年八月二十二日ノ條ニ、安富元家及ビ織田敏定等ヲ遣シテ、高賴ノ黨ヲ近江愛智川ニ擊タシムルコト、明應元年三月二十九日ノ條ニ、赤松政則等ヲシテ、高賴ヲ攻メシムルコト、同年九月十五日ノ條ニ、高賴ノ兵、近江甲賀ヨリ伊勢ニ走ルコト、同年十一月十五日ノ條ニ、幕府、高賴ノ所領近江高島郡ノ地ヲ沒收シテ料所ト爲スコト、同三年十一月二十六日ノ條ニ、高賴、寶鏡寺領ヲ押領スルコト、同五年六月十七日ノ條ニ、美濃守護代齋藤妙純、高賴ヲ攻ムルコト、同年九月二十日ノ條ニ、高賴、物ヲ獻ジ、其罪ヲ釋サルヽヲ謝スルコト、同六年正月七日ノ條ニ、禁制ヲ近江比牟禮八幡社ニ掲グルコト、同年十二月二十日ノ條ニ、伊吹因幡守及ビ安養寺八郎左衞門ニ命ジテ、近江永安寺ノ侵地ヲ還付セシムルコト、同七年十一月二十一日ノ

條ニ、近衞政家ノ所領、近江信樂莊ヲ奪フコト、同九年十月是月ノ條ニ、部將伊庭貞隆ノ背クニ依リ、之ヲ伐チテ敗レ、日野城ニ奔ルコト、文龜二年十月十一日ノ條ニ、細川政元、赤澤朝經ヲ遣シ、高賴ヲ日野城ニ攻メシムルコト、同三年三月二十四日ノ條ニ、幕府、高賴ノ部下三井右兵衞大夫ノ領邑ヲ飯尾清房ニ付スルニ依リ、高賴、其命ヲ拒ミ、援ヲ朽木稙綱ニ求ムルコト、永正元年三月二十八日ノ條ニ、高賴、子定賴ト謀リ、九里備前守ヲ殺スコト、同八年九月是月ノ條ニ、近江沙々貴神社ヲ修造スルコト、同十一年四月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕 口之部 六角高賴

永正十七年八月二十一日

○無量壽寺文書（近江）

八月三日書狀

高頼室歿ス
永瑾作鎖龕法語

○高頼室歿スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔太田牛一雑記〕佐々木家譜（號六角、）

慈光院殿花巖宗榮大禪定尼　龍光院（高頼）妻　永正八年八月廿一日、

〔梅溪集〕諸佛事　慈光院華巖宗榮大禪定尼鎖龕佛事法語

節迫重陽雨未晴、烟雲藹々鎖江城、無端失个秋光佛、金色尚存黃菊英、共惟、新掩妝某、芝蘭色秀、松柏操貞、子育九族而無偏、兼備惟慈惟愛、母儀一家而有慶、產出難弟

○無量壽寺文書（並五）

十二月十八日書狀

難兒、加之、看江東雲、早悟富貴之假、欽濟北道、深信玄要有程、四十八年前、來無所來、去無所去、四十八年後、滅不是滅、生不是生、五障霧散、一性月明、到這裏男相女相果是何物、眞諦俗諦豈又足評、劍樹刀山信脚踢倒、地獄天堂隨意橫行、雖然恁麼、猶是迷封滯殼、未得十成、畢竟把斷要津、不通凡聖底一句、如何宣說、（以鎖子擊龕云、）銀鑰却收金鎖合、關雞無復五更聲、

慈光院殿華岩宗榮大禪定尼七周忌拈香

擧香、這香、喚作過去佛則過去心不可得、喚个甚麼作過去佛、繪雪而不繪其淸、喚作現在佛則現在心不可得、喚个甚麼作現在佛、繪花而不繪其馨、喚作未來佛則未來心不可得、喚个甚麼作未來佛、繪泉而不繪其聲、莫々洗盡從前閑佛祖、七年夜雨夢初驚、索訶世界南瞻部洲大日本國近江州太守大功德主孝男源氏綱（六角）、永正十四歲舍丁丑秋八月廿又一日、伏値先妣甚七周忌之辰、先庚就本院莊嚴靈場、延請緇流、勤修白業、秘經神呪、件々梵行、無敢怠焉、仍命工雕造阿閦佛聖像者一軀、修禮圓通懺摩法儀、嚴設水陸無遮勝會、芬陀華經妙文、頓漸印寫看讀者若干帙、自餘作善品目、併附維那秋月孔雀妙音、分明宣

永正十七年八月二十一日

揚焉、粗擧其綱要而已、今當散筵、營辨香華灯燭茶果伊蒲淨供、々佛嘱僧、謹集現前淸衆、異口同音諷演無見頂相無畏心佛所說、究竟堅固、秘密神呪之次、洛之東山十如愚衲永瑾、遠受檀命來、擧香、焚這妙兜樓、供養娑婆出興大覺世尊、今日教主無動如來現座道場光世音慈父、微塵國土三身四智婆伽至尊、浮幢刹界六度萬行菩薩大士、有學無學衆賢聖、以心傳心諸祖師、上界下界護法仙曹、此土他土旺化神祇、酆都十殿慈王、法界一切含靈等、所萃鴻因、奉爲某資助冥福、以報罔極之恩焉、夫七年忌齋者、七乃陽之正而少陽之數也、凡人死而中有身、未得生緣、極七日住、死復生々復死、如是展轉至七々日、決定得生、是故每七日、必學齋而追福、謂之齋七者、令中有種子、不轉生於惡趣也、若其極善者、無中有、所以者何、極善者生淨土或人天、極惡者卽墮泥梨或三道、惟善惡雜者、合有中有、是七々齋所得由而設也、自其促謂之則七々日也、自其延謂之則七年也、古來孝子之情、風樹羹墻、不能觸物無感、今也大功德主營七年齋、而修種々善因、依此功德、先妣必上天成佛、何疑之有乎也、雖然如是、若約山僧見處、生以不生爲生、滅以不滅爲滅、豈敎量門中落七落八耶、只是一期方便之說耳、不如束之高閣、共惟、某、天質蘭秀、坤儀松貞、假示婦女相、每得丈夫名、蚤寄身於江東甲族家、助嶽鑿逐時之祭、晩

染指於濟北正宗道、致葵藿向日之誠、曠劫愛河已竭、五障迷雲忽晴、玉鏡臺前空諸相於非相、綺羅叢裡了他生於此生、雖慕月上天女示寂、且倣秦國夫人看經、爲貧窮者說福德圓滿大陀羅尼、々々々雲雨阿僧祇珍寶、阿僧祇衣服、阿僧祇飲食、阿僧祇瓔珞、大地衆生叫隨類解、爲愚痴者說無碍辨才大陀羅尼、々々々海生恒河沙言詞、恒河沙妙義、恒河沙歌詠、恒河沙梵音、三世諸佛得合掌聽、大哉神呪力、人得安樂國、致太平幸遇、八月小春、江上梅花受成道之記、況當七周忌日、塔前木犀感涅槃之情、此是淑靈不生而生、不滅而滅、無住而住、無行而行底、處々遊戲自在、物々妙用縱橫、象王截流踢飜前世功德、後世功德之大海、獅子出窟走過眞善解脫、惠善解脫之深坑、焉麼時先妣、擧香、乘此香雲、自虛空會起、應孝子念、降臨法筵、鎭護家庭、諸人還有相見分麼、歸然不壞法身体、朶々湖山螺髻青、

二十二日、丁未、幕府、猿樂アリ、

〔後法成寺尙通公記〕八月廿日、乙巳、晴陰、小雨洒、○中略今日風呂從京兆（細川高國）被借之、明日於大樹一獻申沙汰云々、京兆・典厩（細川尹賢）（細川高基）・戸部等入風呂、勸一盞、京兆早出、

廿一日、丙午、雨下、今日申沙汰延引云々、

廿二日、丁未、陰、小雨洒、今日於大樹京兆申沙汰云々、
廿四日、己酉、晴、及晩典厩・民部大輔・河首座等來、智園寺爲振舞、勸一盞、各相語云、
一昨日時宜快然、能數十一番、十一獻云々、
〔二水記〕八月廿二日、○中略傳聞、今日武家有猿樂、觀世、右京大夫(細川高國)上洛已後始而申沙汰云々、雨時々下、定可失其興者哉、
〔實隆公記〕八月廿二日、丁未、陰晴、高國猿樂申沙汰云々、
權中納言勸修寺尙顯、加賀ニ下向ス、
〔公卿補任〕四十六　權中納言正三位藤尙顯(勸修寺)、四十三、八月廿二日、下向賀州、
○尙顯上洛スルコト、十月是月ノ條ニ見ユ、
播磨守護赤松義村、同國益田村名主沙汰人ヲシテ、平・都染・益田三莊內ノ加古川ニ於ケル殺生禁斷ヲ犯ス者ノ交名ヲ注進セシム、
〔報恩寺文書〕○播磨
賀古河之流、平・都染・益田三箇庄之內、殺生禁斷之處、塞築背制法之族在之云々、爲事實者、言語道斷之次第也、所詮、於張本人者、可被處嚴科之條、可令交名注進之由候也、仍執達如件、
永正十七　八月廿二日
益田村名主沙汰人中

大夫觀世上洛後始メテ申沙汰
築ヲ設ケ制法ニ背ク

二十四日、己酉、義稙、酒饌ヲ獻ズ、
〔實隆公記〕八月廿五日、庚戌、晴、御連歌可參之由、昨日雖被仰不參、昨日室町殿被進上御樽、御賞翫云々、
二十八日、癸丑、足利高基、中里對馬守ノ忠節ヲ褒ス、
〔常總遺文〕二
今度馳參走廻之條、神妙之至候也、
永正十七年八月廿八日　　(足利高基)(花押)
中里對馬守殿
北條氏綱、伊豆最勝院ニ禁制ヲ掲グ、
永正十七年八月二十四日　二十八日

請實(赤水)(花押)
朝親(衣笠)(花押)
則高(櫛橋)(花押)

竹木等ノ伐採ヲ禁ズ

葬禮

〔最勝院文書〕○伊豆

○前闕ク、

右豆州大見郷之内最勝院寺中之叓、竹木已下不可剪之、若押而切者有之者、從寺家可有注進、堅可及罪科者也、仍如件、

永正十七庚辰八月廿八日　朱印　○印文祿壽應穩

最勝院寺中

幕府奉行諏訪信祐卒ス、

〔實隆公記〕八月廿八日、癸丑、霽、自晩小雨灑、雷鳴、入夜風吹、良秀大德依諏方(信濃)信濃入道葬禮曠野結緣、今朝不來、

○信祐卒スルノ日詳カナラズ、姑ク、是日ニ揭グ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕ス之部　諏訪信祐

尚順大和寺社領押領ノ神罰

是月、畠山尚順ノ部兵背ク、尚順、之ヲ討チテ克タズ、紀伊廣城ヲ棄テ、和泉堺ニ奔ル、部兵等、畠山稙長ノ弟某ヲ同城將ト爲ス、

〔續南行雜錄〕祐維記抄　(永正十七年)八月、(畠山尚順)尾州內衆與被及合戰、打負テ、人二三十人ニテ泉界迄沒落候ト云々、仍廣ノ城大將之事、尾州御曹司(畠山稙長)河內ニ被座弟ヲ內衆トノ相定云々、尾州近年當國(大和)ヲ林堂幷熊野衆以下ニ被出之、及度度寺社領押領候、併大明神(春日)之御罰云々、

〔上杉家文書〕一

「長尾彈正左衛門尉(弾封ウハ書)(憲景)殿　(畠山尚順)卜山」

「(端裏切封)」

急度以飛脚申候、仍至彼國進發之由候、肝要候、彌調儀被申談、可被得利事專一候、

永正十七年八月是月

○遍照心院文書（東京大學文學部所藏）

永正七年九月十七日幕府奉行奉書

尚順紀伊沒落ヲ長尾爲景ニ報ズ恢復ヲ圖ル

一今度紀州之儀、依中意雜說、不慮題目出來候、無念至極候、乍去、泉州於堺津、無事に取退候、心安可被存候、紀州國民已下申子細候之間、遊佐河內守與令調談、成其行、則時屬本意、重而可申候（○中略、全文ハ、四月二十四日、尚順、爲景ヲシテ、出陣シ、畠山義總ト共ニ越中平定ニ努メシムルノ條ニ收ム、）

八月十一日　　卜山（花押）

長尾彈正左衞門尉殿

〔伊勢家書〕（後鑑二百八十五所載）○

尾州事、被落沒江（紀ノ）州廣庄、令居住之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十七年九月廿五日　　前近江守（飯尾貞運）

上野介（齋藤時基）

大傳法院行人衆中

〔參考〕

〔足利季世記〕四　畠山卜山ノ事

天文三年ノ說

其年暮テ明レハ天文三年ニ成ル、其ノ比故畠山政長ノ子息尾張守尚慶、十八歲ニテ出家シ、道號ヲ卜山ト號シ、高屋ノ城ヲハ子息稙長ニユスリ、我身ハ紀州ノ廣ト云處ニ陰居シテ有シ時、紀伊國住人湯川庄ニ直光ト云モノ、小松原ト云所ニ有テ、卜山ノ下知ヲ

背ク、是ハ昔ノ武田惡三郎信忠カ末葉ニテ、久ク當國ニ居住メ八庄司ノ其一也、然レトモト山大荒强ノ人ニテ、不日ニ攻落シ、湯川一門ヲ追出シ、其跡ヲ知行シ數年ヲ送リケルニ、今年天文三甲午ノ三月ヨリ、紀伊國ノ住人野邊六郎左衞門ト云モノ有、是モト山ノ命ニ背シカハ、卜山大ニイカリ、北國エ改易スヘキト議セラレケル間、野邊一揆ヲ語ラヒ己カ城ニ楯籠ル、卜山則河內エフレ送リテ、守護代遊佐河內守長敎ヲ催シ、不日ニ野邊カ城ヲ攻ラル、、爰ニ湯川直春カ一門共、山サンハト云山家ニ流牢シテ居タリケルカ、其中ニ湯川民部少輔ト云モノ、子ニ、業阿彌ト云法師アリ、粉川ノ邊ニ有ケルカ、直光カモトニ來リテ、扨モ我等カ怨敵ト山ヲ此時打取事安カルヘシ、卜山ヲ打トラハ、一門一味シテ本領ニ安堵セントト思フ也ト云ケレハ、湯川悅ヒイロ〳〵謀事ヲ廻ラシ、カノ法師ヲ陣僧ニ作リ、廻狀ヲ書テカノ陣ニ送リケル、然レトモカノ業阿彌運ヤヨハカリケン、大將ノ卜山ヲ見知ラサリケレハ、陣中エ入テミレハ卜山十德ノ衣ノ中ニヨロヒキテ、遙ノワキニ立玉フ、遊佐河內守ハ大將ニテシヤウキニ腰ヲカケ、寄手ヲ下知シテ居タリシヲト山ト思ヒ、カノ狀ヲサヽケ河內ヨリノ御便ト申ス、遊佐此狀ヲ開テ讀ケル處ヲ、カノ僧太刀ヲヌイテ丁トキル、二太刀ツヽケテ切ケレトモ、薄手ニテ死サリケル、

尚順業阿彌ヲ斬ル

此ヲ見テト山カノ僧ノ後ヨリ一太刀ニ切伏玉ヘハ、此僧死ナカラ猶遊佐ヲ白眼テ眼更ニ不閉ケル、カヤウニ大勢アリシ中エ分入テ大將ヲキル事、大功ノ兵ナリトテ、諸人感嘆ノアマリアヤカラント、其血ヲ指ニ付テネフリケル、カヽル處其夜一揆ヲ催シ、湯川

一揆蜂起

尚順淡路ニ奔ル

夜打シケレハ、遊佐ハ手負ス、ト山モ不叶、廣エ落玉ヘハ、廣ニモ一揆起リ、ト山ノ方四十八人マテ被打シカハ、ト山ハ不叶淡州エ落玉ヒ、遊佐ハ河內エ歸リケル、野邊・湯ノ川一味シテ運ヲ開キケル、畠山稙長ハ河內ノ高屋ニ有ケルカ、父ト山ハ淡州光明寺ニテ重病ヲ受、行年五十五歲、頓テ逝去アリシカハ、（尚順卒スルコト、大永二年七月十七日ノ條ニ見ユ、）稙長無念ニ思ヒ、百箇日過ケレハ、紀州エ發向シ根來マテ寄玉ヒ、和州・河州ノ勢ヲ催促ス、此人常ニ民ヲモ哀ミ玉ハス、父ト山ニハヲトリタル人ナリトテ、ト山逝去ノ折ヲ得テ、遊佐河內守・和州ノ木澤左京亮・杉原石見守・齋藤山城守等一味シ、稙長ノ弟石垣左京亮長繼ヲ家督ニスエ、稙長ヲ押出シケル、稙長ハ紀伊國ヲモ攻ル事モナラス、河內エモ歸ラス、根來ニカクレテ有ケルトカヤ、（續應仁後記異事ナシ、）

遊佐長教等稙長ヲ排斥シ弟石垣長繼ヲ擁立ス

肥前龍造寺家員卒ス、子胤員嗣グ、〔大林藏龍造寺系圖〕

世系

龍造寺ノ正統

法名

初メ僧トナリ龍造寺住職トナル

康家　隱岐守、始右衞門大夫忠俊、又胤家、

家員　右衞門大夫、隱岐守、或家正、又家和、母同上、（小鳥居氏信元女）

延德年中、繼龍造寺之正統、而住肥前佐嘉（朱嘉）城、文龜二年正月、依戰功加賜佐喜郡之內二百町地、永正十七年八月卒、法名號麟應、石塔在長樂庵、（朱村中ノ龍造寺ト稱ス）

胤員　刑部大輔、イ胤尙、

胤久　大和守、

〔新撰事蹟通考〕三十一　系圖附錄五　龍造寺

康家

胤家　豐前守、

家和　隱岐守、後改家貞、（眞）

始爲僧、爲龍造寺住職、胤家繼千葉家、故還俗嗣父跡、居佐賀城、永正十七年八月死、法名麟應、

家純　豐前守、

家門　和泉守、

永正十七年八月是月

〔大系圖後集〕 坤 龍造寺

- 胤家 龍造寺豐前守、
  - 家貞 〔員〕右衞門太夫、隱岐守、備前守、文龜二年正月佐嘉郡二百丁賜、永正十七年八月卒、
    - 胤員 刑部大輔、
    - 胤久 大和守、

〔龍造寺系圖〕

康家

- 家員 龍造寺惣領、民部大夫、隱岐守、又家和、法名麟應、文龜二年、有小城・佐嘉之加封、享祿元年三月廿日卒、
  - 胤員 刑部大夫、又家盛、早世不嗣家、
  - 胤久 從五位下、大和守、新次郎、民部大夫、
  - 胤門 左馬助、

〔鍋島系圖〕

康家

- 家和 隱岐守、民部大輔、家員、承父之讓、一享祿元年戊子三月廿日卒、一法名長樂菴麟應道瑞、妻於保因幡守宗親女、

享祿元年卒ストノ説

妻

- 女子 嫁深町治部大輔、
- 胤和 刑部大輔、家盛、胤員、先父卒、
- 女子 嫁副島中務少輔家益、
- 女子 嫁大塚山城守家房、
- 胤久 始寶琳院出家、從五位下、大和守、新次郎、民部大輔、
- 胤門 左馬助、
- 女子 嫁空閑備前守家重、

〔龍造寺隆信譜〕 泰巖(隆信)公年譜

○上略 康家娶小鳥井氏女、生四子、長曰豐前守胤家、從千葉胤盛如筑前、小山・村上等祖也、○中略 次曰隱岐守家員、爲惣領、稱村中龍造寺、法名麟翁、石塔在長樂庵、○下略 次曰隱岐守家和、始メハ右衞門太輔ト號ス、父安〔裏〕家ノ家ヲツキテ、佐嘉城ニ主タリ、兄ニ代ツテ摠領ニタツトイヘトモ、不幸ニシテ早世ス、嫡子刑部太輔胤和、家督ヲツクトイヘ𪜈、亦早世ス、女子有テ男子ナシ、胤和或曰胤員、龍造寺大和守胤尙ハ、隱岐守家和ノ次男也、小字ヲ新次郎トイフ、中頃民部太輔ト號ス、兄胤和早世ニヨツ

村中龍造寺ト稱ス

佐嘉城主胤員卒シ弟胤尙嗣グ

テ、父兄ノ迹ヲ相續ス、〇上下略

〔九州記〕 四 龍造寺由來事

家和初ノ名ハ右衞門大夫家正、延德ノ比龍造寺ノ正統ヲ嗣テ、佐嘉ノ城ニアリ、文龜二年壬戌正月、戰功ニ因テ、佐嘉郡・小城郡ノ內ニテ貳百町餘加祿ノ地アリ、家ヲ嫡男刑部大輔胤和ニ讓リテ、家和ハ永正十七年庚辰八月ニ卒去ス、〇上下略

戰功ニ依リ加祿セラル

〔肥陽軍記〕 一 少貳家之事

龍造寺康家公の長男豐前守胤家ハ、年來千葉に從ハれけるか、同く筑前へ趣かる、次男隱岐守家員、龍造寺の惣領を繼て、村中龍造寺と申、(法名麟應、石塔長樂庵にあり)三男澄覺ハ台宗の法灯をかゝけ給ふ、初家員思ハれけるハ、當家の名跡轉變すへからす、昔覺阿禪宗を傳て、禪室となれり、吾今古きを追て寺をたて、家の再興を祈るへしとて、一寺を興立し、寶琳院と號して、澄覺を中興の開山とし給ふ、〇上下略

寶琳院ヲ興シ澄覺ヲ中興開山ト爲ス

〇足利義尹、家員ノ戰功ヲ賞シ、肥前下加瀨等ノ地ヲ給スルコト、文龜二年正月是月ノ條ニ見ユ、

九月 大盡 丙辰朔

一日、丙辰、御祝、

〔三水記〕 九月一日、丙辰、晴、〇中略 秉燭之程、著直衣參內、御盃之儀如例、

〔實隆公記〕 九月一日、丙辰、晴、〇中略 入夜帥(三條西公條)參內、

山城元應寺、三條西實隆ニ賴リ、末寺慈福寺ノコトヲ奏聞ス、

〔實隆公記〕 八月卅日、乙卯、晴、〇中略 元應寺長老(深慶)來臨、末寺慈福寺事被談之、茶十袋・唐納豆一裹被携之、

三條西公條奏聞ス

九月一日、丙辰、晴、〇中略 入夜帥(三條西公條)參內、元應寺事、有事次內々申入云々、

二日、丁巳、雨時々灑、〇中略 元應寺書狀到來、

十月八日、癸巳、晴、〇中略 慈福寺事、梶井北坊來申、

五日、庚申、庚申當座和歌御會、

〔三水記〕 九月五日、〇中略 晚頭參內、今夜庚申御當座有之、(曼殊院覺運)竹內殿御參、及曉天退出、

九日、甲子、節供御祝、詩歌御會アリ、

〔三水記〕 九月九日、午時、令淸書御懷帋、菊花久馥也、詩題花媚重九云々、入夜參

曼殊院慈運參會

御題

内、御盃如例、此後參御方(知仁親王)御所、和漢一折被遊了、

〔再昌草〕二十 ○宮内廳書陵部所藏　永正十七年庚辰

重陽公宴懷帋　菊花久馥

さきしよりいく朝露の袖ふれてこき香にうつる霜の白菊

〔今川爲和集〕二 ○宮内廳書陵部所藏　菊花久馥(朱書)「九月九日、同御會(禁裏)、」

長月の光もしるき庭の面に匂ハるけき白菊の花

三條西實隆和歌

冷泉爲和和歌

十二日、丁卯、曲舞アリ、

〔二水記〕九月十二日、午前參内、有曲舞、女也、夕霧子、號朝霧、年廿五六許也、近比聞事、各拭感涙了、女中御憑去月無之、今日各被進御銚子云々、○八月一日ノ條參看、入夜果了、御座敷小御所也、其儀如常、當番、仍不退出、沈酩無術々々、

女舞

宮女等酒饌ヲ獻ズ

〔實隆公記〕九月十二日、丁卯、雨、禁中有女舞、

十三日、戊辰、觀月連歌御會、

人數

〔二水記〕九月十三日、○中略秉燭之程、各候御前、御三間、有御連歌、御人數、中御門大納言(宣秀)・冷泉前中納言(永宣)・帥中納言(三條西公條)・四辻中納言(公音)・予(鷲尾隆康)・左大辨宰相(甘露寺伊長)・山科三位(言綱)・頭辨秀房朝臣(萬里小路)・橘(薄)

以緒等也、宮御方(知仁親王)・曼殊院宮御參(慈運)、範久(高倉)懃執筆、及曉更各退出了、

〔頭書〕「今夜月明白及終夜、」

○諸家觀月會ノコト、便宜左ニ合敍ス、

德大寺實淳第連歌會

〔實隆公記〕九月十三日、戊辰、晴、向德大寺(實淳)、晩飡、宗碩執筆、連歌十六句、

〔再昌草〕二十 ○宮内廳書陵部所藏　永正十七年庚辰

十三日(九月)、德大寺にまかりて、夜ふくるまて物語して、歸て月あかく侍に、おもひつゝけしまゝに、つとめてかきてつかハし侍し、

なかめをきかへりみしつゝゆく〳〵も昔おほえし宿の月影

わすれしな月にかたらふことの葉ハみな敷嶋の道芝の露

名にしおハゝ木すゑの秋のけふの月葉月ハうすき色にや有けん

二夜まて世にくもりなきその名こそまれなる秋の月にハ有けれ

玉の緒よかゝる月をハいつかみんもしなからふる秋はありとも

くまなくもすめる物哉末の世の濁りハみすや秋のよの月

月の色にハかなりける夜寒よりなきからしたる虫の聲かな

深にけり霜もやいまはをちかたの野寺の鐘の月にすむ聲

正親町三條公兄第和歌會

山ふかく入ぬへき身のかくて世にめくるを月のいかにみるらん
猶そめてん月ハかりこそ此世にハ老と成ての友ハありけれ
しのはれん我かハあやなわすれねとみさらん後の秋のよの月
はるかにも神代の月のてらしてやすめるハ空の光みすらん
かたふくや雨にとさそふ月影に佛のみかほみる心ちして
入道相國（德大寺實淳）・左幕下（德大寺公胤）等返歌あり、

〔今川爲和集〕二〇宮內廳書陵部所藏　十三夜待月（九月）同十三夜三條宰相中將家會、（正親町三條公兄）

秋も今夜名におふ空のかきりともしらてや月のいてかてにする

嶺上月

嶺高み松の葉分の秋風にもりてもほそき夜ハの月かけ

寄月忍戀

風の音もあやしき夜半の槇の戸にたゝすむ月のかけそくるしき

十四日、己巳、伊勢貞陸、義稙第ニ囃物ヲ興行ス、翌日、マタ、自第ニ之ヲ行フ、

奉公衆觀世大夫ノ出演

貞陸第囃物細川高國見物ス

冷泉爲廣三條西實隆狂歌ノ贈答

奉公衆ノ盆囃物ノ返禮

〔後法成寺尙通公記〕九月十四日、己巳、晴、於室町殿（義稙）、伊勢守（伊勢貞陸）ハヤシ物有之、奉公衆・觀世大夫相交云々、諸人驚目云々、寶鏡寺・大祥寺等被參、御所々々被參云々、細河六郎（稙國）・右馬頭等伺（細川伊賢）候大樹云々、

十五日、庚午、晴、今日於伊勢守在所、又ハヤシ物在之云々、京兆罷向（細川高國）、大飲云々、

〔實隆公記〕九月十四日、己巳、晴、〇中略今日武家拍子物、貞陸申沙汰云々、

十五日、庚午、〇中略今日於伊勢守、有拍子物、

〔再昌草〕二十〇宮內廳書陵部所藏　永正十七年庚辰

十五日（九月）、貞陸所にてはやし物ありける、見物すとて、右衞門督（冷泉爲和）あやまちしたる事を申て、大納言（冷泉爲廣）入道狂歌、

龜の尾ハよしいたむとも千世ふへし風流の棧敷とめておつれハ

返し

龜の尾ハ泥に曳ても子細なし鷹の頭もむくらるゝよに

〔二水記〕九月十四日、〇中略傳聞、今日於武家有風流、是奉公衆盆拍物返報也、今日伊勢守沙汰也、奔走大儀云々、

永正十七年九月十四日　二二五

勸修寺尙顯ノ張行
下京大囃物
毎夜ノ興行
畠山順光ノ張行

十五日、今日於伊勢守所、有拍物云々、又見物衆上門屋上間屋落地、人多破身、剩有死人云々、

○勸修寺尙顯・畠山順光等囃物ヲ行フコト、便宜左ニ合敍ス、

〔實隆公記〕七月廿二日、○中略勸修寺(尙顯)拍子物張行云々、不可說々々々、

廿五日、下京大拍子物、所々懸之云々、

〔二水記〕七月廿二日、入夜五六人令同道、見躍拍物、今夜勸修寺張行也、先夜奉公衆之返報云々、當年毎夜有此事、近年不見聞事也、併天下靜謐之所爲歟、但又物忩之基也、歸路之次、於竹園(伏見宮貞敦親王)躍了、各驚耳目者也、

廿五日、○中略傳聞、躍拍物今日式部少輔(畠山順光)張行、於所々有躍云々、奔走超過也、擧世令見物云々、

十七日、壬申、幕府、應眞ヲシテ、下野專修寺住持職ヲ安堵セシメ、之ヲ宇都宮忠綱及ビ朝倉孝景ニ報ズ、

〔專修寺文書〕一○伊勢

(懸紙)「下野國

永正十年ノ奉書紛失
宇都宮忠綱ヘノ奉書

專修寺雜掌

下野國高田專修寺住持職事、去永正十年對應眞上人被成奉書之處、令紛失云々、被聞食入訖、不可有相違之上者、可被專勤行等之由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十七年九月十七日　河內守貞兼(治部)」

當寺雜掌

河內守(花押)
中務丞(清秀秋)(花押)

下野國高田專修寺住持職事、先年對應眞上人、不可有相違旨、被成御下知之處、有違亂之族云々、以外次第也、所詮、重被成奉書訖、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十七
九月十七日　貞兼(花押)
秀秋(花押)

宇都宮殿(忠綱)

〔法雲寺文書〕○越前

永正十七年九月十七日

朝倉孝景ヘノ奉書

下野國高田專修寺住持職事、先年對應眞上人、不可有相違之旨、被成奉書候處、有違亂之族云々、以外次第也、所詮、重被成御下知畢、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十七
九月十七日

朝倉(孝景)彈正左衞門尉殿

貞兼(花押)
秀秋(花押)

芝入道跡職

○應眞ヲ專修寺門流ノ正統ト爲スコトヲ、十年二月二十三日ノ條ニ、眞智ヲシテ、同寺住持職ヲ安堵セシムルコト、同年十二月二十六日ノ條ニ、應眞ヲシテ、重ネテ同寺住持職ヲ安堵セシムルコト、大永元年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

二十日、乙亥、丹波內藤國貞、同國勝林島ノ地ヲ、大西彌四郎ニ充行フ、是日、國貞、同地名主百姓等ヲシテ、年貢・公事物ヲ彌四郎ニ輸セシム、

〔雨森善四郎所藏文書〕坤

勝林嶋之內芝入道跡職之事、大西彌四郎ニ申付候、年貢・諸公事物等、急度可其沙汰者也、仍狀如件、

永正十七
九月廿日
芝分
名主百姓中

地下人祇候セズ

二十一日、丙子、北野社法樂御樂、

〔二水記〕九月廿一日、早旦參內、天滿宮御法樂御樂有之、御三間也、目錄同七夕、地下輩不候、朗詠唱嘉辰令月了、御樂了勸盃如常、了退出、

二十二日、丁丑、東大寺、周防國衙領內勝井莊保司職ヲ、得富興資ニ充行フ、

〔得富文書〕○周防

宛行　防州國衙公領之內勝井庄保司職事

得富中務丞興資

勝井莊ハ東大寺ノ訴ニ依ル還補地

右依寺(東大寺)門大訴爲還補地間、○大內義興、周防國衙領ヲ東大寺ニ還付スルコト、六年四月十三日ノ條ニ見ユ、爲公領分預遣者也、正稅事、任今度檢地帳面、可被遂國納、於無沙汰之儀者、可有改補者也、仍而執達如件、

中將五師
澄覺(花押)

永正十七年庚辰九月廿二日

二十六日、辛巳、筑前守護大內義興、大宰府天滿宮滿盛院ヲシテ、院領同

(內藤)國貞(花押)

永正十七年九月二十七日

國戸栗・重富兩郷ヲ安堵セシム、是日、守護代杉興長、之ヲ領承ス、

〔滿盛院文書〕一 ○筑前

杉豐後守

「(懸紙)

太宰府滿盛院　　興長」

就當御社(大宰府天滿宮)領戸栗・重富之儀、去三月廿五日神代但馬守武總對當院奉書披見、○奉書所見ナシ、得其意候、任彼一通之旨、可被下知候、恐々謹言、

永正十七庚辰九月廿六日　　興長(花押)

太宰府滿盛院

三月二十五日ノ奉書

二十七日、壬午、幕府、勸修寺境内幷ニ同門跡領山城醍醐・小栗栖・石田及ビ小野等ノ百姓等ノ、八幡宮祭禮料ヲ半濟シ、併セテ當納年貢・公事物ヲ半濟セントスルヲ停メ、寺家ヲシテ、ソノ收納ヲ全ウセシム、

〔勸修寺文書〕二十三 ○山城

勸修寺門跡雜掌申境内事、號十一ヶ郷與同、可令半濟企在之云々、次去四月三日八幡宮祭禮料既半濟之條、以外之濫吹也、早云未濟分、云門跡當納年貢・公事物以下、如先々嚴密可致其沙汰、若猶令難澁者、一段可有御成敗之由、所被仰出之狀如件、

永正十七九月廿七日　　(飯尾)貞運判　(齋藤)時基判

當所名主沙汰人中

十一箇郷百姓等與同シテ張行ス

勸修寺門跡雜掌申城州醍醐幷小栗栖・石田・小野等内、當門跡領散在田畠事、號十一ヶ郷與同、可令半濟企テ在之云々、以外之濫吹也、如先々嚴密可致其沙汰、若令難澁者、一段可有御成敗之由、所被仰出之狀如件、

永正十七九月廿七日　　貞運判　時基判

當門跡領

所々名主沙汰人中

〔勸修寺文書〕三 ○山城

御門跡領御境内幷醍醐・小栗栖・石田・小野所々散在田畠等事、號十一ヶ郷與同、百姓

永正十八年九月二十七日

有半濟之企云々、然去四月三日八幡宮祭禮料既半濟之條、甚以濫吹也、早云半濟分、云寺納年貢・諸公事物以下、任九月廿七日公方御下知之旨、可被全皆濟、猶以有難澁之族者、可被處罪科之上者、堅可被加催促之由候也、仍執達如件、

永正十七　十月六日　　(齋藤)貞舩(花押)

勸修寺門跡雜掌

二十八日、癸未、山城元應寺深慶ヲ召シテ、御受戒アラセラル、

〔實隆公記〕　九月廿八日、癸未、晴、○中略(深慶)元應寺御受戒事申沙汰之、於小御所有此事、參入聽聞了、元應寺三箇被携之、不慮之芳惠也、

〔二水記〕　九月廿八日、今日御受戒、元應寺長老始參懃、先於小御所、圓頓戒之儀有之云々、

後土御門天皇聖忌、御法會ヲ山城般舟三昧院ニ修セラル、

〔二水記〕　九月廿八日、○中略傳聞、於城南御經供養如每年、御導師定法寺大僧正、公助、題名僧(妙觀院歟)、公卿甘露、(民部卿元長息左大辨宰相伊長)殿上人姉小路侍從濟俊、六位藤原(當小路)氏直云々、廿九日、○中略晩頭參內、御精進解、女中申沙汰如例、曼殊(慈運)院宮御參、六七獻參、及美聲

三條西實隆申沙汰小御所ニ於テ行ハル

圓頓戒

導師定法寺公助

御精進解

了、

〔實隆公記〕　九月廿八日、癸未、晴、○中略今日伏見御經供養、公助僧正御導師云々、公卿民部卿、殿上人濟俊參入云々、

廿九日、甲申、陰、帥(三條西公條)依召參內、

〔宣胤卿記抜書〕　九月十七日、右中狀(柳原資定)、來廿八日御經供養、御布施取殿上人濟俊、

袍難得、以御懺法講准據、可著直衣歟、可爲如何哉云々、此事先年持明院問之、不可然之由返答了、猶廣(慶橘守光)可被尋歟之由返答了、御懺法講堅固內儀、有子細無御布施取儀、散花事也、

廿八日、資定狀、今日散狀書樣此分歟云々、又僧俗各別歟云々、勿論也、

姉小路濟俊直衣ヲ著シテ參勤ノ可否

散狀ノ書樣

御經供養

御導師

前大僧正公助　注付云、常(公助僧正)、此分候、官を上ニ被載之由、以前承候了、御家說分候者、可爲此分候、

題名僧

長增僧都　常儀此分候、導師と同前候者、官可爲上候歟、猶廣へ可被尋候哉、

〔願文集〕五

夫聖猷配天、日月照四時、改恩潤率土、風雨和萬物生、雍熙之化永傳、文武之道共盛者乎、伏惟、先皇陛下、聰以知遠、慈以及私、膺籙受圖、專致昇平之德、富仁寵義、愈中茂世之規、爾以降、舉明哲賢臣、朝無闕政、敬宗廟社稷、宸垂憲章、僉曰、雖呈嵩呼萬歲之祥、惜哉、不保堯封三祝之壽、龍駕忽去、鼎湖雲空愁、蜃輅無蹤、射山塵猶冷、吁嗟、居諸遷而如瞥、早迎一昔回、涕泪滴而有餘、更悲九月別、遺詔豈忘、愁緒滿情、爰眇身、虔肅々儀、御赫々祚、行有三代之禮、恥不足徵、顧雖菲薄之躬、强思盡孝、勤修必歷七日、念行亦禮六時、因茲、奉供養釋迦如來舊像(僅カ)一幅、奉摺寫妙法蓮華經一部八卷幷開結、心阿等經各一卷、迺啀前大僧正法印大和尚位公助爲唱導師、法唱無二、舌覆大千、辯河奔々、波瀾今起陸地、心月皎々、光輝益破癡雲、于時十蕙一蘭、交衆芳於楚畹、千草萬木、連疎翠於林皐、好斯梵場、式開淨域、然則尊靈得安、養不退之快樂、遊列聖間、因法華開顯之惠薰、證覺王果、乃至微塵刹土、上界下生、滯魄沈魂、皆具解脫、敬白、

永正十七年九月廿八日

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右、先皇聖靈、當季秋終、迎登霞忌、餝般舟三昧之法席、修善記年々、講妙典八軸之金文、稱揚可各々、佛燈一盞、永照破暗冥、鴨爐餘薰、忽消除妄染、凡厥功德遍法界、利益滿虛空、仍諷誦所修如件、

永正十七年九月　日

先皇廿一回願文諷誦文草

清書　(五條學爲一)

御導師定法寺公助　(世尊寺行季卿)

二十九日、甲申、周防守護大內義興、慶讚ヲ同國椹野莊中領八幡宮宮司職ト爲ス、

〔長防風土記〕二十一　小郡宰判　吉敷郡一　椹野莊　神祠　中領八幡宮

周防國吉敷郡椹野庄中領八幡宮司職　號泉福寺、事、所令補任也、有限勤社役、云寺家、云寺領、守先例可全執務之狀如件、

永正十七年九月二十九日

作者五條爲學　清書世尊寺行季

泉福寺ト號ス

三條西實隆祇候ス
題者冷泉爲孝
讀師甘露寺元長
講師庭田重親
發聲冷泉爲廣
御宴
五十首續歌

永正十七年九月三十日

永正十七年九月廿九日

慶讃藏司

左京大夫（大内義興）（花押）

三十日、乙酉、九月盡和歌御會、

〔二水記〕九月卅日、午刻參內、盡御會有之、未刻許各候御前、先之逍遙院（三條西實隆）被候了、今日出題冷泉中納言（爲孝）也、先帥卿（三條西公條）參進、取題攤硯箱蓋、獻御前、此後各次第探取之、御製六首歟、其外五四三首等也、薄暮各令淸書了、秉燭有披講、其儀、出題人先參進、重短冊了退、此後讀師民部卿（甘露寺元長）參進著座、取直所重之短策召講師人、次重親（庭田）朝臣參進著座、次民部卿（冷泉爲廣）入道、逍遙院兼被候御前訖、中御門大納言（宣秀）・帥・冷泉（永宣）・四辻（公音）等中納言・予（鷲尾隆康）、次第參進了、讀師人目講師、此時重親朝臣讀上、次發聲、民部卿入道出之、讀師人依發聲之命講之、宿老之謂歟、御製七反、後度五反、或四反、親王（知仁親王）御方三反、依御所勞無御出座、題一首被進了、逍遙院二反、五十首了、從下藹退下、左大辨宰相（甘露寺伊長）・山科三位（言綱）・範久（高倉）・橘以緒（薄）等御人數也、發聲歌冷泉中納言出之、更參候於御前、三獻參了、御陪膳帥卿也、雖爲每度之儀、諸事忘却、仍爲備後學、粗所記之也、

〔實隆公記〕九月晦日、乙酉、參內、五十首續歌披講、入夜退出、

〔再昌草〕二十 ○宮內廳書陵部所藏 永正十七年庚辰

實隆ノ和歌
當座

九月盡、內裏にて題をさくりて、五十首歌講せられ侍しに、讀師民部卿、講師重經卿（親）、發聲民部卿入道、彼歌爲孝講之、題者也、

山春雨

浪のあやも色そふ雨に水とりの靑葉の山の春の一しほ

摘菫菜

人なみに春の野に出て我袖のそめしいあらぬすみれ摘也

新樹朝風

風を猶やとす若葉もうらみあれや花い朝の雲も殘して

沙上落葉

せいしくもおりえたりとや紅葉々に庭の眞砂も風を待けん（散しくをイ）

恥身戀

とはれていいさやかくさん山なしの花ならぬ身ハ色に出しな

〔御歌御會短冊題筌〕○山城聖護院所藏

永正十七年九月盡當座、

永正十七年九月三十日

十月小丙戌朔盡

一日、丙戌、御祝、

〔二水記〕十月一日、丙戌、雨下、晩霽、入夜參內、御祝之儀如常、

二日、丁亥、亥子御祝、幕府亦祝アリ、

〔二水記〕十月二日、〇中略入夜亥子御盃如例、

〔實隆公記〕十月二日、丁亥、武家嚴重、申遣堀川局云々、

〇十四日及ビ二十六日ノ亥子御祝ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔二水記〕十月十四日、入夜參內、亥子御盃如例、

廿六日、〇中略入夜亥子御祝如例、

安藝守護大內義興、小幡興行ノ、同國洞雲寺領ヲ押妨スルヲ停メ、同寺ヲシテ、之ヲ安堵セシム、

〔洞雲寺文書〕〇安藝

圓滿寺事、如前々、洞雲寺對當住宗繁長老可打渡之旨、被仰出候、可奉任御下知候、近年押置候子細、委細申候、非別儀候、以御意得御披露所仰候、恐々謹言、

十四日　圓滿寺興行命ヲ奉ズ

二十六日

（永正十七年）

九月廿日

弘中々務丞（興兼）殿

神代但馬守（武總）殿

御寺領唐臼名事、小幡民部少輔押置之次第、不可然之旨被仰付、應御下知候、還補之請狀、封裏進之候、仍惣御寺領目錄、裏封同前候、公役・寺役等事、無懈怠候者肝要之由候、恐々謹言、

永正十七庚辰

十月二日

小幡民部少輔興行（花押）

神代但馬守武總（花押）

弘中々務丞興兼（花押）

唐臼名奉行請狀及ビ總寺領目錄ニ證判ヲ與フ

洞雲寺　衣鉢閣下

尊書謹而致拜見候、仍就當寺領之儀、小幡・己斐兩人ゟ奉書、慥給置候、急度付遣、自是可申上候、兼又不寄存候、百疋被送下候、忝候、雖然御煩之至、無勿體之條、斟酌雖無極候、尊意之儀候間、先以應命候、猶委細御使僧申候、恐々謹言、

永正十七年十月二日

小幡己斐ヘノ奉書

五月廿一日　嵐貞（花押）

洞雲寺　衣鉢侍者禪師　尊答

○義興、洞雲寺領ノ諸課役ヲ免除スルコト、大永元年三月十一日ノ條ニ見ユ、

六日、辛卯、播磨守護赤松義村、部將小寺則職ヲシテ、浦上村宗ノ屬城美作岩屋城ヲ攻メシム、宇喜多能家、則職ノ兵ヲ同國飯岡原ニ破ル、村宗モ亦、岩屋城救援ノ爲メニ出陣シ、是日、則職ヲシテ敗死セシム、義村、白旗城ニ到リ、之ヲ聞キテ置鹽ニ歸ル、村宗、播磨室津ニ進出ス、〔官符宣記〕○大和一永正十六年卯、赤松方內輪依確執、鴈庄錯亂之間、別當御公用侘言之時申狀

義村讒ヲ信ジ村宗ノ出仕ヲ停ム

村宗ヲ攻ム

就播磨國忩劇之儀、鴈庄錯亂之事、前代未聞之次第、言語道斷之間、尤舊冬早々雖可申入候、年內者自彼方實否不能注進間、令延引候、彼亂逆之元來者、赤松兵部少輔義村之被官仁浦上掃部助村宗、不慮仁傍輩之依讒言、近年號有不忠之子細、無謂被停止出仕、○義村、久米近氏ノ讒ヲ信ジ、村宗ヲ討タントスルニ依リ、村宗三石城ニ據リテ叛スルコト、十五年七月十一日ノ條ニ見ユ、猶其上仁爲成敗、去永正十六年卯十一月八日仁、兵部少輔義村率數千騎之軍勢、浦上城仁押寄、數月之間盡武略雖攻戰、城塹嶮

難而、四圍之捧輒以依難破却、遂不達本意、同十七年庚辰（永正）正月二日仁、義村無力被退散畢、○義村、軍ヲ班スコト、十六年十二月三十日ノ條ニ見ユ、又重而爲追討、同卯月廿日仁率軍兵、先手合仁、浦上與力作州之住人粟井・中村之兩城仁令發向、二百餘日之間雖攻戰、遂不決雌雄、結句還而義村方同十月六日仁打負、小寺加賀守（則職）初而究竟之兵二百餘輩、立令生涯畢、然間同十二日仁浦上掃部助村宗、備作兩國之率賊徒、播州室津迄攻上、猛勢滿山野、狼煙隱天、鯨波動地間、國郡一時仁令滅亡畢、其時節鴈庄之儀、種々廻籌策、雖令防禦之、惡逆無道之凶徒等數千騎庄內仁亂入、追放寺庵・名主・庄官、奪取財寶、剩民屋過半令放火、結句寺家成之名田以下仁悉以新給人附置之、違亂之間、種々雖申執舛、不致承引、年貢所當一圓令押領間、寺納之米錢一向令無足畢、依之在庄之用脚等難計間、預所職上洛、不相調條、至于當春令寺著爲體無其隱上、凡可被聞食入候哉、然間御公用以下之事、於寺家者、全雖無疎略候、自彼庄年貢諸公事無運上間、去年冬成分之御公用者、一圓以他足令進納畢、如此既及迷惑之處、又當年（大永元年）正月彼牢人出張之刻、赤松下野守（村秀）庶子惣領家破、於鴈庄近所及合戰砌、○義村、村宗ヲ三石城ニ攻メントシ、播磨御著ニ陣シ、先鋒弘岡左京、村宗ニ應ズルニ依リ、義村東條玉泉寺ニ退クコト、大永元年二月十一日ノ條ニ見ユ、庄內衞足輕衆無謂令亂入、下百姓之屋內以下悉令放火、致亂妨狼藉　剩能所合戰場仁成行候、然間耕作耕作不能

城落チズ義村退陣

村宗ノ部兵鴈莊ニ亂入

寺領ニ新給人ヲ置ク

鴈莊附近戰場トナル

等用意一向不相調候、如今者、來秋所務之體、不可得意候、去年云、當秋云、旁以無其
賴候、然上者自當春成、御公用之事不可相調候、殊守護方以下其執舛仁過分之失墜候之
間、於庄家借錢無際限候、更以寄事於亂逆非申掠候、以此旨可然樣預御披露、御公用之
儀、暫預御遠慮候者、尤可爲衆悦候由、可申旨候、恐々謹言、

（大永元年）三月日　　年會五師賴憲

義村箸崎最福寺ニ出陣ス　白旗城ニ移陣ス　美作住人中村岩屋城ニ楯籠ル　村宗則職ノ部下ヲシテ

〔古代取集記錄〕○播磨　永正十七年庚辰十一月廿七日、地家名主百姓等與東西政所問答
在之、其故ハ、浦上掃部助村宗ヲ可有對治依御憤リニ、御屋形義村樣、去年十一月九日ニ
御馬ヲ可被寄ニテ、浦上福立寺迄御出陣、然ハ村宗ヲ備前ノ三石城ニ被楯籠所ヱ詰寄、
御自身火水ニ雖諸軍勢ヲ御攻候、終ニ不落居候間、俄ニ和與ノ勢ヲ被成、同年十二月晦
日ニ、御屋形樣ヲ始テ、悉以御歸陣、然仁同明ル年十七年三月ニ、美作國中村、從御屋形
依可有御對治御憤ニ、義村樣御自身箸崎寂福寺迄御出陣、其□（後カ）白幡城ヱ御馬ヲ被寄、御
一家已下ノ諸勢ヲ作州中村館ヱ被遣候處仁、在所ヲ取退、岩屋ノ城構楯籠間、數日雖被
攻無落居處仁、浦上掃部助村宗、元ヨリ中村一味ノ間、後詰ニ自身從三石城打立テ、色々
計略ヲ被廻間、寄手ニ意替之衆在之テ、俄寄手ノ陣、同キ十月六日ニ破、少（小）寺加賀守ヲ始

テ、數百人ヲ打畢、其外ノ衆、因幡・伯耆ヱ落行、然同月仁當國室津マテ村宗上洛、然
間國中三ケ國、彼成敗ニ應テ無別儀、然者從去年打繼度々依忩劇仁、庄家ノ失墜過分也、
則東西政所ヲ取替、支配ノ辻五十餘貫也、然間、任往古ノ例ニ、地下可爲支配間、反錢
ニ可打賦由、成敗在之處ニ、名主百姓等申事ニ、御下知尤候、雖然今度數度之忩劇、殊
當年以外依虫食ニ、令不熟條、旁々令迷惑、然ハ庄內東南村已下少々放火候間、別而以
御故實ヲ、用却（脚）五十貫文之內、半分廿五貫文ヲ、地下ノ井料米ニテ可償申候、相殘半分
廿五貫文ノ半、御寺門ノ御支配仁御沙汰候テ可給由、種々侘言仕間、無力東西政所令同
心畢、西政所ノ支配十貫文、東ノ政所分十五貫文、此段寺門ヱ注進畢、從地下ワ廿五貫
文、井料ニテ是ヲ償、猶不足在之、以段錢ノ支配ノ時可打賦、來年於井ノ普請ニ、意前
仁可仕由、沙汰人衆三人請文在之、明ル年井ノ普請、一圓地下私ニ致沙汰者也、仍爲後
證注之、

内應セシム　名主百姓年貢減免ヲ乞フ

〔大山寺文書〕○播磨　本堂汗之記文

永正十七年十月六日　于時ニ在庄　西政所實嚴　東政所信譽

一同年(永正十七年)拾月六日仁美作岩屋城御發向在之、小寺加賀守殿生涯在之、御祈禱之事、千座行法在之、

能家ノ戰功

中村五郎左衞門

〔宇喜多能家畫像〕　○備前宇喜多靈屋所藏

(證)十七年(永正)□(七)月八日、戰勝□(乎)作之飯岡原、敵軍溺死乎河水者數十輩、斬首百級矣、十月三日、村宗入作陽、陣□(乎)岩山南、(宇喜多)能家將二千餘從焉、敵軍如雲、其勢難當、士卒皆散、纔殘者七十人、同四日、能家一戰而勝、同七日敵軍瓦潰矣、村宗斬數百人首、歸于三石、

○上下略、全文ハ天文三年六月三十日ノ條ニ收ム、

〔東寺過去帳〕

於美作國、赤松與浦上度々合戰、小寺已下兩方死亡輩數千人、

(裏書)「永正十七十歟、」

〔赤松記〕　翌年永正十七年、美作乃住人中村五郎左衞門、浦上一味のものにて、美作の岩屋と申城に楯籠候分、御成敗のために、小寺加賀守則(職)元承りとして、同四月廿日、各彼城へとり詰候、御屋形様もはしさきまて御馬を出され、其後城へ取詰、白旗の城へ御陣かへあり、既に中村難儀におよふ、浦上後巻をいたし候へは、岩屋の陣取の御間の中に、中務丞と申人、これハ下野守村秀の弟にて候、城衆とこゝろを合て、十月六日寄手をうち破り、小寺加賀守同子とも三人不叶自害、白旗ゟ御屋形にあら〳〵にて御歸陣候、

則職父子三人自害

村宗能家ヲシテ出陣セシム

〔備前軍記〕　乾　小寺と宇喜多作刕合戰の事

○上略　又作州の壘に、中村五郎、村宗に屬してありけるを、小寺加賀守範職(則、下同ジ)をやりて是を攻れは、三石よりこれをすくハんと、宇喜多和泉守(能家)に二千餘騎を付て、七月三日に三石を出て、同八日、作州飯岡原に至り、小寺加賀守と戰ひ、和泉守、小寺を追て河水に追込、數十人を討取、河を隔て陳を張る、小寺を助けて宇喜多を討んとす、三石に是を聞て、浦上村宗みつから二千五百人を帥ひて作刕へ出て、岩山の南に陳をとり、播州勢と對陳す、宇喜多も村宗の陳と一つに成りて陳しけるか、播州勢日を追て大勢かさみけり、是を見て見恐やしたりけん、三石勢一夜の中に落失せて、纔に七十餘人殘りたりける、時に宇喜多和泉守、是を敵に見透されては叶かたし、其内に戰へとて、翌日早朝に殘り留りたる七十餘人の勢を以て、數千の播州勢の中へ一文字に打て懸り、忽に追崩し、勝鬨をあけて引取けれは、其勢ひを見て、落散

たる兵卒一日かうちに一千餘騎、又集りて對陳ス、村宗計略をめくらし、敵陳小寺か家人野澤主殿介といふ者をかたらひ、反忠をさせ、小寺範職をうち、相圖の火をあけれは、村宗一千餘騎を三隊になして、小寺等か播州勢へ打てかゝりけれハ、小寺打負散亂して落行けれは、三石勢思ふまゝに追散し、追討して、首三百餘級を得て勝鬨を作り、三石の城へそ歸りける、其時政村（義村）小鹽を出て、作州へ越んとて、白旗の城へ至りて勢揃せし所へ、小寺敗軍せし事を聞て、むなしく政村小鹽へ引返されける、

○義村、村宗ノ族小寺村氏ヲ、播磨松山城ニ攻メテ、之ヲ破ルコト、五月是月ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕オ之部　小寺則職

小寺則職花押

○松原神社文書（神播磨）

八月十一日則職等連署狀

〔赤松諸家大系圖〕三○播磨　赤松家戰國實記撰　赤松播磨守政村者、○中略、義村、村宗ヲ三石城ニ攻ムルコトニカ、ル、十五年七月十一日ノ條ニ收ム、永正十六年、政村ハ浦上ニ一味セシ美作ノ國岩屋城主中村五良ヲ攻ラルヘシトテ、一族播州姫路城主小寺加賀守則職ヲ、數士（千カ）騎ニテツカハサル、寄手モアンニ相違シテ、イヤ〳〵此城アナリ（衍）トリニクシトテ、合戰ヲ止メ、遠卷ニシテ月ヲソ送リケル、政村ハ衣笠村氏カ勢ヲ討チラシ、斯テ松山ノ城ヲ燒拂ヒ、此上ハ作州ニ出馬スヘシトテ、一先歸陣シ玉ヒケル、同十月六日、政村ハ次第ニ士卒滅シテ勇氣ヲ隨（墮カ）シ、只忙然トシテ居ラレケリ、

小寺祐職父子戰死ストノ說

則職大勝ストノ說

則職姫路城ニ移住ス

小寺加賀守則職ハ、藤兵衞尉政隆男也、永正十六年姫路城へ移リ居住也、同年十月四日、美作國岩屋城主中村五郎ヲ攻ラルヘシトテ、加賀守則職、數千騎ニテ作州岩屋城ニ押寄セメタヽカフ、サレトモ城中大石大木ヲ投カケ防キケレハ、勝負ツカスシテ月日ヲ送リケリ、永正十六年十月五日、小寺祐職父子三人、岩屋城合戰ノ時、利ヲウシナヒ、戰ニ討マケ、此三人自害ス、則職聞テ大ニ驚キ、力ヲ落シテ姫路へソ引返サレケリ、同六日、則職、浦上返（反カ）逆ニテ、作州岩屋城ノ寄手浦上家臣中村五郎ニ打（ウカ）負シテ、則職大

則職世系

ニ勝利ヲ得タリシカハ、赤松政村方ニハ、勇ミ悦フコト限リナシ、〇下略

〔赤松諸家大系圖〕二 宇野爲助 小寺 〇播磨

政隆

〇名闕ク、蓋シ則職カ、

小寺政太郎、加賀守、明應四年生、妻ハ志方城主櫛橋左京亮通則ノ女也、天文十一年、多賀郡黑田村移營搆、妻ハ小寺職隆一才ノ時別ニ居ス、養育スル也、黑田村・石原村、采地ハ永正十六年姫路ヘ移住ト也、此城守家督ス、永正十六年、美作國岩屋ノ城主中村五郎ヲ攻テ、戰ヲ退(マヽ)テ月日ヲ送ケル、又浦上返逆シテ、岩屋ノ城寄手大ニ勝利ヲ得タリ、天正四年十月十八日卒ス、八十二歲、法名直巖性村大禪定門、

天正四年卒ストノ說

女子

女子

職隆

女子

政職

祐職世系

康職

祐職

小寺彌次郎、勘ケ由左衞門、文明四年生ル、明應五年、家老岸安藝守主從ノ契約シ、御目見、禮義厚シテ召抱ラレケリ、文龜三年、庄山相續居城也、永正十六年十月五日、浦上家臣中村五郎討手トシテ、岩屋城ニ向ヒ、諸勢一同ニ崩レ、宗徒ノ勇士、祐職父子三人討死ス、四十八歲、

某

小寺太郎、文龜二年生、歲十八、永正十六年十月五日、岩屋合戰ノ時、父子一所自害ス、

某

小寺次郎、永正元年生、右同所自害、歲十六、

福職

小寺三郎、半藏、主水正、永正五年生、永正十六年、父祐職・同子太郎・同二男次郎

三人、作刕岩屋出陳而留主ノ時、敵攻來リ落城ス、此時福職十二歳、父作刕合戰打マケ敗北ノヨシ、子息三郎福職此旨ヲ聞、カヲ落シ、儉東郡庄山城ヲ出、介抱セラレテ立退家督ス、アハレケリ、仕年完栗郡鹽田城ニ移リ、永祿二年八月十日死ス、歳五十二、法名信円居士、

越智ヨリ超昇寺等ヲ筒井ニ返ス

九日、甲午、遊佐順盛、越智家全ト筒井順興トヲシテ、大和法隆寺ニ、和睦セシム、

〔續南行雜錄〕祐維記抄　（永正十七年）十月九日、越智與（家令）筒井和談（順興）候、於法隆寺參會了、河內遊佐（長盛）取合候、則法隆寺ヘ遊佐方出候取合候ト云々、次筒井方與力超昇寺・高山・根尾・番條・島、各越智ヘ引汲之處、只今被返付候ト云々、雖然、先以河內遊佐方預之、所領等、百姓ニハラ丁（ママ）セヲクト云々、次箸尾、只今筒井ヘ禮ニ可被出支度之處ニ、上野方近日萬歳之間、無其儀、是モ筒井ヘ如先年可被屬旨被申定云々、次古市者和談無之、雖然所領等者、悉以無相違知行之、次十市跡、越智一圓ニ知行也、則牢人也、是モ當年計越智ヘ河內屋形ヨリ被出之、來年ヨリハ十市出頭サセラルヘキ旨、堅固ニ被約諾云々、

箸尾上野古市ハ和談ニ加ハラズ

十市跡ハ越智ノ知行

○畠山稙長、細川高國ト議リ、順盛ヲシテ、順興ト、家全トノ和ヲ斡旋セシムルコト、六月二十二日ノ條ニ見ユ、

越後毛利廣春、長尾爲景ニ從ヒテ、越中新莊ノ陣ニ在リ、是日、置文ヲ書ス、

〔上杉家文書〕一

わさとふみをまいらせ候、しせんちん中の事にて候あひた、うちしにし候ハヽ、のちのためにて候あいた、よしい・すか・おやまとしやうけん・とうけん寺かたへ、おきふみをしたゝめ候、それの御はからいとして、みやうたいを御たてあるへく候、又くめのむら、ならひこいもふとにいたし候しほさわの事も、かのかた一せのあいたたるへく候、そのゝちい、みやうたいをつき候ものゝはからいたるへく候、かしく。

永正十七ねん　（毛利廣春）ひろ春
十月九日　（廣春室）おうゑへ　ら　御つほね申給へ

ひろ春いまた一子これなく候間、おのゝ〳〵へおき文をしたゝめ候、それかし一世の後い、

廣春戰死ヲ慮リ後事ヲ定ム

吉江孫四郎等五人ヲシテ後嗣ヲ定メシム

妹分ハ一期ノ領知

廣春嗣子ナシ

永正十七年十月九日

五人の者共たんかうせしめ、おうゑのきをもんて、みやうたいをたてへく候、おうゑいのきのほか、たのいろいこれあるへからす候、くめの村ならひこいもふとにいたし候しほさわの事も、一世の間たるへく候、そのゝちハ、みやうちをつき候者のはからいたるへく候、謹言、

永正十七年
十月九日　　廣春

いこのためこ、ゑつちうしんしやうちんにてかきおく者也、

よしいまこ四郎とのへ
おやまとしやうけんとのへ
すかのちん二郎とのへ
すかの三郎ゑもんとのへ
とうけんし

こんと御ちんのうへこつゐて、御みやうたいの事、おの〳〵へおうせくたされ候、御ちやうのとく、かみ様御きよいのすへをもんて、とりたて申へく候、もしこの内ことかく申者御さ候ハヽ、なかくみやうちをかいゑきさせられへく候、このよし御ひろうかしこまり入へく候、恐々謹言、

永正十七ねん
十月九日

よしいまこ四郎
もとゑ
おやまとしやうけん
きよ玄
すかちん二郎
のり家
すか三郎ゑもん
ひろゑ
とうけん寺
しうゑい

すか藤三殿

○爲景、越中境川城ヲ陷ルヽコト、八月三日ノ條ニ見ユ、

十日、乙未、三河松平信忠、中山右京進等ヲシテ、同國大樹寺別時念佛ヲ退轉スルコトナカラシム、

〔大樹寺文書〕一 御先祖御判形 ○三河
〔端裏書〕「念佛」

右大樹寺、毎年從十月八日、十五日迄執行之別時念佛之事、永以不可有退轉之旨、爲兩

永正十七年十月十日

人走廻而可被相調之趣、令同心候處如件、

永正十七庚辰十月十日　太雲（松平信忠）（花押）

植村安忠（マヽ）

中山右京進殿

太雲

十二日、丁酉、京都地震、尋デ、土御門有春、勘文ヲ上ル、

〔後法成寺尚通公記〕十月十三日、戊戌、晴、昨曉地震、○中略有春（土御門）地震勘文進上之、如此、

今月十二日寅時大地震、傍通水神所動也、

勘文

天地瑞祥志云、傍通水神所動也、京房曰、地動者、邑有亂臣、天子愼之、又云、冬地動者、天下疾病有大喪、內經曰、十月地動者、五十五日內有兵革、民流亡、又云、水神所動者、无雨江河枯竭、

永正十七年十月十三日　正五位下有春

〔二水記〕十月十四日、○中略寅刻地震、大動也、十一日事也、

〔實隆公記〕十月十一日、丙申、○中略五更地震甚、

十四日、己亥、細川高國、部將河原林正賴ヲシテ、細川澄元ニ通ズルノ嫌疑ニ依リ、自殺セシム、

〔後法成寺尚通公記〕十月十五日、庚子、晴、時々時雨、○中略和泉守護（細川澄賢）、川原林（正賴）昨日生涯之條、周章之間不來、對京兆（細川高國）依不忠如此云々、

上京ニ於テ切腹

〔二水記〕十月十四日、○中略河原林――於上京切腹云々、與敵通達之儀依露顯也、

〔再昌草〕二十○宮內廳書陵部所藏　永正十七年庚辰

入道宗藝

十月十五日、河原林對馬入道宗藝生涯の事きゝて、

洛中にことしハ種々の大はやし河原はやしそ興いさめけり

〔東寺過去帳〕

同時ニ殺サレシ人々

河原林對馬守（裏書、下同ジ）「永正十七十、爲細川殿被生涯、」利倉民部丞「上久世庄侍也、當寺被官人也、同爲細川殿生涯、」中尾「永正十七十、爲在所令生涯、」稻荷出羽守「永正十七十、爲細川被生涯、」石井美作入道「永正十七十一廿四、爲細川殿被生涯、」同子中將「子細同、峯堂寺僧、此間還住、」

〔新撰菟玖波集〕五秋連歌下

新撰菟玖波集作者

みすしらす成て恨もたゆるよに

葛は風ふく秋の山さと

平正賴

永正十七年十月十四日

〔新撰菟玖波集〕八 戀連歌上

われこそならね人のいつゝり
つれなしや更行までの枩の風　平正頼

宗祇正頼第ニ發句ヲ詠ズ

〔宇良葉〕○前田利爲氏所藏　川原林六郎右衞門尉もとにて柳を、
門田ゆく山みつふかし柳かけ

正頼書狀

〔今西文書〕乾 ○攝津

南郷之内南都目代方へ去年之御段錢六百疋之事、先度預御狀候間、于今不及催促候之處、重而預御折紙、心得申候、恐々謹言、

二月廿六日　河原林對馬守 正頼（花押）

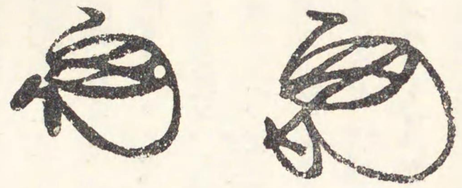
井上忠兵衞尉殿 御返報

○正頼、赤松義村ノ爲メニ、攝津灘鷹尾城ニ攻メラレ、伊丹ニ退クコト、八年七月十三日ノ條ニ、高國ノ命ニ依リ、澄元ノ部將池田三郎五郎ヲ同國田中城ニ攻メテ敗績スルコト、十六年十月二十二日ノ條ニ、澄元、三好之長ト共ニ、正頼ヲ同國越水城ニ攻ムルコト、十六年十一月二十一日ノ條ニ、越水城陷リ、正頼敗走スルコト、本年二月三日ノ條ニ見ユ、

花押

〔參考〕

〔花押彙纂〕カ之部　河原林正頼



○圓滿院文書（近江）
永正六年四月十四日請文

○今西文書 乾（攝津）
二月二十六日書狀

〔陰德太平記〕四　細川高國自江州上洛付三好喜雲（之長）自害幷細川澄元逝去之事

細川高國ノ臣

攝津豐島ニ住ス　難ノ鷹尾ニ築城ス

越水城ヲ築ク

○上略、細川澄元卒スルコトニカ、ル、七月十日ノ條ニ收ム、河原林ハ、此程敵方一味ノ儀有シカ、終ニ露顯シテ、十一月十四日、上京ニ於テ切腹サセラレニケリ、

〔瓦林正賴記〕近比ノ事ニヤ、攝州下ノ郡ノ內ニ一人ノ大名アリケル、當國ノ太守細川右京大夫高國ノ爲ニモ、外シヤクニ付テハ、餘所ナラスナカラ、代々忠節ノ家臣也、凡此比ハ、當國ニカキラス、諸國亂レテ取合ケレハ、彼戰國ノ七雄ノ昔ニモ不異、唯朝夕寄セツ寄ラレツ責戰フ、鬪諍堅固ノ時節ト成ケルコソカナシケレ、○中略去間、彼下郡ノ大名ト前ニ聞ヘシハ、瓦林（河原カ）對馬守平正賴ト申セシ人ノ事ソカシ、彼正賴ハ豐島里ニ常ノ宿所ハ在ナカラ、城ナクテハ叶フマシトテ、四里計西ニ武庫山ノ尾崎難太ノ內鷹ノ尾ヲ城郭ニソ搆ラレケル、○中略、船岡山合戰ノコトニカ、ル、八年八月二十四日ノ條ニ收ム、其後色々ノ扱ヒトモ有テ、播州ト京ト和睦ニ成トハ申セトモ、底ニハ無由斷、其外四國モ大略御敵也、當國ニ可然城無テハ不可叶トテ、國守ハ上郡芥川ノ北ニ當リ、可然大山ノ有ケルヲ城郭ニソ搆ヘラレケル、晝夜朝暮五百人・三百人ノ人夫、普請更ニ止時ナシ、正賴モ又鷹尾城ヲモ搆ヘ、又其東一里隔テ、西宮ヨリ八町北ニ小清水トテ小山ノアルヲ家城ニ拵ヘ、日夜只此營計也、每日五十人・百人シテ堀ヲホリ、壁ヌリ、土居ヲツキ、矢倉ヲ上ケレハ、鍛冶・番匠・壁塗・大鋸引更ニヒマコソナカリケリ、加之、透隙ニハ連歌ヲ興行シテ、月次モアリケリ、夜々ハ古文ヲ學ヒ、道ヲ尋ケレハ、實ニ文武二道ヲ嗜ム人ニテソ有ケル、殊連歌ハ長處ニテ、近比宗祇法師カ撰ケル新撰菟玖波集ノ作者ニモ入ニケリ、彼鷹尾城ニハ與力鈴木與次郎ヲ城掛トシテ、其外（可然カ）ゟ士卒守之、小清水ノ頂本城ニハ、軒ヲ雙テ作リ廣ケテ、正賴常ノ居所トス、外城ニハ、子息六郎四郎春綱ヲ始トシテ、同名・與力・被官棟ヲ雙テ居住ス、其外居餘タル家人トモハ、大略西宮ニ居ス、凡目ヲ驚ス風情、當國ニハ雙少キ大名也、去間、ナタ五鄕內澄元ヒイキノ者トモハ皆浪人ニテ、或阿州ニ下向シ、或淡州・播州邊ニ徘徊シケル中ニ、河島兵庫助ハ播州ニ有ケルカ、正賴ノ與力ヲ緣ニ取テ、降參スヘキ由ヲ連々言入ケル間、正賴返事ニハ、誠ノ降參ノ望アラハ、河島カ一族ニテモアレ、又浪人ニテモ可然者ヲ討取、首ナントト持參セハ許容スヘシト有リ、兵庫助申事ニハ、尤ニテ候、乍去他國ニテ左樣ノ事仕テハ、路次ニテモイカヤウノ事モ可有間、先御免サレタニ候テ、其方ニ安堵仕候者、連々ニ調法ヲ以、可致忠節由（トカ）アリケレハ、是モ尤道理也トテ、喚寄ラレケリ、兵庫助ヲハ鷹尾城ニヲカレ、本知ノ外ニ又扶持ヲソ加ヘケル、子息松若トテ十六歲ニ成ケルカ、容顏見ニクカラス、心又タクヒナシ、剩歌道ヲモ心

連歌ヲ嗜ム

越水城ニ住ス　子春綱

河島兵庫助降ル

兵庫助澄元ニ内通ノ風聞

永正十七年十月十四日

ニカケヽレハ、心ヲヒク人ソ多カリケル、是ヲ正賴膝モトニテソヽカヒケル、去程ニ彼兵庫助カ進退ヲ見ニ、萬ニ心ナキ體トモ見ヘタル、普譜ナント有ニモ自身手ヲオロス事モ無テ、下人トモニ申付、不祥々々ニソシケル、又彼約諾シタル題目ナントモ、無沙汰シテ年月ヲ送リケリ、結句ハ敵ヘ内證ナントスル由風聞シケレハ、所詮彼人ヲハ生害サスヘシトテ、既ニ談合ニ及ケレハ、此内談ヲ子息松若ニハ聞セシトテ、其夜態ト外城ヘコソ出サレケル、松若大利根成者ナレハ凡推量ヲメクラシ、此子細ヲ父ニ知セテ落サハヤト思テ、鷹尾ヘ行ケルカ、一人行ナラハ人ノ不審モアルヘシ、イカヽセント ヲモヒシ處ニ、今參ノ若黨ニ山中ト云者アリ、彼者ニロ云ケルハ、鷹尾城ヲハ未見玉シ、イサヽセ玉ヘ、我等モ用事有テ只今行也ト云ハ、山中ハ子細ヲハ不知、則ロ同道スヘキトアルモ心ヨセナリ、又鷹尾城ロ麓ニ松若カ姉ノ比丘尼有ケルカ、庵ヲ持テ住シケルアリ、山中ヲ此庵内ヘ同道シ茶ナシトノマセ、シハラク待給ヘトテ、松若一人城ニ上リテ父ヲ尋ヌレハ、今朝ハヤ拂曉ニ正賴方ヨリ鈴木ニ被申付ケル間、兵庫助ハヽヤヲキコメラレテ生害スヘキ計也、或人此松若ヲ見付テ、如此ノ儀アリ、御身トテモ遁レカタシ、何方ヘモ一先落給ヘトイヒケレハ、サラハ早我推量違ワサリケリ、父ハ生害ニ究リ、我ヲモ見ノカシロアラロハトテ、上ノ山路ヲ分テ落ニケリ、山中ハ今ヤ〳〵トシナレヵ待ケレトモ、松若ハ不來、城ノ事ハ一向不知案内ナレハ、一人小清水ヘソ歸ケル、此由正賴聞付テ、扨ハ此者同道シテ松若ヲモ落シタリ、近比ノ曲事ナリトテ、ヤカテ生害ヲセラレケルロ不便ナル次第也、去間松若ハ上ノ山ノ森ノ木陰ニ暫忍テ居タリケルカ、麓ノムシヨニ烟ノ立ケルヲ見テ、サテハ早親ハ生害サセラレテ、是ハ一定彼ノ葬火ノ烟ナリト思ヒケレハ、念佛暫ク申テ涙ヲ流シツヽ、ツク〳〵ト案スルニ、イツクマテカ落行ヘキ、父ノ供シテ生涯ヲ果シ、死出ノ山三途ノ川ヲモ同シクコサンコソ侍ノ本意可成ケレト思返シ、今西將監ト云伯母聟ノ宿所ヘ走入、親ニテ候者ハ殿ヨリ早生害サセラレ候、我ハ何クマテモ一先ヲチハヤト存シ、鷹尾ノ上武庫山ノ奥マテ分入シカトモ、父カ生害ヲ見捨テ、何ク迄カ可遁ト思返テ參タリ、殿ヘモ此由被申入、如何樣ニモ生害サセラレ候ヘシトソ申ケル、是ヲ聞ケル老少男女アワレケナケナル人カナトテ、皆袖ヲヌラシテケリ、伯母聟ノ事ナレハ不便ニ思フ事カキリナシ、イカ樣ニモシテ、スカシ落ハヤト思ヘトモ、皆人早知タル事ナレハ隱レ有間敷、然ハ我生害ニ及ヘケレハ、力不及縄ヲカケ正賴ニソ申ケル、松若申事ニハ、發起シテ參ヨリ、何クヘカ取ノクヘキ、縄ヲ

永正十七年十月十四日

ハツシテ刀ヲ賜リ候ヘ、尋常ニ腹ヲ可仕候ト申ケレハ、ソレモコトワリナレ共、一注進之間也、其後ハ兎モ角モ心ニ可任ト云フ、サテ正頼ハ此由ヲ聞不便サカキリナシ思ワレケレハ、今一度是ヘツレテ可來トアル、則ナワツケナカラ本城ヘソ上リケル、近比ケナケノ振舞神妙也、此者ノ事ハ差當テトカモナシ、助ハヤト思ヒテ内談アリケル處ニ、或人ノ異見ニ弱年ヨカラ是程ノ所存アルナレハ、助ケヲカレテハ後悔アラント申間、實ニ毒ノ虫ヲハ腦ヲワリテスイヲヌケトテ、又生害ニソ定リケルコソムサンナレ、サラハ西宮ノ六濕寺トテ會下寺ノ有ケルニ遣シテ、生害サスヘシトテツレテ行ケルヲ、見ル人皆涙ヲ流シテソ惜ミアヘル、無程六濕寺ニ行着テ、松若申ケルハ、繩ヲ免シ暫イトマヲ給リ候ヘ、一人ノ母ノ許ヘ一筆遣シ度由申間、則硯・料紙ヲアタヘケレハ、心靜ニ文ヲソ書タリケル、

サテモ〳〵親ニテ候人、不忠ノ由風聞有ニヨツテ、今朝生害サセラレ候、ワレ〳〵モ定メテウタレマイラセント思ヒテ、一マツ落候ヘトモ、何クニ候トモ何カシコソ、ヲヤノ生害ノ砌ヲ見捨テ逃タルモノヨト、人ニ指ヲサヽレテハ生カヒモナク、何ノ面目アリテカ浮世ニモナカラヘ候ヘキ、所詮親ノ供ヲ致シ、同生害ヲ果スヘシトテ思ヒ返

テ參候上ハ、相カマヘテ聊モ御歎キハ有間布候、サリナカラ親ニテ候者ノ名殘ト申、我々モ唯今生害仕候ヘハ、サソ不便ニ思召候ハスラン、是ノミ心ニカヽリテヨミチノ障トモ可成候、唯何ヨリモ念佛ヲヨク〳〵御申候テ、御吊ヒニ可預候、

先立テ消行露ノ命ヨリ殘ルハヽソノ歎ヲソ思フ

又奥ノ御庵トテ正頼ノ姉ノ比丘尼ノアリケルカ、天性慈悲ノ深キ人ニテ、上下ノ人ニ目カケラレケリ、殊ニ此松若幼少ヨリ不便ニ思ワレ、別テ等閑モ無リケレハ、是ヘモ一筆書テ參セケリ、言葉ハ大略カハラサリケレハ記ニ及ハス、但奥ニ我等カ老母一人殘留リテ、サソ歎キ候ハスラン、是ノミ不便ニ存心ニ掛リ、我等ノ目ヲ被下候ト思メシテ、自然ノ時ハ御音信ニモ預リ候ハヽ、草ノカケニテモ忝ヒ參ラスヘク候トテ、

はゝ木ゝの露の惠を賴哉身はあらしのゝ草のかけにも

カヤウニ二通ノ文書置テ、慥ニ傳ヘテ給ルヘシトテサシ出ケリ、此砌ニテハ、萬ホウキヤクスヘキ事ナルニ、カヤウニ心靜ニ文ヲ書、歌ナントヲヨミケルハ、世ニスクレテケナケ成者ニテソアリケル、アワレ助置テ自然ノ用ニ立ハヤトテ、惜マヌ人ハ無リケリ、

六濕寺衆僧達モ、アワレ浮世哉、命ニ替ル事ナラハ、我々モ〳〵替コソセメトテ、皆衣

兵庫助ノ子松若切ラル

ノ袖ヲソシホリケル（ラレカ）、扨六濕寺ノ庭ニ敷皮ヲシキケレハ、ムスト居直ル（リカ）ト僻世ニ云、
父ニ我ヅカフ願モ三瀬川トモニ越ヘキ道ノウレシサ
トテ頸ヲノヘテソ居タリケル、切テハ澁谷ノ彦二郎ト云者也、太刀引ソハメテ後ヘ寄ケ
ルカ、イカニモ太刀ノアテ所不覺（人々カ）トテ、涙ヲ流シテアキレテソ居タリケル、松若申ケル
ハ、何トテヲクレ給ヘルソヤ、サノミニ物ナ思ワセラレソ、トク〳〵トコソ申ケレ、
サテアルヘキニアラサレハ、袖ヲオサヘツヽ、邪見ノ劔ヲ振トソ見ヘシ、花ノヤウナル松
若カ頸ハ前ニソヲチタリケル、見物ノ貴賤一度ニワツトサケヒケリ、アワレト云モオロ
カ也、サテ澁谷彦二郎是ヲ幸ヒノ善知識菩提ノ縁ト思ヒ、葬送以後ヤカテモトイヒ切、
靈佛・靈社ニ參詣シテ松若カ跡ヲソ弔ヒケル、アワレニヤサシキ事トソ聞ヘシ、サテ彼
老母ノ方ヘノ文ヲ遣ハシケレハ、母ハ此文ヲ見テ、天ニ仰キ地ニ伏テリウテイ、コカレ
テナケキケルハ、實ニ理トソ聞ヘシ、其日ヤカテ髪ヲソリヲトシ、ヲコナイスマシテ、兩
人ノ跡ヲソ弔ヒケル、今一ノ文ヲモ御庵ヘツタヘ申ケレハ、御覽シテ（中々カ）ナケカル、事申
ハカリハ無リケリ、此事カネテ夢程モシリタリセハ、涯分コヒウケテ出家ニモナシ置ヘ
キモノヲト、シウシヤウアリケレトモ、今ハカイコソ無リケレ、彼最後ノ言（ノカ）ヽ葉モ哀ナ

リトテ、老母ノ行ヒテ居タリケル處ヘ、常々ハ音信アワレミヲタレケレハ、松若ハ草ノ
陰ニテモサソウケ喜フラムト、有カタクソ覺ヘケルトナン、

十五日、庚子、御日待、和漢御會アリ、

〔二水記〕十月十五日、晩頭參伏見殿（貞敦親王）、鹿苑院殿（等貴）渡御、田樂事御振舞也、逍遙院（三條西實隆）被參、
有中將碁、入夜參內、御日待、有和漢御會、曼殊院宮（慈運）令候給、近臣衆四五人候了、

〔實隆公記〕十月十五日、○中略於伏見殿有象戲興、待日、
十六日、辛丑、晴、時々時雨、正受寺被來、亞相（近衛稙家）女中等日
待也、入夜日野・典厩・一牛等來、勸一盞、初夜時分京兆（細川高國）來、被官面々少々召出、奏音
曲、有文字書等、勸一盞、曉鐘之時分、京兆計早出、德大寺（公胤）女中等被來、各天明之時分
退出、

○伏見宮貞敦親王御所及ビ近衛尚通第日待ノコト、便宜合敍ス、

十六日、辛丑、御料所山城灰方鄕、新穀ヲ獻ズルニ依リ、廷臣ニ宴ヲ賜フ、

〔二水記〕十月十六日、○中略晩景有灰方御祝、廣橋大納言（守光）・冷泉前中納言（永宣）・帥（三條西公條）・四辻等（公音）

御日待翌朝ノ儀
伏見宮貞敦親王御所日待
近衛尚通第
文字書

中納言、（鷲尾隆康）予・左大辨宰相（甘露寺伊長）・伯（雅業王）・山科（言綱）等三位、其外雲客等候於御三間、御相伴如例年、各令沈醉了、

二十一日、丙午、播磨守護代浦上村宗、同國松原八幡宮八正寺ヲシテ、寺領地頭職等ヲ安堵セシム、

〔松原神社文書〕坤 ○播磨

松原八幡宮八正寺領地頭職幷名番一圓之事、古美作守（浦上則宗）如申合、○浦上則宗、松原八幡宮ニ、播磨三野南條地頭職ノ内ヲ寄セテ、近江出陣ノ無事ヲ祈ルコト、長享元年十二月五日ノ條ニ見ユ、爲寺家被進退、可被專修理勤行者也、仍狀如件、

永正十七
十月廿一日
八正寺
行事坊

村宗（浦上）（花押）

名番祖父則宗ノ申合ニ依ル

是ヨリ先、建仁寺瑞慶院、同院末寺丹波禪居庵領代官波々伯部兵庫ヲ改易ス、是日、同國守護細川高國ニ、其許容ヲ請フ、

〔兩足院文書〕三 ○山城

（端裏書）「申狀案文」

建仁寺瑞慶院雜掌謹言上

禪居庵ハ高國ノ祈願所年貢緩怠ニ依ル改易

當院末寺丹州桑田郡法貴村之内禪居庵領之事、御屋（細川高國）形樣依爲御祈願所、于今當知行無相違候、然間、代官職波々伯部兵庫方雖申合候、□□（到今カ）寺納無沙汰之條、改易候處仁、被成御下知候、迷惑仕候、此等趣可然樣、預御披露候者、可忝存候、猶以可致御祈禱之忠勤者也、仍粗言上如件、

永正十七年十月廿一日

二十六日、辛亥、幕府、山城醍醐陵田ノ折中分ヲ、三寶院ニ還付ス、

〔諸寺文書纂〕八 醍醐三寶院

醍醐陵事、先年對勘解由少路（小）三位在重、雖被折中、被歎申之條、被還附訖、所詮、早如元一圓可被全領知之由、所被仰下候也、仍執達如件、

永正十七年十月廿六日

下野守（飯尾之秀）（花押）
上野介（齋藤時基）（花押）
前近江守（飯尾貞運）（花押）

勘解由小路在重ヘノ折中分

三寶院御門跡雜掌

〔嚴助往年記〕上 同十一月（永正十七年）、陵事、如元一圓當寺仁被還付之、

永正十七年十月二十六日

祖父通直ノ判形ニ依ル

○三寶院、勘解由小路在重ノ、醍醐陵田ヲ違亂スルヲ、幕府ニ訴フルコト、六年九月二十日ノ條ニ見ユ、

伊豫守護河野通直、二神藤二郎ヲシテ、同國粟井安岡・同友兼兩名ノ地ヲ安堵セシム、

〔二神文書〕○伊豫

粟井安岡名・同友兼名宮崎分等之事、後善應寺(河野通直)殿判形任當知行之旨、不可有相違之狀如件、

永正十七年十月廿六日　通直(河野)(花押)

二神藤二郎殿

○河野通直、二神四郎左衞門尉ニ、粟井安岡名等ノ地ヲ充行フコト、文明十一年十二月十三日ノ條ニ見ユ、

二十八日、癸丑、幕府、山城大原野社勝持寺衆徒等ノ、同寺行人方所領ヲ押妨スルヲ停メ、社家ヲシテ、行人方ニ合力セシム、

〔大原野神社文書〕○山城

花帽子相論

〔附箋〕「勝持寺々中」

當寺行人方衆申花帽子之儀、御糺明之處、寄事於左右、行人方田地等、悉爲衆徒中押置云々、以外次第也、於彼相論者、可被決理非、先至寶嚴坊以下行人方衆知行田畠等者、如近年可致所務旨、被成奉書訖、有自然之儀者、可被合力行人方衆之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十七　十月廿八日　基雄(齋藤)(花押)　貞運(飯尾)(花押)

大原野社々家中

筑紫滿門ヘノ合力分

杉興道知行分

筑前守護大內義興、秀哲ヲ同國宇美八幡宮社務職ニ補シ、社家領ヲ安堵セシム、

〔石淸水文書〕二田中家文書

宇美社務職事、任前々筋目被仰出候、社領之儀少々者、當時就筑紫下野守(滿門)御料簡被借、乍去、社家持留地事、近年非分之仁押領候歟、不可然候、社務職被仰出上者、右所々被存知、爲社家、每事可然候樣、可有載(裁)判候、杉勘解由(興道)左衞門尉知行分事者、內々對陶尾(興房)州、被仰出子細候、定而一途可有料簡候哉、仍被對杉豐後守(興長)、以奉書申候、可被請彼儀

永正十七年十月二十八日　二六九

候、恐々謹言、
（別筆）「永正十七」
十月廿八日
宇美社務（秀哲）御坊

（神代）武總（花押）

○義興、宇美八幡宮社務房秀ヲシテ、近年不知行ノ同社領ヲ安堵セシムルコト、大永元年二月十五日ノ條ニ見ユ、

是月、權中納言勸修寺尚顯、加賀ヨリ上洛ス、

〔實隆公記〕十一月一日、勸修寺（尚顯）中納言來臨、此五六日、自賀州上洛云々、

○尚顯、加賀ニ下向スルコト、八月二十二日ノ條ニ見ユ、

十一月大乙卯朔盡

一日、乙卯、御祝、

〔二水記〕十一月一日、乙卯、晴、參當番、入夜御盃如例、

二日、丙辰、美濃長井長弘、豐前勘解由左衞門尉ノ、同國汾陽寺祠堂方買得田地ヲ違亂スルヲ誡ム、

〔汾陽寺文書〕二　○美濃
（編裏書）「長井殿案文　長井ヨリ豐前勘解由殿留」

案文

其後久不懸御目候、御床敷存候、仍武義（儀）之汾陽寺祠堂方にて御買得候石田郷内下地興行分之事、自其方可有御催促之由被仰候之旨被申候、彼下地之儀ニ付而、先年御給人衆被仰事候き、利良（齋藤）宿老衆へ申談、子細申分候處、不及御違亂落居候、其後重而御給人衆御違亂候間、齋藤四郎左衞門尉を以て、自寺家被申分、彼折帋之寫幷利良書狀之案、彼是三通爲御披見令進覽候、前々の儀御存知有間敷候哉、可然樣ニ被成御意得候ハん事、簡要存候、彼寺之事、當所寺奉行候、其申次私（長弘）仕候、自寺家以使僧被申候間、令啓候、猶巨細

石田郷下地興行分ノ催促

先年ノ違亂

汾陽寺ハ寺奉行申次長井長弘

細此僧可被申入候條、不能詳候、恐々謹言、

永正十七
十一月三日　　(長井)長弘在判

豐前勘解由左衞門尉殿參　御宿所　　長弘

○齋藤利良、給人等ノ、汾陽寺祠堂方買得田地ヲ違亂スルヲ停ムルコト、十五年二月二十七日ノ條ニ見ユ、

六日、庚申、庚申當座和歌御會、

〔二水記〕十一月六日、午時參內、○中略入夜有庚申御會、五十首御當座也、丑刻許各令退出、

清書、重親(庭田)朝臣讀上之了、御人數少々也、

正三位冷泉爲孝ヲ從二位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十六　權中納言正三位藤爲孝(冷泉)、四十六、十一月六日、敍從二位、

十日、甲子、多武峯社正遷宮、

〔公卿補任〕四十六　十一月十日、多武峯遷宮、

〔談山神社文書〕第二回一　○大和

當社正遷宮來十日之由、被聞食畢、任先例所被立使也者、長者宣如此、悉之、以狀、

長者宣

五十首

永正十七年十一月三日

多武峯寺衆徒中

右衞門佐宣綱(中御門)

〔宣胤卿記抜書〕十一月九日、明日多武峯社遷宮、關白家使(二條尹房)右衞門佐十歲、宣綱、今日至南都下向、出立料五千疋、兼日寺家沙汰、昨日迎入夫十人・馬二疋上、宣秀(中御門)卿相伴下、繪馬二枚進、

〔實隆公記〕十一月十日、甲子、○中略今日多武峯遷座云々、中御門昨日下向、

〔乘光記〕永正十七年庚辰、十一月十日、正遷宮、宣綱參向之時奉納之、

乘光(中御門宣胤)

神もなをめくみをそへよ孫枝さす藤は子松の千とせさかへむ

乘光

わか山とまもる御寺も數そいん神のよろこふ宮つくりして

正二位行權大納言藤原朝臣宣秀

つくりかふるこの宮はしら萬代の常盤のかけやなをあふきみん

正遷宮、天子御使中御門宣綱(十二歲)、御親父宣秀御同道參向、祖父乘光御奉納卷物一卷・御詠三首・短冊二枚、

永正十七年十一月十日

氏長者使中御門宣綱參向父宣秀共ニ下向ス

中御門宣胤宣秀父子和歌ヲ奉納ス

御宿坊往生院、時院主權律師英存、爲後代注寫之、

〔門主傳〕二十三　○華頂要略十二所收　桂蓮院入道二品親王　諱尊鎭　俗諱清彥

（永正）同十七年庚辰十一月十日多武峯遷宮、

十二日、丙寅、近江小幡社ヲ、惣社大明神ト號セシム、

〔宣胤卿記抜書〕十一月十二日、秀房（萬里小路）朝臣來、條々問之、

近江國神崎郡小幡社、可奉號惣社大明神之由、被聞食訖者、依天氣執達如件、

永正十七年十一月十二日　　左中辨（秀房）判

小幡山神官中

右書樣加指南、（三條西實隆）入道前內府執申、此案彼手跡也、

〔實隆公記〕十一月十二日、丙寅、近江國小幡社綸旨事、元應寺懇切被申間、申頭左中辨遣之、職事禮物直遣之、此亭へ杉原一束被惠之、

十三日、丁卯、河內畠山植長、同國水分ノ地ヲ小笠原孫右衛門尉ニ充行フニ依リ、同地ノ名主百姓等ヲシテ、年貢諸公事物ヲ孫右衛門尉ニ輸セシム、

綸旨

三條西實隆執奏元應寺ノ請ニ依ル

菱木孫右衛門尉抱分

訓公ノ遺言

存牛辭退ス門徒等會合同心シテ上洛ヲ促ス

〔建水分神社文書〕○河內

河州東條郡水分菱木孫右衛門尉抱分、小笠原孫右衛門尉被仰付候、其旨存知、年貢諸公事等、如先々可取沙汰之旨、被仰出所也、仍狀如件、

永正十七　十一月十三日

水分名主百姓中

正勝（花押）

十五日、己巳、三河信光明寺存牛（超譽）ヲ、知恩院住持ト爲ス、

〔信光明寺文書〕○三河

知恩院住持職之事、任故肇譽（訓公）上人遺言、○訓公肇譽寂スルコト、八月十五日ノ條ニ見ユ、早令存知、宜奉祈天下泰平、寶祚延長者、綸命如此、仍執達如件、

（永正十七年）十一月十五日　　左中辨秀房（萬里小路）

信光明寺超譽（存牛）上人御房

〔知恩院文書〕一○山城

知恩院住持職之事、任肇譽上人御遺言旨、以使僧被申入候之處、堅御辭退、不可然候、就之、既達叡聞、被成綸旨訖、仍門徒中會合于東山、同心令申候、不被及御斟酌、早々有

永正十七年十一月十五日

永正十七年十一月十五日

御上洛、被調公私之御禮、可有影前燒香事、且御報謝、且冥加候哉、於無御領狀者、有誰々仁爲住持乎、然者院宇立地荒廢、法緣自然衰微候、猶至難澁者、被背勅命之段、云貴邊、云寺家、可爲時宜如何候哉、所詮速促上都之企、刷入院之粧者、可爲宗門繁昌、仍連署如件、

永正十七年十一月廿日

淨教寺 開譽（花押）
智惠光院 淨譽（花押）
法然寺 德譽（花押）
知恩寺 傳譽（花押）
報恩寺 慶譽（花押）
寶泉院 上譽（花押）

松平親忠ノ六男

信光明寺 侍者御中

〔信光明寺緣起〕

第二世肇上人（諡公）、入本山知恩院、爲二十三（四）世祖矣、超譽上人者、信光（松平）公之令孫、親忠（松平）公六男也、爲釋譽弟子受戒、其后入當寺、爲第三世祖也矣、親忠公住居岡崎城之時、爲代代先祖・慈父信光公菩提、同國鴨田村草創一宇而號大樹寺、爲勢譽上人於開山祖也、超上人者當寺住職也、此時本山知恩院依爲無住、惣門家招待超上人、超固辭、依之惣門家奏聞之、于時永正十七年十一月十一日也、此故後柏原院勅有、綸旨云、〇綸旨、信光明寺文書ト同ジキニ依リ略ス、是故六箇寺尊宿重而遣連署、其詞云、〇連署狀、知恩院文書ト同ジキニ依リ略ス、其後此連署爲知恩院惣本寺證明、家康（德川）公自當寺、被遣知恩院、今猶在于本山也、是其所寫置文言矣、超譽卽頂戴綸旨而入知恩院、爲二十四（五）世祖也、超本山住職之內、歎爲當寺（信光明寺）無住、經七箇年住職之後歸當寺再住焉、

〔華頂誌要〕

寺門沿革

永正十七年超譽存牛第廿五世に補す、上人は三州岩津城主松平親忠（德川家康六世の祖）、の子なり、

〔三緣山志〕

一中興嘉運　御當家御師檀

左京亮親忠君は、同國（三河）鴨田村西光寺勢譽上人を歸依し給ひ、〇中略つゐには御子の內を出家せしめられ、超譽上人と號す、上人、後に信光明寺に住したまひ、又後柏原院の勅請によりて、永正十七年十一月十五日、知恩院に住し給へり、

十六日、庚午、細川高國、吉川出雲守某ヲ薩摩ニ遣シ、同國島津忠兼及ビ種子島忠時ニ、遣明船ノ事ニ就キテ、再ビ、助成ヲ請フ、

永正十七年十一月十六日

種子島忠時ニモ依頼ス

〔黒岡帯刀所藏文書〕　○薩摩

就渡唐之儀（船脱カ）、吉川出雲守令下著候處、無別儀之由、彌入魂可爲喜悦候、恐々謹言、

永正十七　十一月十六日　高國（細川）

嶋津豊後守（忠兼）殿

右封をなされす、御奉書なとのやうに、帋を二ツ折て被認、

〔種子嶋家譜〕　二　忠時

十一月十六日（永正十七年）、將軍義晴公之管領細川右京太夫（大）高國賜書、開于左、

就渡唐船之儀、吉河出雲守令下著候處、無別儀之由候、彌入魂可爲喜悦候、恐々謹言、

十一月十六日（永正十七年）　高國（花押）

種子嶋武藏守（忠時）殿

○高國、島津忠兼・同忠朝ニ、遣明船ノ事ニ就キ、助成ヲ請フコト、本年閏六月十七日ノ條ニ、大内義興、島津忠朝ニ遣明船ノ新造及ビ其警固ヲ依頼スルコト、大永元年是歳ノ條ニ見ユ、

細川高國、犬追物ヲ興行ス、

〔後法成寺尚通公記〕　十一月十六日、庚午、晴、有犬追物、京兆（細川高國）張行云々、二手犬云々、珍敷作法云々、然間從昨夕民部大輔（細川高基）色々申遣、棧敷可相搆之由、度々申間、亞相（近衛稙家）令見物、慈照寺令同道、一盞興行云々、

〔實隆公記〕　十一月十六日、於細川有二手犬追物云々、

〔壬生于恆記〕　○宮内廳書陵部所藏　十一月十六日、庚午、晴、於細川右京兆馬場、犬追物在之、予（于恆）見物、

十九日、癸酉、觀雪御宴アリ、

〔二水記〕　十一月十八日、午時雪散、

十九日、早旦參當番、初雪之御盃如例、伯三位（雅業王）依歡樂不候、各沈醉、不可說々々々、

〔實隆公記〕　十一月十八日、雪初降、

十九日、○中略　内裏御雪消、帥（三條西公條）參入、

二十日、甲戌、細川高國、山城離宮八幡宮領大山崎ニ、德政ヲ免除ス、

〔離宮八幡宮文書〕　二　○山城

德政事、○德政ノコト、二月十二日ノ條ニ見ユ、雖爲天下一同、爲神領間、當所儀被免除訖、向後不可有相違之由候也、仍執達如件、

永正十七年十一月十九日　二十日

奉行中山康親

二十一日、乙亥、幕府、禁裏築地ノコトニ就キ、細川高國ニ命ズ、尋デ、又之ヲ催促ス、

〔守光公記〕（○東洋文庫所藏）十二月二日、丙戌、禁裏築地之事、去月廿一日、（飯尾貞運）近江召右京大夫（細川高國）雜掌、永澤、被仰出之處、右京大夫御返事、相尋兩守護代、可申入之由申云々、今日又催促之處、其後度々雖令催促、于今不申御返事云々、

○近畿地震・風雨ニ依リ、禁裏築地破損ノコト、三月七日ノ條ニ見ユ、

二十二日、丙子、第四皇子ニ親王宣下アリ、御名ヲ寛恆ト賜ヒ、權中納言三條西公條ヲ勅別當ト爲ス、

〔公卿補任〕四十六　同廿二日（十一月）、寛恆親王宣下、帥中納言公條（三條西）卿補別當、勅歟、

權中納言從二位藤公條（三條西）三十四、十一月廿二日、補寛恆親王家別當、

正三位同康親（藤）三十六、十一月廿二日著陣、親王宣下奉行、（中山）

〔狩野亨吉氏蒐集文書〕十一　○京都帝國大學所藏文書所收

勅別當宣旨

（端裏書）「勅別當宣旨案永正十七十一廿二」

權中納言兼大宰權帥藤原朝臣公條

左中辨藤原朝臣秀房傳宣（萬里小路）、權中納言藤原朝臣康親宣、奉勅、宜爲寛恆親王家別當者、

永正十七年十一月廿二日　主殿頭兼左大史小槻宿禰于恆（壬生）奉

上卿勅別當兼帶時者、不及成此宣旨、只今者、依爲別人、成宣旨了、爲後世記口傳者也、

庭田重親三條西實隆ト御名字ヲ議ス

〔實隆公記〕十一月十六日、○中略（重親）庭田來、梶井宮（寛恆親王）御名字事談合之、其外有傳勅語事等、廿日、○中略中山中納言來、梶井宮親王宣下可奉行、其間事談之、廿一日、中山黄門來臨、談明日參陣事、廿二日、梶井宮親王宣下、

宣下ノ儀

〔宣胤卿記拔書〕十一月廿二日、今日親王宣下也、奉行頭左中辨秀房朝臣、上卿中山中納言、（康親）親康卿、辨秀房朝臣、先上卿遂著陣、昇進以後也、次更著奥座奉仰云々、御名字寛恆、書高檀帋一枚、無裏紙、職事下之、仰詞可爲親王、上卿仰辨、々仰史、次勅別當職事仰之、其詞、大宰權帥藤原朝臣、可爲親王家別當、上卿仰辨、々仰史、其外無別事云々、

訪錢

宣旨史內々付勅別當云々、下行、六位史百疋、陣官百疋、陣疊持參御訪三十疋、軾五十

永正十七年十一月二十二日

疋、以上二百八十疋、

〔二水記〕十一月廿二日、午刻向下冷泉亭、今日四宮親王宣下、上卿中山參勸也、於此亭著裝束則參內、陣儀不見物、傳聞、奉行職事頭左中辨秀房朝臣參陣、辨同人云々、上卿先自分之著陣有之、御俗名寬恆云々、勅別當帥中納言云々、送宣旨於別當之宿所、別當又令持參本家伏見殿（貞敦親王）云々、

廿五日、○中略入夜參伏見殿、有銚子事、是四宮御方御兒惜也、及數獻各沈醉、五更令歸、參番了、

廿六日、午時參內、有御銚子事、伏見殿（邦高親王・貞敦親王）兩御所御參、及數獻、歌舞狼藉、不可說々々々、

廿七日、早朝參伏見殿、四宮御方渡御武家也、御童裝束也、供奉衆房官三人也、廳務一人、騎馬侍二人、兼參室町殿云々、出世人依無其仁不候、御興寄沓脫云々、爲御童形之故也、近年御童體之時、御參賀之儀無之、武家御祝著云々、申次藤兵衞督（高倉永家）也、伯三位（雅業王）相共奉扶持云々、御興御供此邊侍衆令候了、

〔本朝皇胤紹運錄〕

後柏原院諱勝仁、

別當宣旨ヲ伏見宮ニ持參ス

御兒惜

邦高親王御父子宮中御宴ニ御參會

寬恆親王幕府ニ渡御

山科彥胤法親王梶井、俗名寬恆、母同覺道親王、（贈二位源子、從一源雅行卿女）

〔諸門跡傳〕○二圓融坊○華頂要略百四十一所收　無品入道彥胤親王後柏原院第四皇子、母贈二位源子、從一位雅行卿女（庭田）

永正十七年十一月廿二日、親王宣下、諱寬恆、勅別當帥中納言公條卿、上卿中山中納言康親卿、奉行頭左中辨秀房、

○寬恆親王、梶井門跡ニ入室アラセラレ、得度シテ御名ヲ彥胤ト改メラルヽコト、本月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十四日、戊寅、三條西實隆、山城參鉾寺ニ詣ス、

〔實隆公記〕十一月廿四日、詣參鉾寺、

廿五日、參鉾寺逗留、

廿六日、齋後歸京、

逗留

歸京

和歌ヲ詠ズ

〔再昌草〕二十○宮內廳書陵部所藏　永正十七年庚辰

同廿四日（十一月）、西山參鉾寺にまうて侍し、桂川さしわたす程、思つゝける、

彼岸もほとなき物をわたし船かちとる人のゆかんとやおもふ

もすめといふ所の小坂うちこえて、松原をかしくみへ侍しかは、

永正十七年十一月二十四日

嵐吹小野の草くき聲さむきもすめにたてる松のさひしさ

本山にまかりつきしに、雨降いてゝ、日もたけしかは、今夜ハとゝまるへきよし、一和尚のひしり申侍しかハ、すこしやすみて、本堂にまひり侍るとて、鐘樓のもとまかり過しに、上人（證空）の名字なと鑄つけられしかハ、洪鐘の現在したるもありかたくおほえて、

契あれやたゝけハひゝく鐘のうへに殘れる筆の跡をあふくも

夜に入て、靜坊の別時の床（座ィ）につらなりて、

今日かゝる法のむしろにまゐりてもなかハた塵の身をそ悲しむ

上の坊にかへりて、灯の下にて、緣起の繪六巻しつかにひらきみて、うちふして、終夜雨をきゝて、

かくてこそわか身ふるへき夜の雨を旅の枕ときくかなやまん

後夜の鐘をきゝて、

鐘のこゑこれをおとろく限にて夢のうき世にかへらすもかな

廿五日、つとめてけふハ聖廟の念誦すとて、

緣起繪卷

證空銘ノ洪鐘

證空等ノ筆蹟

本尊佛眼曼荼羅

靜坊ノ別時論義

別時分經

夜の雨雪ならましの朝戸哉

風なき松のさむからぬ山

春を先いそくかたへの梅さきて

けふハ猶とゝまりて、ひそかに御自筆、おなしく自他筆、積學房の聖教等、三合申いたして拜見し侍し、ありかたき結緣になん、

けふにあひていともかしこくみさりしをきゝてそみつる水莖の跡

本堂の本尊佛眼の曼陀羅開帳せしめて、おかみたてまつりて、

あなたうと法のことくにうつしをく佛のみかほ眞如くちせす

今夜ハ靜坊の別時論義あり、未發心の上に、戒體受得の義あるや、諸佛如來是法界身といふ彌陀をさすやといふ題目なり、いとたうとくなん侍し、廿六日、靜坊の別時分經ハ觀經の末をとりてよみ侍し、事ハてゝ坊に歸り侍しかハ、京よりのむかへきたりて、いそかしたて侍るに、雪うちゝりて、うきたる雲の風にみたれ行をみて、

かくてわかゐるへき山の嶺をゝきてうきたる雲の又やいつらん

永正十七年十一月二十四日

善峯觀音ニ詣ス

かへさいよし峯の觀音にまうてゝ、それよりそいて侍しすから風いけしくすさましく侍しに、こゝのあなたなん灰かたといふ所なりといふをきゝて、

埋火もありともみえす灰かたいこゝそときけとすさましきまて

忠兼新納忠武ノ兵ト大隅比目木石ニ跳ニ戰フ

二十七日、辛巳、薩摩守護島津忠兼、部將伊集院尾張守ヲ大隅噌唹郡城ニ攻ム、是日、尾張守降ル、

【前編薩藩舊記雜錄】四十二　宮里孫太郎正豐傳

一永正十七年庚辰七月廿四日、於大隅比目木石跳、新納(忠武)殿衆ト合戰、勝久公御譜中、見于年代記、

一同年八月廿一日、著陣於曾於郡、十一月廿七日、伊集院尾張守・新納近江守忠武之士卒降、去其城、屬無爲也、○島津國史異事ナシ、

【前編薩藩舊記雜錄】四十三　見于本田兼親譜

一大永二年兼親年六十一、壬午八月五日、忠兼(島津)主賜兼親誓書、其所以然者、永正十六年己卯十一月廿七日、伊集院尾張守背忠兼主、楯籠曾於郡城、同十二月八日、新納近江守忠武合意於尾張守、遣士卒於曾於郡城、同十七年庚辰八月廿一日、忠兼主著陣、攻之無功、忠兼

本田兼親ノ戰功

公自幼與兼親爲親子約、故兼親年五十九、怒、不利戰定死於一途、堅我清水數謀數戰、敢不退、終城兵勞、同十一月廿七日降參矣、大概擧此功、將來不變約也、

【島津正統系圖】

十一代
忠昌
十四代
勝久

初忠兼、後義忠、宮房丸、又八郎、八郎左衞門尉、修理太夫、陸奥守、享祿元年改名勝久、○中略
同年(永正十七年)八月廿一日、著陣於曾於郡、同十一月廿七日、伊集院尾張守・新納近江守忠武之士卒降、去其城、屬無爲也、

忠良

庭田重親三條西實隆ト御入室ノコトヲ議ス

○忠兼、肝屬兼演ノ、噌唹郡城ニ於ケル戰功ヲ褒スルコト、二月五日ノ條ニ見ユ、

二十八日、壬午、寬恆親王、梶井門跡ニ入室アラセラレ、得度シテ、御名ヲ彦胤ト改メラル、

【實隆公記】五月十二日、己亥、晴、○中略　庭田重親朝臣入來、梶井宮御入室事、有被仰談之事、愚存申入了、

永正十七年十一月二十八日

實隆參內シ御入室ヲ賀ス
御入室ノ御裝束
伏見宮ニ於テ御別宴
御暇乞ノタメ御參內

十月十一日、丙申、毗沙門堂(忠承)一荷兩種被携來、盃酌、梨(梶井門跡)門事等被談、
十一月廿日、庭田來、梶井宮御入室事談合、
廿八日、梶井殿御入室、則御得度云々、
廿九日、及晩參內、御入室事賀申之、

〔二水記〕十一月廿八日、早旦參伏見殿、今日四宮(寛恒親王)御方御入室、梶井、御登山也、辰刻著御々直衣、先御單、色フシカネ、文菱、押白薄所々也、次袙、有裏、御文小葵、色薄紅梅也、次御直衣、色白、御文同御袙也、御指貫、濃物、御文フセンレウ、冷泉前(永宣)中納言奉仕之、著御了有御盃酌儀、入道宮(邦高親王)御出座、中書君(貞敦親王)同之、左相府(轉法輪三條實香)被參、中御門(宣秀)大納言・按(田向重治)察・大藏卿(東坊城和長)・勸修寺中納言(尙顯)、其外歷々參候也、三獻參、三獻之度、中書君御酌、各有召出、事了寄御輿於妻戶則乘御、中御門大納言褰御簾、御童形限此期之條、男女上下奉惜之、淚痕難休者也、御容顏美麗、誠以惜存者也、爲御暇乞先有御參內、先之供奉雲客三人參內懃所役云々、御簾重親朝臣、御沓範久云々、申次山科三位云々、於唐門下御下輿云々、予戀慕(鷲尾隆康)之思不休、仍爲路次見物、改異體、於一條高倉邊奉見之、路次之樣、御輿、板輿、懸下簾、御供侍十人歟、次房官三騎、廳務・北坊・西坊、各直綴白袴、次中御門大納言、塗輿、上簾、小雜色四本、布衣侍一人、笠持等、次勸修寺中納言、塗輿、垂簾、雜色四本、笠持、次重親朝臣、次範久、次濟俊(姉小路)等也、各塗輿、不上簾、雜色四本、笠持等各同之、御行粧驚目了、此後又參伏見殿、御盃酌及終日了、女中御出座、

供奉ノ公卿ト坊官トノ順序ニ就イテノ疑義
八瀨ヨリ御登山
戒師毘沙門堂忠承

上下離愁之淚無休々々、

今日條々　或人云、中御門布衣侍、可爲騎馬者也、步行之儀見苦、何從山下不召具哉云々、

一御供之月卿雲客、可在御輿之次、可相隔房官之事不甘心之由、中御門大納言申之、大藏卿云、舊記悉於門下之衆者、各候御輿後歷然云々、此儀及問答、當座難決之間、被尋逍遙院(三條西實隆)之處、其返答云、御輿之儀隱密之體也、然間、一向爲各別之儀、遙跡可參之條可宜云々、仍治定此儀了、後聞、中御門亞相此儀猶不甘心、雖爲御隱密之體、已以可供奉之旨、依仰今如此、然間、各著衣冠參候也、非御供之儀者、前日可登山者也、此儀猶不審、若供奉之儀於治定者、房官之後無其謂者哉、大藏卿申分、雖有先規舊例定可爲本式之儀、至其時者勿論也、今日直綴白袴之體、堅固略儀也、然間可在俗中之上段、不甘心云々、此儀如何、

朝程晴、從山下雪降云々、
一御登山之事、本路雪、裏難通、仍從〻(ヤセ)御登山云々、從山下乘御四方輿、四方簾悉垂也、〻(ヤセ)童子奉舁之、山徒三百人許參御迎、使節〻引具之云々、俗中從是乘板輿、力者舁之云々、

一供奉公卿殿上人各衣冠也、此事如雲客、必可爲束帶之由、有所存人、如何、
一申刻許著御門跡云々、則五獻參、此後有御得度之儀云々、御戒師毘沙門堂僧正〻(忠承)也、

十二歳

御裝束等ヲ乳女ニ下サル

奉行庭田重親

新典侍局ノ酒宴

永正十七年十一月二十八日

唄師覺雅僧都（安居院）・敎授忠順僧都（石泉院）・剃手長賀僧都（常樂院）云々、四宮御方當年御十二歳、御法名彥胤、

一御裝束・赤御服等、悉後日被遣御乳女許云々、後又各分給云々、（後聞、剃手事、先石泉院勲其役、然後令與奪常樂院云々、御結分事、石泉院兼役云々、）

一今日之儀、庭田中將奉行也、

廿九日、（○中略）午前參伏見殿、昨日之儀無事珍重之由申入了、今日中御門・勸修寺・姉小（濟俊）路等各下山云々、

十二月一日、（乙酉）、陰、（○中略）庭田今日令下山云々、

二日、詣新典侍（庭田源子）殿局、從山上有御樽、終日飲酒、秉燭之程參內、竹內殿（曼殊院慈運）被進御樽、仍有御盃酌、及四五獻了、（高倉今日令下山云々、）

〔永正十三年八月日次記〕永正十七年十一月廿八日、四宮（十二才）、爲梶井門跡、今日御登山、師宮（堯胤親王）者御入滅也、（○堯胤親王薨ゼラルヽコト、十六年八月二十六日ノ條ニ見ユ、）御供中御門大納言・勸修寺中納言・庭田朝臣・範久（高倉）朝臣・濟俊（姉小路）朝臣、

十二月一日、傳聞、梶井宮、御入室之夜則御得度云々、戒師毘沙門堂云々、

〔諸門跡傳〕二（圓融坊）○華頂要略百四十一所收

同月廿八日、（永正十七年十一月）入室、則登山、得度、（法名彥胤、年十三才、〔二〕）戒師毘沙門堂僧正忠承、（無品）唄師覺雅僧都、敎

義村隱居ヲ强要セラル

才松丸ヲ浦上村宗ニ託ス

法名常印

授石泉院忠順僧都、剃手常樂院長賀僧都、

○寬恆親王宣下ノコト、本月二十二日ノ條ニ見ユ、

是月、播磨守護赤松義村、家督ヲ子才松丸ニ讓リ、尋デ、薙髮ス、

〔赤松記〕永正十七年、（○中略）小鹽に雜說出來、とかく御隱居被成可然とあつかひ、同十一月、御曹司（才松丸）樣七歳の御時、浦上掃部助村宗に御渡し候、村宗請取まいらせ、室津へ入申候、めし樣御二人（政則室細川氏・義村室）とも最前より浦上と御同心のことにて、御屋形（義村）をすて、御屋形、御曹司樣とひとつに御出被成候、其後先御屋形御くしおろされ、常印と御名を御付被成候、（○下略）

〔備前軍記〕乾　赤松政村（義村）入道して小鹽退去の事

政村度々の軍に打負、其上老臣清水甲斐守政國・神津（秋）宮內少輔秀國・完粟作十郎範高等、久米十郎左衞門か讒言せし故こ、君臣不和になりて、清水・秋津等引籠り、完粟も手疵を痛しを稱（とカ）して出仕せす、其外赤松黨三十六家といふ者も、多く主人を見限りて、相そむく者多くして、重て兵を催し、三石を攻へき手段もなりかたく日を送りける中には、浦上村宗へ心をよせ、內通する者も又多かりけれハ、小鹽上下一和せさる事、具に

永正十七年十一月是月

村宗ト義村室等トノ通謀

三石へ聞へけれは、村宗も是を聞、時至りぬと思ひて、潛かに小鹽へ使を立て、古政則の後室・政村の室へ申遣しけるは、浦上村宗事、赤松累代の長臣にて、尤代々忠功を盡し候處、今俟人の爲に讒せられ、止ことを得すして三石に一旦籠城仕候得共、全く以て屋形の義、疎略には存奉らす候、主人は一代、家は末代にて候得は、當屋形世を退て隱居ましまさは、わか君を家督となし、以前のことく輔佐の臣となりて、赤松家長久の謀を廻し可申と、言葉を盡して云やりけれい、室家かねて夫婦の間不和なれは、母堂と共に村宗に同心の返答に及ひ、又老臣秋津・清水・完粟等に此旨を云聞せけるに、皆同心して、政村を押て隱居とし、小鹽の別館に蟄居□□、政村も心ならされとも、力及いす薙髪して常印と稱し、永正十七年十一月、赤松政村の嫡子才松丸當年七歳なりしを播備作の國主と稱し、〇下略、十二月二十六日ノ條ニ收ム、

〇義村、浦上村宗ヲ攻メントシテ、進發シ、部將小寺則職ノ敗死ヲ聞キテ、置鹽ニ歸ルコト、十月六日ノ條ニ、村宗ニ制セラレ、足利義澄ノ子義晴ヲ奉ジテ置鹽ヲ脫シ、榛谷ニ奔リテ、衣笠五郎左衞門ニ賴ルコト、十二月二十六日ノ條ニ見ユ、

十二月大盡乙酉朔

一日、乙酉、御祝、

〔二水記〕十二月一日、乙酉、陰、參當番、〇中略入夜御盃之儀如例、

前東福寺住持守懌自悅寂ス、

〔扶桑五山記〕五山城州慧日山東福禪寺住持位次　百八十四自悅、諱守懌、自聖一八世、永正十七十二月一日寂、塔于怡雲、在不二裏、〇五岳前住籍異事ナシ、

〔扶桑五山記〕五山城州慧日山東福禪寺諸塔　怡雲軒　自悅和尚、名守懌、永正十七十二月一日、

〔五山歷代〕東福禪寺歷代住持位次　百八十四　自悅守懌、嗣奉江潮(守潮)、佛照七世、永正十七年庚辰十二月一日寂、

〔東福寺諸塔頭幷十刹諸山署傳〕

栗棘下　不二庵　明德年中建立、

歷代　南禪自悅守懌　東福百八十三(四)世、　塔怡雲、

諸塔頭廢絕之分

永正十七年十二月一日

怡雲軒開基

（栗棘）同下　怡雲軒　長享年中創建、

開基東福百八十三（四）世南禪自悅守懌

永正十七年十二月朔日寂、　岐陽（方秀）三世、嗣法春江潮、

南禪寺ニ出世ス

〔南禪住持籍〕不住　自悅和尚　諱守懌、嗣法春江潮、聖一派、永正十七年庚辰臘朔示寂、

同寺二百五十九世トノ說

〔五山歷代〕南禪寺住持位次　南禪寺（住脫カ）持籍、自二百五十七世以下、異本位次交錯、有無不同、未知孰是、今且兩存、以俟後之考訂而已、

自像贊

二百五十九　自悅守懌　永正十七年庚辰十二月朔日寂、

〔棘林志〕一　靈雲三世自悅懌禪師

師諱守懌、字自悅、嗣春江之法、住不二菴、荐膺（イ膺公命）選住東福、百八十四世、遂移南禪、其自像贊云、描得夢幻質、不寫本來顏、還我畫師筆端三昧、檻前綠水、屋後青山、永正初元甲子仲秋八日、五住慧日自悅老衲、於無價室中書、永正十七年庚辰臘月朔示化、嗣法徒、月汀守澄・彭叔守仙、又彭叔和尚贊師肖像云、眼空宇宙、名喧江湖、向上支遠傳天童、却笑岳（松源崇岳）聾巖獃（蓮庵菩巖）

守仙守懌ノ肖像ニ贊ス

倡天童道、方寸禪久承佛照、不屑簡（敬叟居簡）川禮（滅翁文禮）竅稱佛照徒、奚唯領東福巨刹、又是董南禪名區、手握三尺竹篦、朝打暮打力接緇侶、肩搭一頂碧裡、半相全相走入畫圖、咦、不肖兒孫讚其上、莫言睍父餓於菟、自牧齋主般兄者、自悅老和尚徒也、描慈像求讚詞、猥書以塞其請云、星輯壬子天文二十一載仲秋晦日、前南禪嗣法彭叔守仙拜贊、

安藝永福寺ニ住ス

〔蔭凉軒日錄〕延德三年五月六日、天快晴、午後謁相府（義材）、以葉公（葉室光忠）、條々白之、○中略一安藝國永福寺入寺守懌首座書立供台覽、有御意得云々、

公帖ノ謝禮

十日、天降雨、○中略以葉公、々帖四通御判白之、○中略守懌首座藝州永福寺御判（義材）被遊之、

十一日、不參、天快晴、○中略守懌首座藝州永福寺公帖禮謝、他西堂代之持一繦來、

十一月廿八日、不參、天快晴、早旦遣桂子（竺英有桂）於養花云、自寶鏡寺承俊嶧（東岡）西堂事伺之、然處昨日書立賜之、見之則守懌西堂也、此守懌西堂者、當年五月入寺之公帖領之、然者年期未滿也、年期中仁一級事者御停止也、可爲後々例事難義也、鹿苑院（宗山等貴）亦定不有領掌、以故彼書立返進之、以前以俊嶧伺之事、寶鏡寺江者不可有御白、予卒爾（龜泉集證）迄也、其分重而可白直云々、功叔（周全）云、其分乃可傳寶鏡寺云々、○中略自寶鏡寺以豐田、守懌西堂十刹公帖事白

四教儀抄ヲ書寫シテ侍童ニ與フ

瑞仙所抄ノ蕉了記ヲ書寫ス

光演所持ノ本ニヨリテ

處、年期未滿之由白之、然者爲如何可然哉云々、返答云、不及料揀子細也、去五月入寺、當月迄七ヶ月也、被破御法者、以之爲後例事難義也云々、不面之、

〔四教儀抄〕下　○東福寺靈雲院所藏

「(奥書)文明十八丙午□(二カ)月十日、南禪眞乘華屋嚴(宗嚴)公侍者、行年五十八講之、同小春初祖忌日講了、其明年長享改元丁未仲冬之末、息肩於丹之大日南軒下吮筆書也、數日□臘十六日雪老天將晡頃、孜々畢功矣、(慧曉)白雲七葉守懌四十四歲記賤耳之萬一、而卓童在旁、因付之、童今年十一歲、」

〔蕉了記〕一　○東福寺靈雲院所藏

「(奥書)延德二年庚戌三月十三日、怡雲軒下書之、　懌」

〔蕉了記〕二　○東福寺靈雲院所藏

「(奥書)延德二戌孟夏初二、於東白軒書了、　懌」

〔蕉了記〕三　○東福寺靈雲院所藏

「(奥書)延德二年庚戌六月廿九日、借一元(光演)演公所藏本、於東白軒下守懌謹書焉、」

書寫ス

白雲和尚法語ヲ書寫ス

金剛般若經解釋ヲ書寫ス

〔白雲和尚法語〕

「(奥書)明應二年癸丑孟夏、某乙僧住於城北聖壽、就人借此本而寫焉、烏鳶之誤多、後之覽人請正之、白雲七葉不肖比丘守懌焚香書(朱書)「不二三世自悅」　首尾十六紙、

右栗棘開山白雲(慧曉)和尚佛照禪師之夢記

正保二曆乙酉仲冬初三日　小毘丘(朱書)「不二八世梅嶺」守(梅嶺)初修補焉、

享和三年癸亥晚秋初一日　不二比丘守選、於對州以酊再新表皮、是我家法寶、末代莫忽焉、

佛照禪師夢之記法語、當時本菴無之、依之、當院自悅和尚自筆本、雖爲從來秘襲、新奉納栗棘唐櫃者也、至後代不可忽焉、

文化十年癸酉閏十一月五日　前東福現靈雲天瑞守選謹書」

〔金剛般若經解釋〕○東福寺靈雲院所藏

「(奥書)右諸文眞乘華屋和尚所集也、

明應五年丙辰六月初三日　自悅叟守懌暮齡五十三、於松月軒書了、」

金剛經心經註解ヲ書寫ス

圓覺經心鏡ヲ書寫ス

遺教經科分ヲ書寫ス

大鑑小清規ヲ書寫セシム

〔金剛經心經註解〕○東福寺靈雲院所藏

「（守懌自筆奥書）願以此善利、與法界有情、悟了般若眞空、速到涅槃彼岸、明應六年丁巳仲春廿一日、於怡雲南窻下書、守懌暮齡五十四永正二乙丑正月廿八、朱墨點了、懌六十二歲、不二東軒下書、」

〔圓覺經心鏡〕下 ○東福寺靈雲院所藏

「（守懌自筆奥書）永正三年丙寅三月廿有七日、伏値榮林智忻首座二十五年遠忌之辰、某懌、煩良友數員大手筆、而書圓覺了義經聰（智聰）師心鏡六卷、所鳩善因、奉爲忻大姉、莊嚴報地、伏願、三界迷徒、頓證圓覺本性、四生群類、俱生淸泰樂邦、前慧峯自悅守懌暮齡六十三」

〔遺教經科分〕○東福寺靈雲院所藏

「（守懌自筆奥書）守懌 六十九齡」

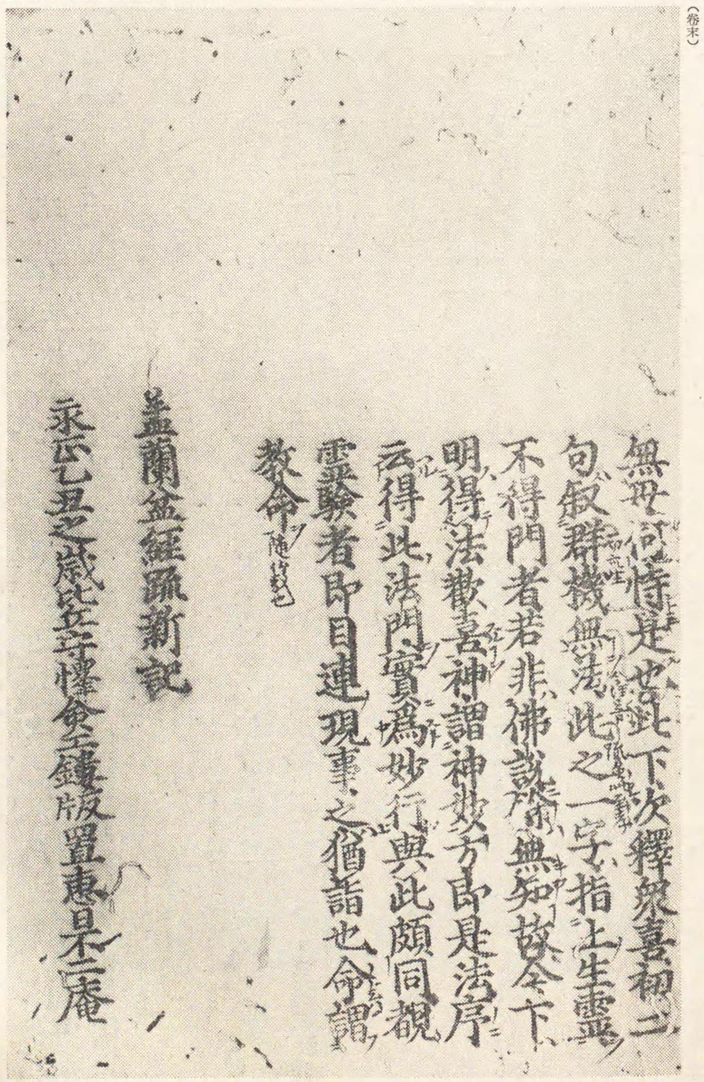
〔大鑑小淸規〕○東福寺靈雲院所藏

「（奥書）永正十三丙子三月日、借湖（信鏡）月本、命岑寫之、 懌七十三齡」

〔盂蘭盆經〕坤 ○東福寺靈雲院所藏

（卷末）

無毋何恃是也此下次釋衆喜初二句叙群機無法此之一字指上生靈不得門者若非佛說除無知故今下明得法歡喜神謂神妙方即是法序云得此法門實爲妙行與此頗同覩靈驗者即目連現事之猶詣也命謂教命隨後也



盂蘭盆經疏新記

永正乙丑之歲比丘守懌僉工鏤版置惠日不二庵

盂蘭盆經疏新記ヲ刊行ス

一本ヲ摺寫シテ不二軒ノ方秀ノ眞前ニ供養ス

新板本ヲ三條西實隆ニ贈ル

泉涌寺元等ノ請ニ依リ涅槃經ヲ講ズ

祖芳ニ日用軌範ヲ講ズ

（刊記）「永正乙丑之歲、比丘守懌、命工鏤版、置惠日不二庵、」

（守懌自筆奥書）「此經古版、疏記科別出而三卷、致說聽之煩也、吾不二岐翁（方秀）、科其上、疏次置於記文、合爲一冊、然不板行者殆百年、今已板成矣、仍印摺一部、以奉岐陽和尙眞前、所鳩殊勛、奉爲眞慈、增崇品位、次冀、法界群生、同圓種智、

永正二年龍舍乙丑林鐘十有九日　五住慧峯法孫比丘守懌焚香謹書（印文「守懌」）（印文「自悅」）

〔實隆公記〕永正七年七月三日、丁巳、天晴、○中略東福寺不二軒有使僧、孟蘭盆經科新板本、相副點本被送之、爲悅々々、

〔自悅和尙涅槃經講助〕○東福寺靈雲院所藏

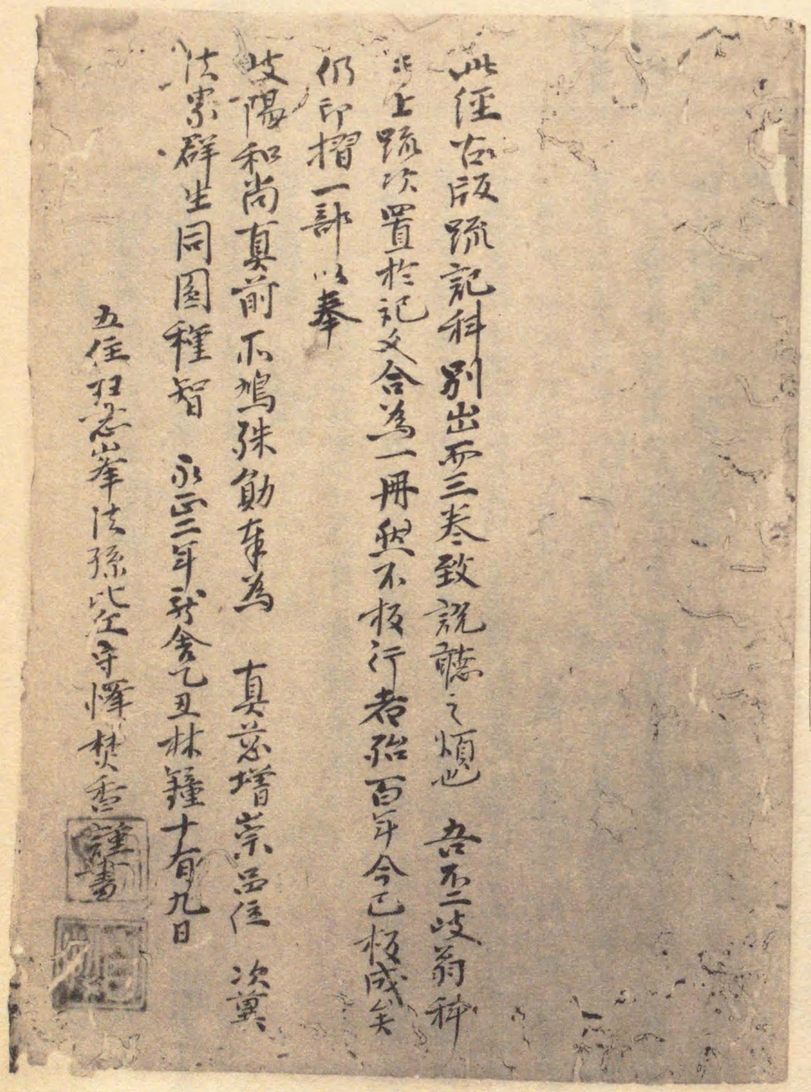
（見返）「永正九壬申七月初一、對泉涌元等律師講之、　懌六十九齡」

（奥書）「永正九壬申七月十一日、依泉涌元等律師發起、撮其大槩、三番講了矣、　伏願以斯熏力、早證佛身之眞常、成就四德、遂使法輪再轉圓滿三周、

不二境界小比丘守懌暮齡六十有九」

〔日用軌範鈔〕○東福寺靈雲院所藏

（見返）「自悅和尙七十一齡、永正十一甲戌孟夏日、對祖芳講說、祖芳字一桂、住東福、芳嗣蟠



守懌自悅筆孟蘭盆經奥書　京都市　東福寺靈雲院所藏

原寸　縦〇〇・二七八米　横〇〇・一六〇

根心菴宗悟、々嗣丹波蟠根開山曇翁源仙、々嗣、丹後青蓮寺開山谷翁道空、々嗣佛照禪師、」

〔猶如昨夢〕　中　跋碧岩集私鈔

不二自悦老漢、爲東山春和閤(啓迪)公西堂、講說碧岩集者、首尾五十八會、夫終乎永正十二乙亥仲冬二十又三日也、予(守仙)亦辱侍其席尾、畢一百則之講、寧夫匪小緣也哉、雖然弗敢嘿令一言半句、矧亦一百則乎、沒交涉々々々々、老漢、當散筵之日、謂予曰、他日汝爲人講之、則碧岩重碧、予聞其命而泚其顙、寔老漢之婆心也、後永正十八辛巳秋八月吉辰、改予聞塵之次、謄老漢之秘鈔而合以爲十帙矣、老漢之遺恩、山也不高、海也不深、何以酧之、予熟誑、以老漢慈訓、爲人亂道、其唯定中点頭乎、攢眉乎、於是如何領會、喝、

大永二壬午仲冬廿六之五更、書于善惠境界、

〔烏藍婆拏〕」　○東福寺靈雲院所藏

「永正十三丙子七月旦始講焉、」(乾巻頭)

「孟蘭盆經上卷終、于時永正十三丙子七月十二、於善惠室中書了、　仙也廿七歲、」(乾奥書)(守仙)

「孟蘭盆經下卷、七月八日第五講、」(坤巻頭)

永正十七年十二月一日

啓闓ノ爲ニ碧巖集ヲ講ズ　守仙モ講席ニ侍ス

孟蘭盆經ヲ講ズ

守仙ノ請ニ依ル

守仙奥書

永正十七年十二月一日

「吾佛爲目犍連立此教法、大哉其貺、今雖濁末後五百歳、猶沐于甘露淨法矣、丁此夏末、彭叔仙(守仙)公謂余曰、請圭山疏灵芝記(智照)所釋之盆經、究而精微也、爲講一遍、余許之、前後八講會了、後二三日、仙袖一巨編而來、披而誦之、上余口談於紙、爲兩卷焉、其意句也、其義理也、如綿々密々而分緒也、近代好學者、或挾孔孟一世仁道、或綴四六文章而傍他門戸、吁、不知棄本走末也、若得些子活處、心若洒々落々、則一任吟月嘯風、是豈分外哉、仙子々々、宜也、於佛之眞詮傾其丹誠、萬人中之一人也、不見道、壯士一彈指、六十五刹那、誰不勉哉乎、

永正丙子(十三年)仲秋初三日

不二道人自悅守懌七十三載(花押)」

「不二自悅老師大和尙、自今玆龝七月朔至同二十日、爲予辱講演盆經者八會也、予(守仙)、叨鈔纂經疏記之三、纔爲一百十二紙、或以梵語、或以漢語、或以榑桑假名、只恐錯師之講意、後一日、袖之入室、而奉供師之笑覽、則爲削字改義、留之六七日、于玆遂跋其後卷、以還予、何以擬師之法恩耶、寔山不在高、水不在深者乎、庶兇上契佛種、下化群品、雖然到吾齴齵師之一宗、呼之爲敲門瓦、不亦宜也哉、

姉小路濟繼第法華經頓寫ノ人數ニ加ハル

始メテ三條西實隆第ヲ訪フ

圓覺經和點ヲ贈ル

實隆ノ子桂陽不二軒ニ

永子十又三秋端午日

松山瓢闇道人仙也廿七稔(花押)」(印文「彭叔」)

〔實隆公記〕永正七年四月廿三日、戊申、宿雨晴、早朝相公向姉小路(三條西公條)(清繼)、法花頓寫、僧衆廿人、東福寺懌東堂不二軒、聖壽寺春西堂(東林維春)以下云々、○中略不二長老有頌、卽席少々和之、仍相公和之云々、

五月廿八日、癸未、天晴、○中略東福寺不二軒懌長老始而來臨、杉原十帖・拔入數珠一連被携之、歡西堂(大有德歡)同道、近日自勢州上洛云々、黃鸝被携之、各勸一盞、淸談、一昨日聯句合點事、申不二老禪了、

六月八日、壬辰、天晴、○中略遣使者於東福寺不二軒、謝先日之來臨、杉原十帖・硯一面(桂悟)了庵和尙所被惠也、遣之、

九日、癸巳、天晴、入夜風吹、○中略不二禪師聯句點到來、

八月廿四日、戊申、晴、○中略自不二軒有使者、圓覺經和點被送之、自愛々々、

十月廿六日、己酉、晴、不二軒柳一荷兩種被携之、陳外郎(祖田)小樽同携之、則賞翫、喝食(鳳崗桂陽)對面、聯句十句有興、以外沈醉也、

十一月二日、甲寅、天晴、桂陽喝食生年十七歳、今朝於不二軒落髮、則巡堂、立侍者、於不二軒

永正十七年十二月一日

於テ得度ス

實隆ニ梵網經訓點本ヲ贈ル

實隆守懌ノ腫物ヲ見舞フ

守懌書狀

有齋、

四日、丙辰、霽、〇中略杉原十帖・香合一唐、百五十疋計物、相阿時代、遣不二軒、相副消息、謝陽侍者得度、自愛之由了、

八年七月卅日、戊寅、天晴、秋暑甚、〇中略不二和尚來臨、梵網經訓點本被惠之、自愛秘藏此事也、

九年二月十九日、乙未、天晴、有和暖之氣、〇中略遣使者於遣(衍カ)東福寺不二軒、腫物出來云々、訪之者也、

〔實隆公記〕〇永正七年十一月四日裏文書

一昨詣閤下、對顏延刻、剩野吟汙却高聽候、恐懼之至、万々爲難盡歟、尊(桂陽)丈歸院、涓取吉辰、就大僧之列、叢社光輝、家門彌御繁榮、瞻之仰之、至祝至禱、戒師之事、門中老宿星列、不可及愚老、必書雲以後、以參拜可伸心緒候者也、恐惶頓首、

小春廿八日(永正十七年)　守懌(花押)

拜答

聽雪相公台閣下(三條西實隆)

〔慧日山宗派圖〕乾栗棘門派　虛室派下

法系

守仙守懌ノ寂後ソノ塔ヲ拜シテ法ヲ嗣グ

守仙吉甫ト共ニ幼時ヨリ守懌ニ侍ス

祖印幼時ヨリ守懌ニ侍ス

安國春江守潮(△靈雲)

東福自悅守懌(△怡雲祖)

萬壽月汀守澄(△靈雲)

東福彭叔守仙(△善惠祖)

〔猶如昨夢〕下書簡　又呈太虛翁(絳廓)　大永三癸未正月十八、

予(守仙)、遠稟繼嗣于龜嶺(天龍寺)之枝流、久隷名字乎惠嶠(東福寺)之桂籍、是故、山中大老、門內高兄、胥議曰、吾山開闢以降、弗許他派之居、繇是、舊冬(大永二年)十二月、拜自悅師之塔、酬少日之恩乳、盖公之平日所箴砭、在茲矣、聞之其首肯乎、〇上下略

〔猶如昨夢〕中跋　書唐賢宗法詩集後

予(守仙)、與首座(吉甫)自幼侍自悅老漢巾瓶、如兄如弟、〇上下略

〔猶如昨夢〕下銘　祖印號銘　幷引　辛亥(天文二十年)仲冬、

丹陽之桃葉庵者、吾栗棘之附庸也、主宰曰祖印彭公首座、々々自僧童侍于自悅老漢側有年矣、平日嗜囊螢案雪、不唯研精經史子集而已、粗覃思禪教也、〇下略

華溪號銘

大江氏毛利備中大守隆元公、乃藝陽吉田庄之貴族也、〇中略頃者介人曰、祖父弘元、就汝(慧徹)

永正十七年十二月一日　三〇五

毛利興元守澤ノ室ニ入ル

永正十七年十二月一日

南師、需諱与字、卽諱而曰悅叟、伯父興元、直入自悅老骨樾笏室、拜求常松秀岳之四字、今和尙爲我請賜戒名華稱、予以故弗克固辭、常榮厥名、花溪厥號、榮云花云、所規祝惟深矣、遂作花溪銘、以係二大字下云、○下略

畫像自賛

【守澤自賛畫像】○東福寺靈雲院所藏

（變）描得夢幻質、不寫本來顏、還我畫師筆端三昧、檻前綠水、屋後青山、

永正初元甲子仲秋八日　五住慧峯自悅老衲於無價室中書　印（印文「守澤」）

守仙作畫像賛

【守仙賛守澤畫像】○東福寺靈雲院所藏

（曾）眼空宇宙、名喧江湖、向上支遠傳天童、却笑岳霽嚴獃倡天童道、方寸禪久承佛照、不屑簡川禮簽稱佛照徒、奚唯領東福巨刹、又是董南禪名區、手握三尺竹篦、朝打暮打力接緇侶、肩搭一頂碧裡、半相全相走入畫圖、咦、不肖兒孫讚其上、莫言睨父餓於菟、

自牧齋主般兒者　自悅老和尙徒也、描慈像求讚詞、猥書以塞其請云、

星輯壬子次文二十一載仲穐晦日　前南禪嗣法彭叔守仙拜讚（印文「彭叔」）

同十七回忌追悼偈

【銕酸餡】下　○銕酸餡所收自悅和尙眞讚異事ナシ、

丁自悅老漢一十七回之諱辰、三聖（茂彦禪叟）堂上大禪師、辱賜追悼之偈一章、於此山中耆宿、各見押嚴韵、予（守仙）亦貪奉效其顰云、伏需慈削、

前南禪嗣法彭叔守仙拜讚

○銕酸餡所收自悦和尚像讚異事ナシ、

同十七回忌追悼偈

〔銕酸餡〕下 丁自悦老漢一十七回之諱辰、三聖堂上大禪師、（茂彥善叢）辱賜追悼之偈一章、於此山中耆宿、各見押嚴韵、予亦（守仙）忝奉效其顰云、伏需慈削、

守擇自悦畫像 京都市東福寺靈雲院所藏

原寸 縦横 〇〇・・三八七〇米

守澄ノタメニ代作ス

守龍ノタメニ代作ス

同二十五回忌追悼偈

忌景遭逢天已晴、星霜十七太忙生、野僧欲續老師偈、句々邯鄲學歩行、

同　代月汀徵藏主（守澄）（澄カ）

天爲高賓無好晴、虛空椀裡雪花生、朝來忽拂淇門路、擁篲殘僧猶却行、

同　代龍藏主（守龍）

靄然慈像月方晴、五逆兒孫太俗生、寶偈咸言詩達磨、如來行處不曾行、

去歲甲辰臘（天文十三年）之初旦、乃自悅老漢五々白之諱辰也、予（守仙）與賀陽月汀首座胥謀、就于惠嶠善惠之小軒、營辨一齋、供養山中耆宿、於此能之虎伯老緇、繫阿堵物半千於雁足、助小會之化儀矣、時人咸謂、連理枝之三迦葉、在洛賀能而各下一轉語、以成巴陵（顯鑒）三轉語者也、加之、虎伯預擇閏之仲冬朔、招闔城苾蒭衆、開蒲塞會、寔報舐犢之深恩乎、可褒矣、大寧堂上梅湖（桂林）和尙、賦寶偈一絕、見呈眞前、數日之後、有虎伯小簡、記其偈乎簡尾、堅需拙和、予自初春逮初夏、不免董當山（東福寺）、已到第八住、々持支繁、因循不裁和章者、六七月于玆矣、愧赧々々、頃者大寧膝上文度補岩丈人、歸洛而剃髮得度、又有能之行、卒攀高韵、付之補丈、遂投虎伯机右、兼奉具大寧笑覽云、偈曰、

君在北方吾在南、忌辰轉語各書三、再來更有法供養、臘月蓮花權實談、

永正十七年十二月一日

永正十七年十二月一日

○守懌、安藝永福寺住持トナルコト、延徳三年四月十日ノ條ニ、東福寺住持トナルコト、明應八年八月十八日ノ條ニ、三條西實隆ノ子桂陽ノ得度ニ、ソノ戒師ヲ勤ムルコト、永正七年九月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕 釋家之部 守懌

〔印章彙纂〕 釋家之部 守懌

○實隆公記永正七年十一月四日裏文書

小春廿八日書狀

高國兵糧料所トシテ被官ニ充行フ

二日、丙戌、攝津守護細川高國、主殿頭壬生于恆知行ノ禁裏御料所同國能勢郡採銅所内西鄉諸侍ヲシテ、同鄉金山本所分・長谷分ヲ、于恆ニ去渡サシム、

〔壬生于恆記〕 ○宮内廳書陵部所藏 十一月六日、庚申、晴、自攝州採銅所、濱崎惣右衞門幷又二郎季緣等歸、代官野間石見入道相逢云、去年依一亂、○細川澄元、部將三好之長ト共ニ攝津ニ到リ、河原林正頼ヲ越水城ニ攻ムルコト、十六年十一月二十一日ノ條ニ見ユ、爲且兵粮米、自細川(高國)右京兆、賜能勢十郎・野間兵庫(ママ)三人之條、右京兆下知取給者、相觸百姓等、如形成共可進納、下知之儀當年不被相付者、於後年一粒不可參云々、京兆下知案文調送、同返事等有之、又内儀云、金山分四分一者、彼給人給

○東福寺靈雲院所藏(山城)
盂蘭盆經坤奥書

之、一分者、野間被官人宛行之、相殘二分者、石見堅納所無紛云々、言語道斷次第也、可加連々思案者歟、

〔當局所領攝津國能勢郡採銅所之事〕（宮内廳書陵部所藏）

庄林木工助申知行攝州能勢郡西鄉金山本所分・長谷分事、度々雖被成御下知、于今不去渡云々、以外次第也、所詮爲御料所、於御代官職者、被仰付藤澤越前守、爲催促被差下御中間上者、早可被渡付、若令難澁者、一段可被加御成敗之由候也、仍執達如件、

永正十七　十二月二日　（飯尾）秀兼在判

西鄉諸侍中

西鄉諸侍ノ違亂ヲ停ム

○高國、攝津守護代藥師寺與一ヲシテ、採銅所ノ百姓等ノ未進年貢ヲ督促セシムルコト、大永元年二月二十六日ノ條ニ見ユ、

三日、丁亥、山城正傳寺、德政ノコトニ就キ、勅命ニ違背スルニ依リ、勅願寺號ヲ停メラル、是日、同寺ノ懇願ニ依リ、之ヲ赦ス、

〔正傳寺文書〕一（山城）

當寺事、今度就德政之儀、○德政ノコト、一月十二日ノ條ニ見ユ、御下知旨違背之間、雖被削勅願寺號、速可應綸命之由、懇望申之上者、如元可爲勅願寺、早致寺家再興、可抽懇祈之精誠之由、被仰下候也、仍執達如件、

（永正十七年）十二月三日　（萬里小路秀房）左中辨（花押）

正傳寺前住菊畹上人御房

前住菊畹

五日、己丑、信濃諏訪社、御渡ノコトヲ、幕府ニ注進ス、

〔上諏訪神社文書〕二（信濃）

當大明神重御渡之事、今月朔日寅剋、當社濱栗林大溝渡下御候、下宮澤内渡上御候、佐久新海明神、自江渡下御、於湖中御參會候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

永正十七年拾二月五日　大祝賴滿（諏訪）

進上　御奉行所

重ネテノ御渡佐久新海明神御渡

六日、庚寅、御煤拂、

〔二水記〕十二月六日、禁裏御煤拂云々、

○諸家煤拂ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔實隆公記〕十二月六日、拂煤、

永正十七年十二月五日　六日

三條西實隆

近衞尙通第
高倉範久第

永正十七年十二月六日

〔後法成寺尙通公記〕十二月十五日、己亥、雨雪下、從午刻晴、煤拂也、

〔二水記〕十二月十八日、〇中略高倉亭（範久）今日拂煤、予亭（鷲尾隆康）不拂、

豐前守護大內義興、同國門司八幡宮大宮司大神氏友ヲシテ、同宮領竝ニ四所大明神免田畠等ヲ安堵セシム、

〔甲宗八幡宮神社文書〕〇周防

補任　門司八幡宮太宮司太神氏友

豐前國門司關當社領幷四所大明神免田畠坪付在別帋之、等事

右件社領事、帶證文當知行之由、任申請之旨、所加裁許也、者早守先例、云社家、云社領、領掌不可有相違之狀如件、

永正十七年十二月六日　左京大夫（大內義興）（花押）

神田坪付

規矩郡門司八幡宮御神役免田坪付注文

合

一大積鄕壹町　每月朔日御供田、

一吉志鄕壹町二段　正月十五日中八月十五日之間御供田、

一柳鄕九段卅代　二八月彼岸御供田、

一同鄕壹町　御子職掌給田、

一楠原鄕五段　三節供田、

一伊河鄕壹段　燈油田、伊河方寄進之、

以上四町七段卅代

右當社當知行之地如件、

十一月廿三日　大宮司　氏友（花押）

飯田大炊助殿（興秀）

奉行ノ證判

「此前任長錄（祿）三年八月帳面、當知行云々、彌不可有執務相違之由候也、

永正十七年十二月六日　興秀（飯田）（花押）

興豐（冷泉）（花押）」

四十五歲法名

對馬守護讃岐守宗義盛卒ス、姪盛長嗣グ、

〔宗氏家譜〕永正十七年、庚辰、義盛（宗）讓封於姪盛長而逝、享年四十五、法名宗喜、道

永正十七年十二月六日

號悅翁、號龍源院、

文明八年誕生

義盛、乙丑(永正二年)襲封、至庚辰(永正十七年)十六年、

初名盛順

【對州編年略】申同(文明)八年、丙申、今年義盛君誕生、小字彦七、

同(永正)二年乙丑、宗讃岐守盛順君續家督、爲地頭、後改義盛君、

宗閙ヲ遣シ義尹ノ偏諱ヲ請フ

同六年、己巳、盛順君以龍源院住持宗閙・天受寺住持(宗孝)爲使僧令上洛、被請將軍(義尹)賜諱字、

兵道論ヲ捧呈ス

七月二十一日、出帆對州、十月七日、入洛、十二月十日、謁柳營公、啓盛順言云々、又宗出羽守貞秀所獻捧兵道論、此書先是貞秀所求得於朝鮮也、

義盛ト改名宗氏ノ屋形號及ビ義字ノ始

同七年、庚午、正月二十一日、柳營義尹公、賜源姓幷諱字及屋形號于盛順君、宗閙等受御敎書而二月十六日出洛、四月歸州、令御敎書捧盛順君、於是被改名義盛君、宗家諱被用義字始此、又對馬屋形號始此時、義盛君時年二十五云々、先是應永年中、雖賜屋形號于宗家、筑前州儀而非對州儀、故不載此書、

朝鮮對馬ノ歲遣船ヲ接待セズ義盛盛弘ヲシテ朝鮮ヲ侵サシム

同年春、大內氏遣約條外之使船於朝鮮、準擬于國王(クワクテン)殿使、無宗氏之文引、故彼國責之、大內使者告之曰、大內君便鎭西都督、而對州其管下也、然間受對州之文引、可差渡使者無謂、於是彼國不得已而接待之了、其後當州被遣歲船之處、朝鮮不接待之、屋形(義盛君)甚怒之、使從伯父宗能登守盛弘主侵朝鮮、此時所從兵、先宗薩摩・同式部・同織部・同彦右衞門・同伊豆・同與三兵衞・同大膳・糸瀨播磨・古藤源左衞門・野瀨藤兵衞・網代彦右衞門・嶋屋隱岐・阿比留藤七・俵佐渡・森戶勘解由・饗場平內・柚谷伊豆・津原右衞門・立石彌右衞門・中村十郎・長田孫右衞門・久和浦吉藏・大浦圖書・清水與六・臼祇伊豫・梅軒內膳・串崎小右衞門・烏井彌五郎・古川近九郎・薦野新兵衞・小田兵庫・佐護甚左衞門・平田彦右衞門・赤木惣左衞門・內山清右衞門・佐々木平七郎・樋口藤藏・廣田源六・藤兵內・岩崎甚七左衞門・川野甚兵衞・畑嶋式部・三牧野浦權四郎・中里左衞門・佐伯與兵衞、卒右輩、四月四日到朝鮮、在三浦者共相加、都合其勢三百人、陷薺浦・熊川城、斬其將之間、朝鮮國大軍蜂起、盛弘主知敵强不可勝之、與士卒約死、以糸瀨壹岐歸州、被告此由、同十九日盛弘主於熊川有必死軍、終被墜命、俗云源四郎嶋合戰是也、從兵悉戰死、朝鮮士卒死者數萬人云々、

盛弘戰死ス

同年六月朔日、祠盛弘主靈於(對州)高崎濱、號高崎大明神、

高崎大明神

此濱、以之爲神體云々、

義盛義尹ニ諛シ偏諱等

同八年、辛未、屋形上洛、令謝源姓・義字・屋形號之恩賜、大樹義尹公、於北近江賜八

ノ恩賜ヲ謝ス
江北ニ采地ヲ賜フ
義尹ニ從ヒ船岡山ニ戰フ
對馬ニ歸ル
家督ヲ盛長ニ讓ル
世系
筑前ヲ攻メ大内氏ノ爲メニ破ラル

千貫采地、使居京都、服事將軍家、

同年八月、細川政賢欲攻大樹公、同十六日、大樹公與管領大内介義興同發京都到丹波、屋形從之、同二十三日、以義盛君幷毛利元〔興元、下同ジ〕就被爲先鋒、翌日與政賢於舟岡山合戰、義盛君幷元就攻之、折兵甚多、政賢爲義興見破而死了、此時屋形猶子宗佐渡守盛長君留守對馬、盛長宗右馬四郎盛家子、初名彥二郎、

同九年、壬申、盛長君遣使於朝鮮、與彼國通交、被令約歲遣二十五船云々、時年十一、

同十五年、戊寅、大樹公武威大衰、於是北近江地不供租稅之間、屋形去京都歸對馬、

同十七年、庚辰、宗佐渡守盛長君、續家督爲屋形、

同年義盛君逝、奉稱龍源院殿、壽四十五、○藩翰譜異事ナシ、

〔系圖纂要〕四十六 平氏一 宗

材盛 本盛貞、彥七、刑部少輔、

義盛 本盛順、彥七、讚岐守、永正三年嗣、與武藤政資家臣宗顯茂俱攻筑前國、爲大内義興被敗、政資等悉討死、永正七年正ノ廿一、義尹公授義字及源姓、同年四ノ四、賜屋形號、同八年予〔預〕食邑八千貫文地、同十七年老、龍源院悅翁宗喜、

盛長 實臣宗右馬四郎盛家男、彥二郎、佐渡守、永正七年爲嗣、十七年嗣、

〔諸家系圖纂〕十三之二 宗

材盛 刑部少輔、法名宗高、

義盛 讚岐守、義盛奉書于將軍源義尹、以龍源院主宗闇侍者・天受寺主宗孝爲使僧、永正六年七月廿一日、辛亥、對州出船、同十月七日、乙丑、京着、同十二月十日、丁酉、謁義尹、同七年庚午正月廿一日、戊寅、賜義字、宗闇傳之、同二月十六日、壬寅、下向、同四月四日、己丑、歸國、義盛拜受御教書、對馬屋形號自此時始、時義盛年三十五、法名宗喜、號悅翁、號龍源院、

盛弘 能登守、永正七年、奉義盛命率兵攻朝鮮、四月四日渡海、攻落唐位山城、不日又攻破江具度儀城、其後進到熊川城下相戰、朝鮮兵多集如雲圍盛弘、盛弘兵大半討死、盛弘亦戰死、年三十一、其精魂猶生、同年六月朔、乙酉、其靈現於對州豐崎鄉高崎之濱云、里民經營一社、號高崎大明神、其宮至今在焉、

盛長 彥次郎、法名宗敲、道號月浦、號東泉寺、○寬永諸家系圖傳異事ナシ、

〔寬政重修諸家譜〕五百一 宗

材盛 初盛貞、彥七、刑部少輔、

義盛 初盛順、彥七、讚岐守、

永正二年封を襲、三年、武藤政資家臣宗顯茂とゝもに、肥前國を攻、大内義興か爲に破られ、政資をはしめこと〳〵く戰死し、武藤氏の嗣こゝにをいて斷絕す、七年正月、惠林院義尹後義稙より、諱字をあたへられ、源氏の姓及ひ屋形號をゆるさる、是先に僧龍源院宗闇・天受寺宗孝等をして、請申せしによりてなり、是年の春、大内

准國王使をたてゝ朝鮮につかはす、時に宗家の文引なし、彼國これを難す、すなはちいふ、大内は鎮西の都督、また何そかならすしも引を對馬に受んと、朝鮮王やむことをえすしてしたかふ、義盛歳毎の使をつかはすに及ひ、かへりてこれを拒みていれす、義盛大に怒り、家臣宗能登盛弘をして、朝鮮を討しむ、宗薩摩某等數十人、雜兵合せ三百人これにしたかふ、四月四日（或三月二十三日）、朝鮮に渡海し、さきにわか國より三浦（熊川の乃而浦・東萊の釜山浦・蔚山の鹽浦、これを三浦といふ、）につかはしをきしもの共とゝもに、薺浦・熊川等の鎮を討、僉使李友曾を殺す、こゝにをいて彼國防禦使柳聃年・黄衡をつかはしてこれを禦かしむ、盛弘敵すへからさるを知りて、糸瀬播磨某に二十三人を附して國にかへらしめ、この事を告、十九日、盛弘進みて聃年等と熊川に戰ひ、從兵とゝもに討死す、（盛弘討死年三十一、是年六月對馬の國民これを豐崎に祀りて、高崎大明神と崇む、寛永系圖に○中略、諸家系圖纂ニ同ジキニヨリ略ス、）のち法住院義澄近江國にあり、紀トを使として對馬國に來らしめ、味方に屬すへきの命をつたへしむ、義盛したかはす、八年、上洛し惠林院義尹に謁し、去年の賜を謝す、義尹、義盛をとゝめて京師にをらしめ、八千貫文の地をたまふ、八月、義尹、大内義興と共に細川政賢か亂を避、丹波國にあり、二十三日、ふたゝひ入洛し、二十四日、政賢と舟岡山にたゝかふ、義

足利義澄ノ召ニ應ゼズ

盛、毛利元就とゝもに先鋒となり、矢石を冒して政賢を攻、政賢終に敗死す、九年、かりに世を男盛長に讓り　朝鮮とふたゝひ和解せしむ、これ先年彼國と矛楯の事ありしによつてなり、このゝち毎歳つかはすところの船數二十五艘を減し、特送の船もまた停む、十五年、義盛京師より封國に歸る、十七年、致仕し、十二月六日卒す、年四十五、悦翁宗喜龍源院と號す、

（盛長　彦次郎、佐渡守、實は家臣宗右馬四郎盛家か男、）

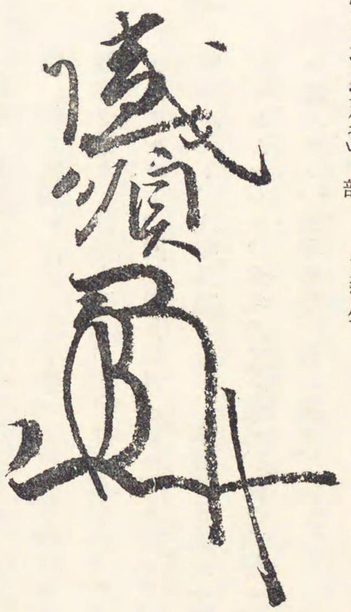
○義盛、家ヲ嗣グコト、二年是冬ノ條ニ、對馬ノ邊民、朝鮮ヲ侵スニ依リ、國王李懌、使ヲ盛順ニ遣シ、之ヲ禁ゼンコトヲ請フコト、六年是歳ノ條ニ、盛順、義尹ノ偏諱ヲ受ケ、義盛ト改名スルコト、七年正月二十一日ノ條ニ、朝鮮三浦ノ在留邦人ヲ援クルコト、同年四月四日ノ條ニ、上洛シテ、義尹ニ謁シ、偏諱ヲ授ケラレシヲ謝スルコト、八年是歳ノ條ニ、家督ヲ子盛長ニ讓ルト稱シ、盛長ヲシテ、朝鮮ニ陳謝セシムルコト、九年是歳ノ條ニ、使ヲ朝鮮ニ遣スコト、十三年是歳ノ條ニ、土宜ヲ遣ルコト、本年是歳ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

永正十七年十二月六日

永正十七年十二月八日

〔花押彙纂〕ソ之部　宗義盛



○津原前氏所藏文書（對馬）
永正六年八月十一日名字狀

花押

八日、壬辰、臘八御祝、

〔二水記〕十二月八日、臘八之御盃如常、溫臟（糟）於御末令食了、巳刻許退出了、

溫糟粥

豐前守護大內義興、同國寺社帳ヲ檢覽シ、守護代飯田興秀ヲシテ、寺家竝ニ寺領ノコトヲ、舊例ニ依リ處理セシム、

〔平野文書〕○豐前

豐前國內寺社ノ紊亂

豐前國中寺社事、近年猥候、今度就御尋、寺社帳被備上覽之候、尤相叶御氣色候、所詮云寺家、云寺領、以舊例之旨尋究、可被申次之由候、恐々謹言、

永正十七
十二月八日

飯田大炊助殿（興秀）

神代但馬守　武総
○此ノ處裏ニ、飯田興秀ノ花押アリ、
冷泉民部少輔　興豐

田樂

九日、癸巳、廷臣等、酒饌ヲ獻ズ、

〔二水記〕十二月九日、晩頭參內、御田樂事也、各申沙汰如例年、沈醉、又如例及歌舞、半夜令退出了、

御返禮貞敦親王等御參

廿六日、薄暮參內、於御三間有御酒宴、田樂事御返報云々、中書王（貞敦親王）・竹內殿（曼殊院慈運）等令候給、中御門大納言（宣秀）參、女中無出座、御陪膳帥卿（三條西公條）、御手長右少辨尹豐（勸修寺）也、數獻、及歌舞、各沈酩、無術々々、

大乘院經尋少僧都ヲ申請ス

十二日、丙申、興福寺維摩會、

〔實隆公記〕十二月六日、○中略大乘院（經尋）、少僧都事被申之、今日伺申之、勅許、維摩會自來十二日從所役、十七日日付宣下所望云々、申傍頭、口宣案到來、

勅使葉室賴繼應永廿五年分

〔三會定一記〕四　勅使南曹辨賴繼（葉室）　永正十七年庚辰　應永廿五年分　十二月十二日始行、講師權少僧都孝緣（東門院）　四十才　興、法、

講師東門院孝緣

研學　慶家、貞雅、　寺分　空實、西大寺、尊俊、法隆寺加任、　東大　俸賢、三、公意、三、

（朱書）「權大納言守光（廣橋）公息、實伊勢守平貞親子、」

永正十七年十二月九日　十二日

探題別當兼繼

經尋第五夜竪問勤仕

探題　專寺　別當僧正兼繼
　　他寺　堯禪房權大僧都宗宣

宣聽　宗玄　清宣　隆清　重專　宗壞

會參　政所　權政所　圓深不參、　權大僧都宗宣

少僧都經　尋　第五夜竪問御勤仕、第六日御昇進、令移一床給、

法隆寺權律師是圓　會始、

〔行脫〕會事　威儀師宣舜、從儀師寬乘、　注記　〻〻〻英舜、

一東精　英憲擬講、第二夜寺分加任、三ヶ夜勤仕、春藝〻〻初夜勤仕之、

十三日、丁酉、正四位下油小路隆繼ヲ從三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十六　非參議從三位藤隆繼（油小路）、七十二才、十二月十三日敍、元左中將去之、不經藏人頭、故從二位行權大納言隆夏卿（油小路）猶子、實故參議房任卿（西川）男、

豐前守護大內義興、同國吉田八幡宮大宮司氏貞ヲシテ、同宮領竝ニ龍王宮免田等ヲ安堵セシム、

〔平野文書〕○豐前

補任　吉田八幡宮太宮司源氏貞

曆應三年ノ裁許ニ依リ當知行

八幡宮龍王宮氏社等免田坪付

豐前國規矩郡吉田保當社領幷龍王宮免田等事

右件社領事、以去曆應三年十月裁許、○大內弘幸、龍王宮・八幡宮及ビ氏社等ヲシテ、神田ヲ安堵セシムルコト、曆應三年十月是月ノ條ニ見ユ、當知行之由、任申請之旨、云社家、云社領、々掌不可有相違之狀如件、

永正十七年十二月十三日　左京大夫（大內義興）（花押）

規矩郡吉田保八幡宮□龍王・氏社免田坪付注文

合

壹町八段內、四段廿代不知行也、一反十四代定不也、　吉田保

右當社當知行之地如件、

十二月四日　大宮司氏貞（異筆）「左馬大夫」

飯田大炊助殿（興秀）

（裏書）「此前當知行、長錄（錄）三年八月帳面○所見ナシ、無相違之、不知行之地事、追而可被尋究之由候也、

永正十七年十二月十三日　興秀（飯田）（花押）

興正寺殿

篠原長政

十八日、壬寅、阿波三好千熊丸、長慶、同國安樂寺某ヲシテ還住セシメ、又同寺領ノ諸公事ヲ免除ス、

〔阿波國社寺文書〕 坤

從興正寺殿被仰子細候、然上者早々還住候て、如前可有堪忍候、諸公事等之儀、指置申候、若違亂申方候ハヽ則可有注進候ハヽ加成敗旨、（脱アルカ）恐々謹言、

永正十七
十二月十八日
三好
千熊丸
（長慶）
郡里
安樂寺

彼興正寺殿ヨリ被仰子細、從千熊殿、以折紙被仰候、早々還任（住）候ハヽ、如先々御堪忍可然候、諸課役等之事、閣被申候、萬一無謂子細申方候ハヽ、則承可申届候、於今度山科ニ御懇之儀共、不及是非候、堅申合、今日急度御歸寺肝要候、恐々謹言、

永正十七
十二月十八日
篠原大和守
長政
郡里
安樂寺

興豊（冷泉）（花押）」

長橋局ニ行幸

伏見宮邦輔親王鷲尾隆康第ニ御方違

御服要脚ノ進獻ヲ幕府ニ命ゼラル

十九日、癸卯、節分ニ依リ、御方違行幸アリ、

〔二水記〕 十二月十九日、當番、晩頭參候、今夜節分也、仍有別殿行幸、長橋局也、當年依亂逆兎角不及申沙汰、今夜之次一獻被申入了、微音美聲有之、將亦、爲御方違、伏見殿宮（邦輔親王）御方密々渡御愚亭（鷲尾隆康）、過分至也、表祝言一盞申入了、愚息爲節分之間今日來了、（隆尚カ）

○伏見宮邦輔親王、鷲尾隆康第ニ御方違ノコト、便宜合敍ス、

細川高國、松尾社領攝津山本莊代官職ヲ請負フニ依リ、同莊名主百姓等ヲシテ、上使ノ下向迄、年貢諸公事物等ヲ拘ヘ置カシム、

〔松尾神社文書〕 四 松尾社祝東家文書
○山城

松尾社領攝州下郡山本庄代官職事、爲御屋形（細川高國）樣被仰請之訖、然年貢諸公事物等可拘置之、近日可被差下上使旨、被仰出候也、仍狀如件、

永正十七
十二月十九日
秀兼（花押）（飯尾）

當所名主百姓中

二十日、甲辰、幕府、御服要脚ヲ進獻ス、

〔守光公記〕 ○東洋文庫所藏 十二月三日、丁亥、御服之事、今日遣此文、令申近江處（飯尾貞運）、則令披露、

節會用脚ニ流用ノ議

可申入云々、

としもくれ候よと、うつゝなくおほえさせをいしましてこそ候へ、さていよ〳〵御ふくようきやくの事、とし〳〵のことくまいり候やうに、御心え候て、いまより申され候いゝ、めてたくおほえさせをいしまし候へく候、□御れう所とも心うつくしくまいり候いて、御をしはかり候へく候、かしく、

ひろいし（守光）とのへ

十二日、丙申、晴、〇中略飲過程、以師象（押小路）朝臣、節會事、自逍遙院（三條西實隆）被申談事有之、

十四日、戊戌、晴、及夜雨下、節會之事、內々遣使者、談近江守之處、御服要脚猶以不事行、可被置御質物由、御馳走之時分也、節會用脚猶有畏存、但可爲叡慮、就談合、不貽心底申入者也、急度可被申入候哉由返答、此子細招師象朝臣可申處、晩頭來、此由可傳達之由申遣者也、

十五日、己亥、時々雨降、逍遙院昨日返事、師象朝臣來申、以御服用脚之內、可被行如何、毎事余斟酌（廣橋守光）之由□□直被申而可然歟之由、師象朝臣令申處、大概領狀之樣□申付之者也、

先ヅ五千疋進獻

殘五十貫文ノ進獻

廿日、自飯尾近江方有使、御服用脚先先五千疋分可被進候、御請取可持下之由申、則此子細申長橋、景元（藤堂）ニ相渡請取、栗眞等遣近江許者、

請取申　要脚之事

合五十貫者、

右爲禁裏樣御服用脚、且所請取如件、

永正十七年十二月廿日　　廣橋家雜掌

景元判

直遣長橋之處、如此右京大夫折紙有之、扇代五十疋被下因幡（藤堂景元）者也、

御ふくの御物、かつ五千疋まいり候、めてたく候、たしかにうけとり候へく候、かしく、

十七年
十二月廿一日

うきやう

とうたうとのへ

廿七日、自近江方、中間來而云、御服用脚之殘可被遣之者、請取藤堂可持來、自殿中可申云々、則請取調之、申遣近江許者也、

請取申要脚之事

合伍拾貫文者、

永正十七年十二月二十日

幕府倉方定光坊

右爲禁裏樣御服用脚相殘、所請取如件、

永正十七年十二月廿二日　廣橋家雜掌　景元

如以前相調、遣近江許、近江加袖書、遣定光坊御倉、遣之、於彼方請取、納長橋者也、仍三百疋拜受、不慮天恩也、請取文如此、

御ふくの御物五千疋まいり候、めてたくうけとり候へく候、しゆし、

ゑい正十七年十二月廿七日　うきやう

いなはとのへらる

叡感ノ女房奉書

御ふくようきやく萬疋まいり候、ことにはや〳〵とけんてうにまいり候、御れう所とも心うつくしくまいり候いす候に、いつもの御事なから、一たんめてたくよろこひおほしめし候よし、御心え候て申され候へく候と、心えてよく〳〵申とて候、しゆし、

ひろいしとのへ

加銘遣近江許、則可令披露由申者也、

二十一日、乙巳、越後守護代長尾爲景、越中新庄城ヲ陷レ、神保慶宗等ヲ斬ル、尋デ、畠山尚順、之ヲ褒ス、

〔上杉家文書〕一

「（捻封ウハ書）長尾彌四郎殿（房景）御宿所　彈正左衞門尉（長尾）爲景」

「（端裏切封）」

慶宗等神通川ヲ越エ太田莊ニ陣ス

長尾房景ノ戰功

爲景之ヲ感謝ス

畠山卜山（尙順）相憑由、斷而被仰下候間、向越中國度々出陣、就中、今年初秋已來張陣處、神保越前守（慶宗）・遊佐彌九郎・椎名・土肥一類、越神通河、太田庄陣取、晝夜互成動砌、自寂前有同心御出陣、每度之矢師動等、殊昨日廿一、凶徒悉打振、新庄際へ取懸候上、遂一戰得大利、爲初神保越前守慶宗、其外遊佐・椎名・土肥親類被官數千人討捕、一國屬靜謐候、剩御同名被官數輩討死候、併被對國御粉骨無比類、於爲景祝著此事候、何樣卜山御感書軈而可申調候、恐々謹言、

十二月廿二日（永正十七年）　爲景（花押）

長尾彌四郎殿　御宿所

房景ノ同名被官ノ討死ヲ慰ム

今度各討死候、依之愁傷之由承候、更雖無餘義候、まけいくさこさへ、合戰のならいハ左様ニ不申候、況勝軍之討死ハ、努々なけかさる物ニ候、殊わかき人ハ、此末を祝事ニ候、しやうしんなと候てハ不可然候、目前ニ召仕候者無之候者、爰元ハはや用所無之候、歸國にて候、但多胡之様躰見度候者、可被打越候、ともかくも任心中候、此方ハ多胡へこへ候て、一國取候しるし、隣國之覺も是〔迄〕訖申候間、明日ハ直小澤へ可打歸候、恐々謹言、

爲景多胡ニ至リ小澤ニ歸陣セントス

（永正十七年）十二月廿四日　彈正左衞門尉　爲景（花押）

彌四郎殿

（折封ウハ書）「長尾彈正左衞門尉殿　卜山」

（端裏切封）「〻」

尚順ノ感狀

久張陳粉骨候、殊十二月二十一日、於新庄合戰、爲始神保越前守慶宗、數千人被討捕候、當手之衆數箇度合鑓、或討死或被疵之由候、戰功無比類候、殊更自身之働、古今之高名、難盡筆候、依一戰當國不移時日屬本意候事、滿足不及是非候、將又、太刀一腰・腹卷一領・薰肩赤甲在之、遣之候、彌無越度之様、對慶明異見賴入候、猶神保出雲守（慶明）可申候、恐々謹言、

爲景ニ太刀腹卷等ヲ贈ル

（大永元年）正月十九日　卜山（花押）

長尾彈正左衞門尉殿

（折封ウハ書）「長尾彈正左衞門尉殿　義總（畠山）」

（端裏切封）「〻」

畠山義總爲景ニ越中平定ヲ賀ス

越中國早速一變、誠以目出候、如芳札、卜山可爲喜悅候、時宜具令注進候間、定可被申越候、○中略、全文ハ大永元年二月十三日、義總、爲景ノ越中平定ヲ報ズルヲ謝スルノ條ニ收ム、

（大永元年）二月十三日　義總（花押）

長尾彈正左衞門尉殿

爲景尚順ノ感狀ヲ房景ニ傳達ス

越中張陣義、就中、去年極月廿一日一戰砌、各御動事、從畠山卜山可被成御感書分候、先以自某可申屆之由候間、乍憚進書狀候、○中略、全文ハ大永元年四月三日、爲景、再ビ越中ニ兵ヲ出サントシ、房景ニ出陣ヲ命ズルノ條ニ收ム、

永正十七年十二月二十一日　三三一

慶宗ノ傳一休宗純ニ宗茂ノ戒名ヲ與ヘラル
東海周洋ニ大樹ノ道號ヲ授ケラル

自筆書狀

小法師出產ニ就キ善法寺ノ物ヲ贈ルヲ謝ス

永正十七年十二月二十一日

（大永元年）四月三日　　彈正左衞門尉

長尾彌四郎殿　御宿所　　爲景（花押）

○爲景、越中境川城ヲ陷ルヽコト、八月三日ノ條ニ見ユ、以下、慶宗ノ傳ニカヽル、

〔光嚴東海和尚錄〕道號　前大德一休（宗純）老人、爲惟宗朝臣右金吾尉慶宗、安戒名、曰宗茂也、需雅號於余、（東海周洋）々弗護拒、以大樹二字命之、以小伽陀證之云、枝橫南北勢衝天、四海蔭涼臨濟禪、保得國家棟梁質、萬年喜色飽恩烟、

〔石淸水文書〕六　菊大路家文書

「（捻封ウハ書）善法寺ゟ御同宿中　　神保越前守

（端裏切封）「〻」　　慶宗」

就小法師產候、御卷數幷香水・御太刀壹腰被懸御意候、目出祝著之至候、次爲祝儀、太刀・參百疋令進入候、寔表祝儀計候、萬々一段可申入候、恐々謹言、

卯月廿六日　　慶宗（花押）

善法寺ゟ御報

慶宗花押

○慶宗ノ父長誠卒スルコト、文龜元年十一月十七日ノ條ニ、慶宗、爲景ト越中ニ戰フコト、永正十三年九月九日ノ條ニ、越中專念寺ニ禁制ヲ揭グルコト、同十四年六月是月ノ條ニ、爲景、越中境川城ヲ陷ルヽコト、本年八月三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕シ之部　神保慶宗

○專念寺文書（越中）

永正十四年六月日禁制

永正十七年十二月二十一日

永正十七年十二月二十五日

自署

○菊大路家文書（十三 山城）

卯月廿六日自筆書狀

明王院ノ競望

二十五日、己酉、若狹守護武田元光、同國神宮寺ノ、明王院ト、常滿保菊一名竝ニ八幡宮供僧職ヲ爭フヲ裁シ、神宮寺ヲシテ、之ヲ安堵セシム、

〔神宮寺文書〕（乾）○若狹

若州常滿保菊一名幷八幡宮供僧職事、明王院依競望、雖有糺明、理運明白之上者、神宮寺任當知行旨、永不可有相違、者更守先例、可被全寺務之狀如件、

永正十七庚辰年十二月廿五日　伊豆守（武田元光）（花押）

靈應山神宮寺

〔神宮寺文書〕（坤）○若狹

若州常滿保菊一名幷八幡宮供僧職等事、明王院依愁訴、被遂糺明候處、任當寺理運之旨、被成御判畢、守先例、永代可被全寺務之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正十七　十二月廿五日　元勝（毫屋）（花押）　國高（內藤）（花押）

神宮寺

二十六日、庚戌、播磨守護赤松義村、被官浦上村宗ニ制セラレ、足利義澄ノ子義晴ヲ奉ジテ、置鹽ヲ脫シ、同國榛谷ニ奔リテ、衣笠五郎左衞門ニ賴ル、

〔大山寺文書〕（二）○播磨　本堂汗之記文

一略○中（永正十七年）同年十一月十四日、自酉之時至子之時、如前大汗流出畢、同十二月廿六日、置鹽沒落在之、

〔赤松記〕　永正十七年○中略小鹽の體雜說とり〳〵にて、十二月廿六日の夜、公方樣義晴將軍、御ともにて、小鹽御のきなされ、明石の沖にはし谷と申所に、衣笠五郎左衞門館にて御

村宗義村ノ子才松丸ヲ擁シ國政ヲ專ニス

才松丸等三石ニ移リ老臣之ニ出仕ス

義村譜代ノ臣ヲ催ス

としをめされ、〇上下略

〔備前軍記〕 乾 赤松政村(義村)入道して小鹽退去の事

永正十七年十一月、赤松政村の嫡子才松丸、當年七歳なりしを、播備作の國主と稱し、浦上村宗も三石より小鹽へ出仕し、政事を思ふ儘にとり行ひければ、久米十郎左衞門も、難の至らん事を恐れ、其外にも小鹽家中、退去する者多く、小鹽城下靜かならされは、幼主才松丸幷政則(赤松)後室・政村の室とも、小鹽を出て、皆三石城へそ移られける、是故小鹽の赤松の老臣をはしめ、皆三石へ出仕して、殘る者ともは、常印(義村)に身近く從ひつかへける者はかり僅に殘りければ、常印も小鹽の住居もしかたなく、同十二月廿六日の夜忍ひ出て、舟に取のり、明石へ至り、榛石(谷)といふ所に着き、衣笠五郎左衞門を賴みて、再ひ望を達せんと、近臣分け遣して譜代の臣を相催されければ、弘岡左京・別所孫二郎則定・宇野勘解由村範・大石民部丞・香西少五郎・秋津孫四郎國元・同十靜坊・久米十郎左衞門等の、浦上村宗に背ける者とも集りて、百五十餘人衣笠か家を堅固しける、〇上下略

〇義村、村宗ヲ攻メントシテ、進發シ、部將小寺則職ノ敗死ヲ聞キテ、置鹽ニ歸ルコト、十月六日ノ條ニ、家督ヲ子才松丸ニ讓リ、薙髮スルコト、十一月是月ノ條

明年正月二十三日追行

ニ、村宗ヲ備前三石城ニ攻メントシ、御著ニ陣シ、弘岡左京ノ內應ニ依リ、玉泉寺ニ退クコト、大永元年二月十一日ノ條ニ見ユ、

二十七日、辛亥、內侍所恆例及ビ臨時御神樂ヲ延引ス、尋デ、之ヲ追行ス、

〔御かくらの事文龜より天文まで假名記〕 〇京都御所東山御文庫記錄甲百五十二所收 一永正十七年十二月廿七日のところに、御かくらい、としの中日もなし、春いとくおこないるへし、〇中略、四方拜ノコトニカヽル、大永元年正月一日ノ條ニ收ム、頭辨(日野內光)におほせらるゝ、

〔公卿補任〕 四十六 永正十八年二月廿一日(正)(三)、內侍所御神樂出御、

〔二水記〕 永正十八年正月十四日、〇中略 今日御神樂事有其催、御敎書寫之、

來廿三日、可被行內侍所臨時御神樂、可令候召人座給者、依天氣上啓如件、

正月十四日　左少辨賴繼(葉室)

謹上　鷲尾宰相殿(隆康)

追上啓、御所作可爲拍子候也、

請文如書了、

來廿三日、可被行內侍所臨時御神樂、可候召人座之狀、謹所請如件、

永正十七年十二月二十七日

正月十四日　參議〜(隆康)

秘曲ノ傳受

出御

神殿ニ入御臨時御神樂ノ次第

入御

追申、所作可爲拍子之旨、同奉了、

廿三日、早旦令行水、詣內侍所、風雪散亂以外也、入夜晴、珍重々々、午時神事之次、秘曲書目、令傳受、賜奧書如恆、爲御禮進折帋(馬・太刀)、表祝著之由了、年來無沙汰、當于時祝著也、戌半刻許著束帶、(先令行水如常、衣文、冷泉前黃、(永宣))移高倉亭(範久)、少時黃門(四辻公音)・少納言(範久)等著束帶、令同道參內、(就和琴所役事、有問答、仍移此刻、從奉行度々被譴責了、)就殿上口堂上、於男末一盞如例、亥終刻許出御、(先之新大納言典侍・宮內卿內侍等被參仕、其儀從臺盤所妻戶出東行、經長橋・紫宸殿御後等參進也、采女・刀自等扶持之、雖爲例年事、近年從內々被參歟、仍記之、)於鬼間邊密々奉見、仍廂內之儀不見、御裾頭辨內光朝臣(日野)、御劔雅綱(飛鳥井)朝臣役之、脂燭殿上人重親(庭田)・資能(富小路)等朝臣、範久・源諸仲(五辻)・橘以緒(薄)・藤原氏直(富小路)等也者、(勸修寺)(內光朝臣依歡樂早出、入御之御裾左少辨役之、)入御神殿如例、御鈴鳴之後各著座、(駒取著之、)地下笛一人著座、次音取了、從下﨟退入、次人長參進、召庭火、笛・篳篥・和琴、次第曲了著座、次與利合了、(鷲尾隆康)予參進唱曲、次末拍子了、近衞召人等悉著座、次安知女以下榊・韓神、(人長)乙了、才男了、薦枕(從誰贄人、)篠波・千歲・早歌等唱之如例、次勅使、(左少辨賴繼、於予座後仰之、予持笏微唯、)次笛・篳篥音取了、和琴菅攬一反了、則唱出之、(不打段拍子、略儀也、)三首了朝倉(笛・篳篥・和琴如常、)其駒(人長乙舞、)了、從下﨟退出如例、(先年委注之、仍今略之、)入御如出御、天氣屬晴、神慮可崇々々、退出之次參神殿、有

恆例御神樂始行

下﨟久康勤仕ス

所作人

奉行葉室賴繼

一盞、此間恆例始行、少時令聽聞退出了、時寅刻許云々、恆例之儀可尋記、今夜和琴所役事、先年季音(安倍)難澁、仍最末下﨟可役之由、雖被仰、各不致承伏、及遲々了、當年下﨟可役處、忠吉・忠國・忠宗、悉以令歡樂云々、仍最末下﨟久康可存出之由、奉行命之、者、久康申云、下﨟之儀爲勿論、雖然爲陪從之間、聊存其旨、近衞召人最末可被仰哉云々、此儀及數刻有問答、臨期遲々難決之間、出納〜役之訖、舊例有之云々、(例年著直垂參仕、今夜依所役著衣冠、)

所作人　臨時

本拍子　和琴　地下召人　恆例

隆康　四辻中納言(公音)　久康　本、、　笛

末拍子　笛　人長　資能(綾小路)、、　景通

資能朝臣　景通　安倍季敦　末、、　篳、

付歌　篳篥　忠時　橘、、

忠時　橘以緒　和琴　人長

久康　安部、、

〔守光公記〕(○東洋文庫所藏)　永正十八年辛巳、正月廿日、甲戌、晴、御神樂奉行沙汰人、左少辨賴繼也、

永正十七年十二月二十七日

廿一日、自葉室昨日散狀兩通 白帋、可進室町(義稙ヵ殿脱ヵ)之由、以書信申送之、則以景元可令進上、申次右京亮(伊勢貞遠)、珍重被思食之由也、

〔宣胤卿記抜書〕永正十八年辛巳、正月廿三日、内侍所御神樂也、奉行賴繼、彼家散狀ニ、人長不書之云々、

〔賴繼卿記〕○歷代殘闕日記百所收　永正十八年分

注進

内侍所御神樂御下行事

肆貫文　行事所
貳貫文　内藏寮
貳貫五百文　大膳職
壹貫五百文　近衞召人
壹貫五百文　所作陪從
壹貫文　木工寮
壹貫文　人長

散狀ヲ義稙ニ送ル

下行ノ注進

五百文　簟簀當年ハ不參、橘以緒參勤、
五百文　掌燈
三百文　部屋主
五百文　出納
以上拾五貫三百文

仍注進如件、
(大永元年)正月廿日

職盛

内侍所御神樂

笛
景通
簟簀
橘以緒
和琴

永正十七年十二月二十七日

内侍所臨時御神樂

笛
景通
簟簀
橘以緒
和琴

久泰　　四辻中納言
本拍子　　本拍子
資能朝臣　　鷲尾宰相
末拍子　　末拍子
忠時　　資能朝臣
各依不參、付歌無之、　付歌
忠時
禁裏・武家、一進之、
關白（二條尹房）、一進之、　人長ハ不書、當家先例如此也、

地下ノ所作人ハ出納コレヲ催ス

來廿三日、可被行內侍所御神樂、任例可令申沙汰、仍執達如件、

正月十四日（大永元年）　　右少辨賴繼（葉室）〔左、下同ジ〕
藏人中務丞殿　　自極臈、出納ニ加下知、地下ノ所作人ハ悉出納催之、

來廿三日、可被行內侍所御神樂、任例可被致沙汰之狀如件、

新大夫清方御神樂ニ出仕セズ

正月十四日（大永元年）　　右少辨判
四位大外記殿　　頭辨內光朝臣、依仰早出、還御之時、予候御裾、五位藏人近年候御裾事希也、先規ハ每度勿論也、一品禪門被申畢、（中御門宣胤）
大夫史殿　五位也、少辨料文言、同方依爲左大史左ノ家略之、〔字カ〕
各如例年、以一通觸也、
脂燭人々
重親朝臣・資能朝臣・範久・源諸仲・橘以緒・藤原氏直・雅綱朝臣　候御劔、頭辨內光朝臣候御裾、予（賴繼）御草鞋、尹豐、

〔壬生于恆記〕　○宮內廳書陵部所藏　永正十八年二月十六日、己亥、晴、自午時陰、大雨雷鳴、向中御門亞相（宣秀）對面、新大夫清方不思儀働等事語之給、內侍所御神樂清方不致出仕、弟末能元服男有之、著□（東カ）帯五位袍、懃其役、前代未聞所行也、
三月一日、癸丑、晴、過金光院、留守條、相待而相逢、就新大夫清方緩怠事、爲談合也、出盃、

幕府、德政令ニ依リ、田布施彌太郎ノ借錢ヲ棄破ス、

〔伊勢家書〕　○後鑑二百八十五所載

永正十七年十二月二十七日

十分一進納ニ依リ棄破

今年改ノ新田

新給恩

永正十七年十二月二十八日

田布施彌太郎申借錢拾貫文事、雖好取預狀、加利平之段分明上者、今度任德政法、〇幕府、德政ヲ令スルコト、二月十二日ノ條ニ見ユ、拾分一進納之條、被棄破之訖、宜被存知候由、被仰出也、仍執達如件、

永正十七　十二月廿七日　秀俊（松田）判　貞兼（治部）判

大森殿

遠江守護今川氏親、松井山城守ニ、同國榛原郡羽淵內新田ヲ充行フ、

〔蠹簡集殘編〕三〇土佐

遠江國榛原郡羽淵之內領家方、庚辰（永正十七年）年相改新田之事、

右爲新給恩、所充行如件、

永正十七年十二月廿七日　修理大夫（今川氏親）（花押）

松井山城守殿

二十八日、壬子、山城守護細川高國、同國不動院ヲシテ、九條城興寺分內石井美作守抱分田地作職等ヲ安堵セシム、

被官人分闕所屋

來春ノ參內ヲ待タセラル

鷲尾隆康禁中及ビ伏見宮第ニ歲暮ヲ賀ス

〔門主傳〕二十三〇華頂要略十二所收　桂蓮院入道二品親王　諱尊鎭、俗諱淸彥、

九條城興寺分內石井美作守抱分田地作職・同被官人分闕所屋等事、任度々御下知之旨、可被全領知之由候也、仍執達如件、

永正十七　十二月廿八日　貞船（齋藤）判

不動院雜掌

義稙、病ニ依リ、歲暮ノ參內ヲ拜辭ス、

〔守光公記〕〇東洋文庫所藏　十二月廿六日、有近江使（飯尾貞運）、明後日廿七日（八カ）、室町殿（義稙）御歲暮ニ、難有御歲暮御參候之間、可然之樣可申入云々、則申入之處、被聞食畢、春者早々御參被待思食之由、勾當返事有之、則申遣近江許者也、

〇鷲尾隆康、禁中及ビ伏見宮ニ歲暮ヲ賀スルコト、廣橋守光、其子兼秀ヲシテ、幕府ニ歲暮ヲ賀セシムルコト等、便宜左ニ合敍ス、

〔二水記〕十二月卅日、晩頭著直垂、伏見殿其外近邊令巡行、歲末之禮了、入夜改衣冠參內、申御禮、於御三間御對面如例、年中無事、珍重々々、

永正十七年十二月二十八日

廣橋守光ソノ子兼秀ヲシテ幕府ニ歳暮ヲ賀セシム

近衞尚通第歳暮賀禮ノ人々

〔守光公記〕 ○東洋文庫所藏 十二月卅日、室町殿歳暮之參賀、依歡樂、侍從令祇候之處、俄御風氣之間、不可有御對面、春早々可有祇候、可有御對面由、各々申次令謁云々、自室町殿、佳例御扇拜領、式部少輔(廣橋兼秀)使也、畏存之由、侍從令面謁者也、年始每事滿足、不可過之、多幸々々、

〔後法成寺尚通公記〕 十二月卅日、丙寅、晴、三條宰相中將(正親町三條公兄)・廣橋侍從・細川右馬頭(升賢)・雜務・奥坊・堀川判官・小原判官・朝藏主・宗碩、從典厩女中、北政所江五合五荷被送之、朽木使也、

是歳、前典藥頭從三位半井明重薨ズ、

〔半井家系〕 ○東京

茂成
- 明重 正四位上、宮內少輔、施藥院使、典藥頭、昇殿、從三位、甲斐權守、永正四年六月廿四日出家、法名宗鑑、永正十六年十月廿四日卒、五十八、實丹波重長二子也、
- 明孝

〔尊卑分脈〕 諸氏和氣

茂成 改明茂、
- 時尚 本尚成、早世、
- 明重 昇殿、施藥院使、典藥頭、從三、宮內少甫、甲斐守、出家、實重長子、
- 明孝

〔諸家大系圖〕 四和氣氏

尚成 改時尚、權侍醫、
- 明重 施藥院使、典藥頭、正四上、宮內少輔、昇殿、甲斐守、始准武家醫、爲法師之體、法名宗鑑、典丹波重長適子、豫知醫術之達才、養爲子、自是和氏爭丹家之醫道、雖不經僧位、聽着直綴白袴、列諸醫之座上、
- 利長 刑部少輔(尊)、從五下、法名道三、實明重弟子也、以醫術之精兼ヌル始メテ實子ヲ廢シテ利長ヲ養子トナス、廢實子爲養子、醫書之諸妙等多出于利長手、永正四正五卒、

法名宗鑑 五十八歳 丹波重長ノ子

世系

和氣氏丹波氏ノ醫道ヲ

半醒軒ト號ス

〔系圖纂要〕 九十二 和氣

時尚本尙成、權侍醫、

- 明重 實丹波重長卿男、昇殿、施藥院使、文明六年從五下、同十三年從五上、甲斐守、明應二年正五下、文龜二年從四上、正四下、永正四年六ノ從三、同月出家、始准武家醫、爲法師體、法名宗鑑、依實重長卿適子、交和和丹兩家、達才人、聽直綴白袴、列諸醫之上、
  - 明孝 文龜二年甲斐守、永正三年宮內大輔、同十二年施藥院使、同十七年兵庫頭、同十八年典藥頭、大永六年從三、治部卿、天文三年正三、
  - 明澄 入道
- 利長 明重門弟、從五下、刑部少輔、法名道三、以醫術精發明重卿養爲子、永正四年正ノ五卒、

〔寬政重脩諸家譜〕 六百七十九 和氣氏 半井

茂成

- 明重

施藥院使、典藥頭、宮內少輔、今の呈譜宮內大輔、甲斐守、正四位上、今の呈譜從四位上、昇殿、剃髮號宗鑑、半醒軒、實は典藥頭丹波重長か長男、茂成か養子となり、和氣・丹波の兩流をかぬ、後土御門院明應年中、はしめて薙髮して宗鑑と號す、

- 利長

典藥頭、刑部少輔、今の呈譜刑部大輔　從五位下、剃髮號道三、實は丹波重長か男、明重か弟、明重か養子となる、

〔公卿補任〕 四十五 永正四年

非參議從三位和明重、六月日薨、元典藥頭、同月日出家、後年以出家已前日付宣下云々、故入道正二位明茂卿男、母、實故從三位丹波重長卿男、

〔歷名土代〕

從五位下和明重、同(文明)六三十七、
從五位上和明重、同(文明)十三正十九、同日甲斐守、
正五位下和明重、同(明應)二正六、
從四位下和明重、同(明應)八十十、同九三、典藥頭、
從四位上和明重、文龜二二四、
正四位下和明重、同(永正)二五六、同四六、出家、

〔半井家系〕 ○東京

半井之記

和氣某得醫術爲上工矣、王亦多病、故使某居蕭牆之內、而便近召之也、於是一井幹之

和扁鵲ト稱セラル

正中架横木、木上築墻、公私相半而充炊爨之用也、此重寵其人也、故自此以稱半井也、曰某者爲誰乎、予曾見安立家藏之太平聖惠方第二卷、跋曰、以半井殿宗鑑本書寫之、永正十一年三月日云爾、是丹波賴量手自鈔之也、由之觀之、則自明重始乎、明重和丹兩家之棟梁、而世稱和扁鵲也、明重後致仕、祝髮曰宗鑑、自宗鑑前永見稱半井者、故書以俟博覽之士而已、歳在辛未秋九月望日、旹元祿之四年也、

〔半井家先祖書〕 ○和泉 私より十七代以前之先祖、實丹波家〔重長〕重嫡男、繼和氣家、明重 賜紫纓 正四位上 典藥頭・宮內大輔、

和氣正衡謹書

後土御門院樣御宇、明應年中初而薙髮仕、半醒軒、法名宗鑑與申候 ○中略

弘化三丙午年九月　典藥頭 半井出雲守（花押）

近衞尙通ヲ訪フ

〔後法成寺尙通公記〕 永正三年二月一日、辛亥、晴、○中略 典藥明重朝臣等來、令對面、勸一盞、

五年二月一日、己巳、晴、○中略 半井入道〔明重〕等來、令對面、勸一盞、

尙通ニ短册ヲ與ヘラル

廿一日、己丑、晴、半井入道來、令對面、給一盞、

三月一日、己亥、晴、入夜小雨洒、半井入道先度短尺書遣之間、爲其禮來也、令對面、給一盞、

八年九月廿日、丁卯、晴、日野・半井宗鑑來、令對面、勸一盞、

出家ノ後始メテ三條西實隆ヲ訪フ

〔實隆公記〕 永正五年二月廿日、戊子、晴、○中略 宗鑑 半井明重入道、來、出家後初度也、携一荷、盃酌、前右大辨三位〔高辻章長〕來會、

六年八月廿六日、丙戌、陰晴、明重法師 宗鑑、良藥所望、遣北政所了、小減之由被報、自愛也、

明重ノ子女二男康長

七年十一月廿五日、丁丑、晴、○中略 明重入道來、康長 重長遺跡、明重二男、元服、相具之、携一腰來、對面、珍重之由謝之、

見孝

〔聾盲記〕 永正十七年正月廿八日、見孝越劦ヘ罷下也、見孝ハ余カ弟、

二月廿八日、○中略 今日自越前一乘、中間與二郎罷上ル也、余カ弟ノ見孝、無事ニ著岸也、見孝ハ北山本願寺也、半井氏寺ナリ、御亭樣御無恙也ト云々、

明重昵懇ノ齋藤吉用

彌生廿六日、予妹去月晦ニ嫁スル也、祝著々々、越劦ノ新城ト云所也、次今日北國ヨリ便風アリ、齋藤民部丞吉用〔モチ〕、今月廿一日ニ遠行也、彼仁者朝倉孝景之內ノ者也、老父〔明重〕ニ無等閑仁也、一段周憚無申計、

明重鞍馬寺ニ參詣シテ病ム

卯月四日、一昨夜ノ夢ニ、予下越州一乘谷、拜老父申、已而老父ノ曰、予汝授脉之秘用、然處愚拙歡喜スル也、不審ナル事、一二句尋ネ申ト夢ル也、祝著無申量也、今案スルニ、短夜ナル間、夢ノ早ク覺テ、シカ〳〵トモ不授事、千万口惜也、

明孝ノ復任除服出仕

○月闕ク、九日、○中略又云、予カ老父（卅餘歳ノ時、宗鑑、鞍馬寺ヘ參リ、飲酒過多、骨ヲ折、山上山下ヲ登走シ給フノ處ニ、俄ニ虫胷ヘ上リ、吐逆無正體、種々藥ヲ服用シ給ヘ共、驅而吐逆シ給、以外勝事、一大事ナリシ處ニ、妙香圓ヲ服ノ御覽シタレハ、不吐ノ御タモチアル也、重而服用シ給ヘハ、虫落入也、

〔宣胤卿記抜書〕

十二月十七日、秀房（萬里小路）朝臣狀、和氣明孝朝臣復任除服出仕事、

正四位下和氣明孝朝臣　宜令復任、

和氣明孝朝臣　宜令除服出仕、

右狀返答云、無當官者、不可有復任宣下、當官可有御尋候、復任ノ二字をハ何と御心得候哉、除服宣下にも可有位候、

十九日、秀房朝臣狀、一昨日明孝朝臣復任事、爲施藥院使云々、又令見案、

正四位下施藥院使和氣明孝朝臣

宜令復任、

如本、

返答云施藥院使無相當位歟、何樣位有上不可然、略位不書之條可然歟之由返答了、位署書樣故實事問之、官位相當者、以官書上、不相當者、以位書上、位貴官賤書行字、官高位賤書守字、官位相當者不書行守、

○明重薨去ノ日ヲ、半井家系ハ十六年十月二十四日トナセドモ、宣胤卿記抜書及ビ聾盲記ノ記事ニ依リテ、之ヲ本年ト推定シ、姑ク是歳ニ掲グ、明重、薙髪スルコト、四年六月是月ノ條ニ、勅勘ヲ免サル、コト、六年六月六日ノ條ニ見ユ、ナホ、明重室、越前ニ於テ歿スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔今川爲和集〕二

○宮内廳書陵部所藏

（永正十七年）三月廿二日、半井明孝母、越前國にて身まかりけるに、あくるとしのおなし日よめる、

やよいかにこし路の鴈の名殘さへ三月の空にしたふへしとい

〔參考〕

〔皇朝醫史〕下　和氣朝臣明重

永正十七年是歳

明重、時尚弟、實丹波重長子、(伴井)明茂豫知其醫術達才養爲子、系圖、文明六年三月敍從五位下、利長明重ノ子ヲ以テ己ノ家ヲ繼ガシメ自ラハ明重ノ家ヲ繼グ

十三年正月敍從五位上、任甲斐守、明應二年正月、敍正五位下、歷名土代、尋而補施藥院使、和長卿記、八年十月敍從四位下、九年九月任典藥頭、文龜二年二月敍從四位上、永正二年五月敍正四位下、四年六月六日薙髮、歷名土代、自號半醒軒(半井)系圖、宗鑑、系圖、是日特賜從三位之位記、公卿補任、又別勅被聽着直綴白袴、十六年十月廿四日卒、年五十八、系圖、案、十六年恐十七年之誤、宣胤卿記永正十七年十二月十七日、(晨)戰和氣明孝復任除服宣下之事、十月廿四日至十二月十七日、其間五十二日、當復任之期、書以俟後考、

丹波朝臣利長

利長、重長子、系圖、初名定長、○中略既而辭官、以兄和氣明重子繼己家、自入贅明重之家、薙髮而號道三、○下略

丹波朝臣保長

保長、和氣明重子、繼丹波利長之家、冒丹波氏、任兵庫頭、系圖、○下略

〔皇國名醫傳前編〕中和氣氏○上略尚成、後改時尚、歷權侍醫・治部少輔・宮內少輔、無子、養丹波明重爲嗣、明重、伎名蚤著、歷施藥院使・典藥頭、兼甲斐守、晚削髮曰宗鑑、號半醒軒、敍從三位、子明孝、歷施藥院使・權侍醫・典藥頭、兼甲斐守・宮內少輔・兵庫頭・治部卿等、晚削髮曰宗乘、敍正三位、○中略利長、本明重門人、明重愛其才、以爲義子、任刑部少輔、晚削髮曰道三、

筑前少貳資元、大內義興ニ、少貳氏ノ世臣筑紫・江上・朝日等ノ諸氏ヲ擧用セザランコトヲ求ム、

〔歷代鎭西志〕十(永正)十七年、庚辰、太宰少貳資元、使宗讚岐守(義盛)於大內義興曰、如筑紫・江上・朝日氏者、少貳之世臣也、雖然、依貴方之登庸、動爲寇讐也、希勿擧焉云々、

對馬守護宗義盛、朝鮮ニ土宜ヲ遣ル、

〔中宗大王實錄〕三十九庚辰(永正十七年)十五年(大明正德)、五月、戊子朔、乙巳(十八日)、對馬島主宗盛順(義盛)、遣人來、獻土宜、

年末雜載

天文・災異、

月形ヲ變ズ
歲星月ヲ犯ス
地震
降雹
洪水
廬山寺藪付火
肥後大慈寺火ク

〔實隆公記〕四月廿七日、乙酉、晴、曉天月形變、今日諸入馳走、

〔聾盲記〕六月十五日、去十一日戌時、歲星（ヲカス）月、相去一尺、（勘解由小路）賀家在富（秘）堪文ニ云、兵亂期一年、民流散、臣殺君、子敎父、宮室火事、高辻曰、穴勝月ノ傍ヘ近クヨラネ共、一二尺ノ間ニ星アレハ、必（ヲカシ）タル心也、

〔實隆公記〕二月廿二日、辛巳、晴、○中略曉天地震、八月九日、甲午、晴、○中略未刻地震、十一月十六日、○中略晝間地震、

〔實隆公記〕三月五日、癸巳、風雨、時々日光現、雹飛、

〔永正十七年記〕六月十五日、大雨、洪水、

〔實隆公記〕正月廿四日、甲寅、雪雨、及晚晴、○中略良秀大德入來、一昨夜廬山寺藪付火事語之、

〔新撰事蹟通考〕十編年考徵八　（永正）十七年庚辰、春三月十二日、庚子、大慈禪寺火、（寺記）、

會津塔寺村觀音ノ仁王ノ腹裂ク
諏訪社大祝諏訪賴俊ノ襲職
皇大神宮大子良ノ交替
下野今宮社祭禮
會津塔寺八幡宮大般若

〔異本塔寺長帳〕四　（永正十七年）二月二日、會津塔寺村觀音ノ仁王ノ腹裂ス、至六月合腹、

神社、

〔信州諏訪祠文書〕舊神長官守矢氏記錄寫　一永正十七年庚辰十二月廿六日、（諏訪）賴隆嫡子（諏訪）賴俊五歲ニテ大祝立給、神長（守矢）賴實、如先例御裝束著申、袴腰結申候時、禰宜我結ハント被申候、自前々神長役候ヲ、被懸手ヲ候、口惜次第之由申、互ニ兎角問答候處、彼大祝祖父安藝守（諏訪）賴滿、互問答無益、今度ハ先々我袴腰ヲ結ハント仰候而、禰宜ト神長居タル間ニ分入、賴滿御裝束爲召候、御卽位ノ大事ハ授不申候、○下略

〔內宮子良館記〕一永正十七年庚辰正月廿一日、大子良下給、十七歲、七歲ヨリ十七マテ十年也、

同年四月八日、大子良居被申、山田前野與六息女也、八歲、

〔今宮神社祭記錄〕○下野　同（永正）十七、庚辰、氏家頭、　栗島鄕

長山之代官小窪雅樂助御供不參候、

〔塔寺八幡宮長帳〕六○岩代　永正十七年甲（庚）辰正月八日開白、　十日結願、